

# 伊賀国府跡（第4次）発掘調査報告

1 9 9 2 ・ 3

三重県埋蔵文化財センター

## 例 言

1. 本書は、平成3年度県営ほ場整備事業（上野北部）に係わる伊賀国府推定地の発掘調査の結果をまとめたものである。
2. 調査に掛る費用は、その一部を国庫補助金を得て県教育委員会が、他は県農林水産部が負担した。
3. 調査は三重県教育委員会が主体となり、三重県埋蔵文化財センターが担当し、報告書作成は三重県埋蔵文化財センターが担当した。
4. 今回は、伊賀国府推定地の範囲を確認するために行った調査である。本書では、過年度のトレンチ調査や面調査で地区が重複することなどから、過去の調査の概要も併せて、栢植川の南部と北部、北部をさらに地区別に分け記述することにする。
5. 伊賀国府推定地の調査および遺物整理については、指導員として次の先生方の指導と助言を得た。

八賀 晋（国立三重大学人文学部）  
小笠原 好彦（国立滋賀大学教育学部）  
高橋 誠一（国立滋賀大学教育学部）  
勝山 清次（国立三重大学人文学部）  
山中 敏史（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター）
6. 本書で報告した遺構の記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。
7. 本書に使用した遺構表示記号は下記のとおりである。また、遺構実測図作成にあたっては、国土調査法による第Ⅵ座標系を基準としている。方位の座標は座標北を用いた。

S B : 据立柱建物 S H : 竪穴住居、S D : 溝  
S A : 欄、塀 S K : 土坑 P : ピット  
S X : 墓、その他性格不明遺構
8. 本書の編集は泉雄二が担当し、栢植川南部を服部久士、北部を泉が執筆した。また、遺物写真の撮影は、泉の他に木製品は天野秀昭が行なった。なお写真図版については、断りのない限り縮尺は1 : 3である。
9. 遺構番号は栢植川の北部と南部でそれぞれ付けた。北部の調査の遺構番号は、岩坂・追越地区を1000番まで、国町を1001番～、前田地区を2001番～とした。
10. 本書作成以前に「三重県伊賀国府跡」「日本考古学年報」日本考古学協会掲載原稿などで中間的な報告を行ったが、本報告を正式報告とする。

# 目 次

I. 前言 .....	(泉 雄二) ... 1
1. 調査に至る経緯 .....	1
2. 調査体制 .....	3
II. 位置と環境 .....	(泉 雄二) ... 4
III. 柘植川南部の調査 .....	(服部久士) ... 8
1. 印代東方地区 .....	8
(1) 遺構	
(2) 遺物	
2. その他の印代地区 .....	16
3. 一之宮・千才地区 .....	17
4. 小結 .....	17
IV. 柘植川北部の調査 .....	(泉 雄二) ... 18
1. 岩坂地区 .....	18
2. 追越地区 .....	20
(1) 弥生時代の遺構	
(2) 古墳時代の遺構	
(3) 飛鳥時代の遺構	
(4) その他の遺構	
(5) 掘立柱建物について	
(6) 小結	
3. 国町地区 .....	26
(1) 古墳時代の遺構	
(2) 奈良時代後期から平安時代初期の遺構	
(3) 平安時代前期の遺構	
(4) 平安時代中期の遺構	
(5) 平安時代後期の遺構	
(6) 時期不明・その他の時代の遺構	
4. 前田地区 .....	50
(1) 東北部 (E2) の概要	
(2) 東南部 (E5) の概要	
(3) 中央北 (E3) の概要	
(4) 中央南部 (E6) の概要	
(5) 西部 (E4) の概要	
(6) 小結	
5. 遺物 .....	55
(1) 縄文～弥生時代の遺物	
(2) 古墳時代の遺物	
(3) 飛鳥・奈良時代の遺物	
(4) 平安時代初期の遺物	
(5) 平安時代前期の遺物	
(6) 平安時代中期の遺物	
(7) 平安時代後期の遺物	
(8) 建物出土の遺物	
(9) その他の遺物	
V. 結語 .....	(泉 雄二) ... 100
1. 平安時代の土師器について .....	101
2. 政庁城の変遷について .....	103

# 図 版 目 次

I. 前言	
第1図 字切り図	2
II. 位置と環境	
第2図 遺跡位置図 (1:50,000)	5
第3図 遺跡位置図 (1:25,000)	7
III. 柘植川南部の調査	
第4図 印代東方地区調査区平面図 (1:10,000)	8
第5図 印代東方地区遺構平面図 (1:200)	9
第6図 遺物実測図 柘植川南部 (1)	11
第7図 遺物実測図 柘植川南部 (2)	13
第8図 遺物実測図 柘植川南部 (3)	15
IV. 柘植川北部の調査	
第9図 柘植川北部調査区位置図 (1:4,000)	18
第10図 岩坂地区調査区位置図 (1:2,000)	19
第11図 B4-7調査区遺構配置図 (1:200)	19
第12図 追越地区調査区位置図 (1:2,000)	20
第13図 S D 13遺物出土状況 (1:40)	20
第14図 追越地区遺構平面図 (1:200)	21・22
第15図 S D 8遺物出土状況 (1:50)	23
第16図 S B 6遺構平面図 (1:100)	24
第17図 C1-14調査区遺構平面図 (1:100)	24
第18図 S B 18遺構平面図 (1:100)	25
第19図 S B 20遺構平面図 (1:100)	25
第20図 国町地区調査区位置図 (1:2,000)	26
第21図 正殿、前殿地区遺構平面図 (1:100)	29・30
第22図 S D 1010遺物出土状況 (1:40)	31
第23図 西脇殿 S B 1084・1085遺構平面図 (1:100)	33
第24図 西脇殿 S B 1090・1095遺構平面図 (1:100)	34
第25図 東脇殿 S B 1070～1073・1075遺構平面図 (1:100)	35
第26図 S A 1052遺構平面図 (1:100)	36
第27図 S B 1015・1016遺構平面図 (1:100)	37
第28図 S B 1020遺構平面図 (1:100)	38
第29図 S B 1105遺構平面図 (1:100)	39
第30図 S B 1001・1047・1022遺構平面図 (1:100)	40
第31図 D5-3調査区西部遺構平面図 (SA1040)(1:100)	41
第32図 S K 1030遺構平面図 (1:40)	42
第33図 D5-9東調査区南側遺構平面図 (1:100)	42
第34図 S B 1093・1094・1100・1102遺構平面図 (1:100)	44
第35図 D5-9西調査区遺構平面図 (1:100)	46
第36図 S D 1080遺構平面図 (1:50)	47
第37図 前田地区調査区位置図 (1:2,000)	50
第38図 前田地区東西・南北断面略図 (1:1,000、高さは1:150)	50
第39図 E 2 調査区遺構平面図 (1:200)	51



第40図	E 5 遺構平面図 (1:200)	.....52
第41図	E 3 遺構平面図 (1:200)	.....53
第42図	E 6・E 4 遺構平面図 (1:200)	.....54
第43図	遺物実測図 (1) 縄文・弥生時代	.....55
第44図	遺物実測図 (2) 古墳時代	.....56
第45図	遺物実測図 (3) 飛鳥・奈良時代	.....57
第46図	遺物実測図 (4) 平安時代初期～前期	.....59
第47図	遺物実測図 (5) 平安時代前期	.....61
第48図	遺物実測図 (6) 平安時代前期	.....63
第49図	遺物実測図 (7) 平安時代前期	.....65
第50図	遺物実測図 (8) 平安時代中期	.....66
第51図	遺物実測図 (9) 平安時代中期	.....68
第52図	遺物実測図 (10) 平安時代中期	.....69
第53図	遺物実測図 (11) 平安時代後期	.....70
第54図	遺物実測図 (12) 平安時代後期	.....71
第55図	遺物実測図 (13) 掘立柱建物出土遺物	.....72
第56図	遺物実測図 (14) 掘立柱建物出土遺物	.....73
第57図	遺物実測図 (15) 硯類	.....74
第58図	硯出土分布図	.....75
第59図	遺物実測図 (16) 緑釉陶器ほか	.....76
第60図	緑釉陶器出土分布図	.....77
第61図	遺物実測図 (17) 墨書土器ほか	.....78
第62図	遺物分布図	.....79
第63図	遺物実測図 (18) 土錘	.....80
第64図	遺物実測図 (19) 木製品	.....81
第65図	遺物実測図 (20) 木製品	.....82

## V. 結語

第66図	国庁域範囲概念図	.....100
第67図	政庁建物配置図 (奈良時代後期～平安時代前期前半)	.....104
第68図	政庁建物配置図 (平安時代前期)	.....105
第69図	政庁建物配置図 (平安時代中期)	.....105
第70図	政庁建物配置図 (平安時代後期)	.....106
第71図	土師器変遷図	..... 107・108
第72図	黒色土器変遷図	..... 109・110

## 付図

付図1. 国町地区遺構平面図 (1:200)

# 表 目 次

I. 前 言	
第 1 表	調査の経緯 .....1
II. 柘植川南部の調査	
第 2 表	印代東方地区 遺物・建物一覧表 .....10
第 3 表	遺物観察表・柘植川南部 ( 1 ) .....12
第 4 表	遺物観察表・柘植川南部 ( 2 ) .....14
第 5 表	遺物観察表・柘植川南部 ( 3 ) .....16
III. 柘植川北部の調査	
第 6 表	追越地区建物規模表 .....25
第 7 表	国町地区時期別遺構一覧表 .....26
第 8 表	国町地区建物規模表 .....49
第 9 表	S K 1086出土破片土器計数表 .....60
第10表	S K 1086出土土師器法量分布 .....60
第11表	S K 1009出土破片土器計数表 .....62
第12表	S K 1009出土土師器法量分布 .....62
第13表	S K 1035出土破片土器計数表 .....64
第14表	S K 1035出土土師器法量分布 .....64
第15表	S K 1012出土土師器法量分布 .....66
第16表	S K 1012出土破片土器計数表 .....66
第17表	S K 1077出土土師器法量分布 .....67
第18表	S K 1054出土破片土器計数表 .....70
第19表	S K 1054出土土師器法量分布 .....70
第20表	緑釉陶器器種別・産地別一覧表 .....77
第21表	馬衝出土地区一覧表 .....79
第22表	土錘重量分布 .....80
第23表	遺物観察表・柘植川北部 ( 1 ) .....83
第24表	遺物観察表・柘植川北部 ( 2 ) .....84
第25表	遺物観察表・柘植川北部 ( 3 ) .....85
第26表	遺物観察表・柘植川北部 ( 4 ) .....86
第27表	遺物観察表・柘植川北部 ( 5 ) .....87
第28表	遺物観察表・柘植川北部 ( 6 ) .....88
第29表	遺物観察表・柘植川北部 ( 7 ) .....89
第30表	遺物観察表・柘植川北部 ( 8 ) .....90
第31表	遺物観察表・柘植川北部 ( 9 ) .....91
第32表	遺物観察表・柘植川北部 ( 10 ) .....92
第33表	遺物観察表・柘植川北部 ( 11 ) .....93
第34表	遺物観察表・柘植川北部 ( 12 ) .....94
第35表	遺物観察表・柘植川北部 ( 13 ) .....95
第36表	遺物観察表・柘植川北部 ( 14 ) .....96
第37表	遺物観察表・柘植川北部 ( 15 ) .....95
第38表	遺物観察表・柘植川北部 ( 16 ) .....97
第39表	遺物観察表・柘植川北部 ( 17 ) .....99

# 写真目次

## 柘植川南部

- PL 1 柘植川南部 航空写真(南から)、SB 3(東から)、SB 5(北から)  
 PL 2 ◇ SD 2(東から)、SB 1(西から)、SX 7(西から)、SB 9(北から)  
 PL 3 ◇ 遺物

## 柘植川北部

- PL 4 柘植川北部 航空写真(西から)、国町地区 航空写真(北から)  
 PL 5 国町地区 正殿SB 1055(東から)、  
 正殿SB 1055・1056・前殿SB 1065・1066(東から)  
 PL 6 ◇ 西脇殿SB 1084・1085・SA 1091(北から)、  
 西脇殿SB 1085・1090(北から)  
 PL 7 ◇ D 5-6調査区東南部(東脇殿)(北から)、  
 東脇殿SB 1071礎石据付痕(北から)、同柱穴断割(東から)  
 PL 8 ◇ SA 1052(東北から)、(南から)、SD 1010(北から)  
 PL 9 ◇ SB 1105(東から)、SB 1020・1022(東北から)  
 PL 10 ◇ SB 1020・1021(北から)、SB 1015・1016(北から)  
 PL 11 ◇ SB 1001(北から)、SB 1100(東から)、  
 SB 1093・1094(西から)、SB 1047(北から)  
 PL 12 ◇ D 5-9西調査区(北から)、SD 1079(北から)、D 5-3調査区(西から)、  
 SD 1080(南から)、SK 1030(西から)、SB 1084柱穴断割(西から)  
 PL 13 追越地区 航空写真(北から)、SD 4(北から)  
 岩坂地区 SB 1(西から)  
 PL 14 追越地区 SH 9・SB 10-12(北から)、SB 6(北から)、  
 SD 8(南から)、SD 8遺物出土状況(北から)、矢板出土状況(北から)  
 PL 15 ◇ SD 13(北から)、SD 16(南から)、SB 18(南東から)、  
 SB 20(南から)、SA 27(北から)  
 PL 16 前田地区 SB 2001(東から)、SB 2004(北から)、  
 SB 2015(東から)、SB 2022(東から)  
 PL 17 遺物 SD 4・8、SH 9  
 PL 18 ◇ SD 8・16、SB 2022、SD 2110  
 PL 19 ◇ SD 1010、SK 1011  
 PL 20 ◇ SK 1086・1009  
 PL 21 ◇ SK 1035・1012  
 PL 22 ◇ SK 1017、整地層、SK 1054  
 PL 23 ◇ SD 1069、SK 1014、掘立柱建物出土遺物  
 PL 24 ◇ 円面硯、風字硯  
 PL 25 ◇ 猿面硯、緑釉陶器など  
 PL 26 ◇ 土馬、馬歯、土製品、石製品など  
 PL 27 ◇ 墨書土器  
 PL 28 ◇ 木製品(木簡・下駄・曲物)  
 PL 29 ◇ SD 8出土木製品

# I. 前 言

## 1. 調査に至る経緯

これまで伊賀国府は、柘植川と服部川にはさまれた沖積平野に4町あるいは6町四方の規模で存在が推定されていた。ところが、この地域を対象に県営は場整備事業が計画されたため、その取扱いについて関係機関と協議を重ね、昭和63年度から三重県教育委員会が国府跡の有無及び範囲を確認することになった。

昭和63年・平成元年は、柘植川と服部川に挟まれた沖積平野で調査を行った。発掘調査に先立って地名、水掛かり等の予備調査を行い、この成果をもと

に国府の範囲を方4町と想定した。発掘調査は予備調査を基に致庁部の建物及び区画する施設（溝）の範囲を確認するため、幅3mのトレンチで調査を実施した。

調査の結果、検出した遺構は奈良時代～平安時代のものは少なく、柘植川南部に伊賀国府の存在する可能性は低いことが確認された。また、印代地区で、弥生時代後期を中心とした整穴住居・土坑・溝・方形周溝墓等を検出し、東西600m、南北200mの範囲に弥生時代の集落の広がることが明かとなった。

年 月	概 要
昭54年～	・上野農林事務所に、推定地が事業化される場合の事前協議を要請。
昭62, 5 6	・上野市新地課と地元との協議→昭和63年度事業化予定。 ・昭和63年度事業化見通しのため、文化課が農林水産部から執行委任をうけて範囲確認調査を実施し、事業との保存の調和を図る方法で検討。
63, 2	・文化課として国府推定地の保存については、県営は場整備事業地内発掘調査の一環として事前に発掘確認調査を実施し、事業との保存の調和を図る方法を決定。 ・第1回指導委員会議開催→予備調査及びその結果による試掘溝の位置決定等の指導。
63, 7	・文化課、農村整備課、新地課、上野農林事務所による協議→計画調査の再確認と協力を依頼。 ・第2回指導委員会議開催→予備調査の結果報告及び調査地区の設定等の指導。
8	・第1次範囲確認調査開始。～平成元年2月
10	・第3回指導委員会議開催→第1次範囲確認調査の報告及び今後の取扱いの指導。
12	
平成, 6	・第4回指導委員会議開催→予備調査の結果報告及び調査地区の設定等の指導。
10	・第2次範囲確認調査開始。～平成2年1月
12	・第5回指導委員会議開催→第2次範囲確認調査結果の報告及び今後の取扱いの指導。 ・第2次範囲確認調査現地説明会開催。
平2, 4	・第6回指導委員会議開催→2年間範囲確認調査結果の総括及び平成2年度調査地区設定と留意点の指導。
7	・伊賀国府跡推定地の発掘調査に関する地元説明会開催。
9	・第3次範囲確認調査開始。～平成3年2月
3, 1	・埋蔵文化財センター、上野農林事務所、上野北部土地改良区による協議→第3次範囲確認調査の結果報告、今後の調査計画、国府の可能性及びは場整備とその方法等協議 ・第7回指導委員会議開催→第3次範囲確認調査結果の報告及び今後の計画等の指導。 ・第3次範囲確認調査現地説明会開催。
平3, 5	・埋蔵文化財センターと文化振興課で国府跡推定地に関する基本的な考えを調整し、「伊賀国府跡推定地の保存とその取扱いについて」(案)を作成。同年6月、農村整備課、上野農林事務所に提示し、説明。
7	・第8回指導委員会議開催→今までの調査結果の報告・今後の取扱い及び「伊賀国府跡推定地の保存とその取扱いについて」(案)について指導。上野市教育委員会も同席。
10	・埋蔵文化財センター、上野農林事務所、上野北部土地改良区による協議→「伊賀国府跡推定地の保存とその取扱いについて」(案)の説明
12	・第4次範囲確認調査開始。～平成4年2月 ・第9回指導委員会議開催→第4次範囲確認調査結果の報告。国可地区で検出した遺構は致庁部にあたることをほぼ確認するが、範囲については不明な点が多いので今後も範囲を確定するための調査が必要であるとの指導。
平4, 1	・第4次範囲確認調査現地説明会開催。

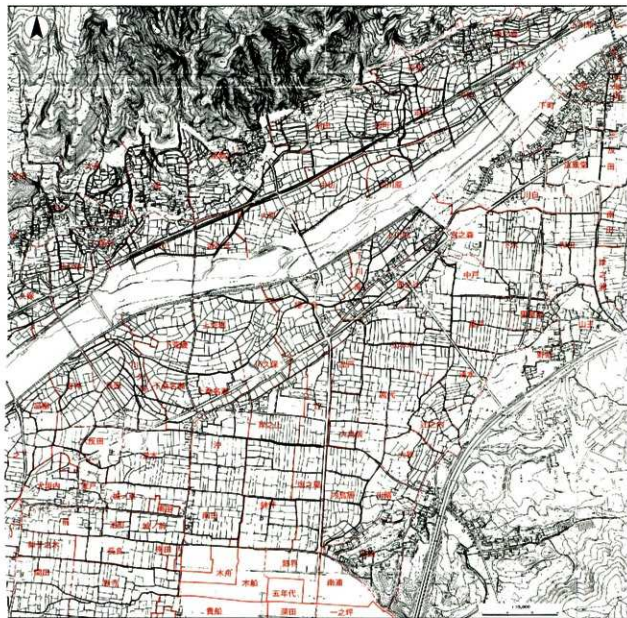
第1表 調査の経緯

平成元年度の調査では、一部柘植川北部の国町地区に調査を移した。幅3mのトレンチを設定し調査を実施した結果、奈良・平安時代の遺構が多く検出され、特に径30cmの柱根が残存する一辺約1mの柱掘形が目目された。これにより、国府は柘植川北部の地域に存在する可能性が高いことが判明した。以後、柘植川北部に調査の中心が移ることになった。

平成2年度の調査は、国町地区で確認された建物の規模を明らかにすることと、岩坂・中田・追越地区で東と北の範囲を確認することを目的として調査

が行われた。国町地域では、脇殿に相当すると考えられる南北棟を検出した他、国町地区の北と東に遺構が広がることが確認され、特に東の追越地区からは木簡が出し、注目された。

平成3年度は、国町地区では平成元～2年度の結果をもとに政庁内の建物配置を想定し、正殿や脇殿など政庁範囲の確認を主眼とした一部面調査を、また、西の前田地区では区画する溝などの施設、南では往時の東海道の検出を主として幅2mのトレンチ調査を実施した。



第1図 字切り図

## 2. 調査体制

昭和63年度は三重県教育委員会が、また、平成元年度以降は三重県埋蔵文化財センターが調査主体となって調査を実施した。昭和63年度から平成3年度までの調査体制は以下のとおりである。

### 発掘調査

#### 昭和63年度（第1次）

調査期間 昭和63年10月1日～平成元年1月13日  
調査対象地 柘植川南部・印代、西条  
調査担当者 主事 服部 久十・服部 芳人  
中島 千年・伊藤 裕偉  
調査面積 5,000㎡

#### 平成元年度（第2次）

調査期間 平成元年10月2日～12月22日  
調査対象地 柘植川南部・一之宮、千才、  
北部・坂の下  
調査担当者 主事 服部 久十  
三枝 義久  
調査面積 2,600㎡

#### 平成2年度（第3次）

調査期間 平成2年9月5日～平成3年2月8日  
調査対象地 柘植川北部・坂の下、外山  
調査担当者 主事 鈴木 克彦  
技師 穂積 裕昌  
研修生 小川 専哉・川戸 達也  
東山 則幸  
調査面積 3,000㎡

#### 平成3年度（第4次）

調査期間 平成3年10月14日～平成4年2月26日  
調査対象地 柘植川北部・東条、坂の下、千才  
調査担当者 技師 泉 雄二  
研修生 中浦 蒸之  
調査面積 3,000㎡

### 遺物整理、室内整理

#### 平成元年度

##### 三重県埋蔵文化財センター管理指導課

課長 吉水 康夫  
主事 河瀬 信幸  
野田 修久  
鈴木 克彦

#### 平成2年度

##### 三重県埋蔵文化財センター管理指導課

課長 吉水 康夫  
主事 河瀬 信幸  
小坂 宣広  
江尻 健  
小林 秀

#### 平成3年度

##### 三重県埋蔵文化財センター管理指導課

##### 次長兼管理指導課長 山沢 義貴

主事 田村 陽一  
杉谷 政樹  
小坂 宣広  
小林 秀

### 室内整理員

足立 純子・新井 ゆう子・尾家 恵・柿原 清子・  
角谷 和子・北山 美奈子・小池 洋子・小林 佳  
代子・鳥村 紀久子・杉原 泰子・鈴木 美智子・  
瀧川 ひとみ・田中 美樹・中村 美智子・中山  
豊子・西村 秋子・前村 浩子・松本 春美・森島  
公子・脇坂 栄子

### 指導委員

昭和63年の調査当初から、下記の先の方々に調査指導委員をお願いした。各先の方には年2回の指導員会議等で、調査及びその取扱いについて、指導と助言を得た。

八賀 晋（国立三重大学人文学部）  
小笠原 好彦（国立滋賀大学教育学部）  
高橋 誠一（国立滋賀大学教育学部）  
勝山 清次（国立三重大学人文学部）  
山中 敏史（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター）

## II. 位置と環境

三重県は律令下の国名でいうと主に伊勢、志摩、伊賀の三国から成り立つ。伊賀国は、三重県の北西部に位置し、天武九(680)年伊勢国から分離した。阿拝、山田、伊賀、名張の四郡からなり、『和抄類抄』には、伊賀国府は阿拝郡に所在し、阿拝郡は、栢植、川合、印代、服部、三田、新居の六郷から成り立つと記されている。現在の上野市北部から東接する阿山町の一部を含む地域で、伊賀盆地北部にあたる。

伊賀国は、北端部に位置する伊賀盆地を中心に発展してきた。木津川、久米川、服部川、栢植川の合流するところで古代から交通の要所として栄えた地域である。特に盆地北部は栢植川が西に流れて木津川と合流し、この河川沿いには奈良時代に東海道が新設され、加太越で東海へ向かう幹線道沿いの地域である。

国府の調査は、伊賀盆地の東北部を流れる栢植川の南部と北部で実施した。栢植川南部の印代・一之宮・千才地区(1)は、その南を服部川に挟まれた南北幅約4kmの水田地帯である。周辺地区は桑里制が残っているのに対し、この地区は桑里が乱れているため、国府の有力な候補地であった。なお、この栢植川南部の範囲確認調査の結果、新たに川久保遺跡(2)、印代東方遺跡(3)、長良遺跡(4)、高羽根遺跡(5)、岡田遺跡(6)、新寺A遺跡(7)、新寺B遺跡(8)を確認した。また、栢植川北部の坂之下・外山地区(9)は、北側背後に丘陵が迫り、段丘上面の平坦地は南北幅約200mの狭い地域で、これまで国府の存在する地域としては推定されていなかった。

以下、伊賀盆地北部地域について、当遺跡に関係する古代までの遺跡を時代別に記述する。

### 弥生時代以前

縄文時代の遺物の出土例は少ない。阿山町西之沢の天道遺跡(11)、上野市印代の印代東方遺跡(3)から後期の遺物が出土しているが、明確な遺構の検出例は知られていない。これに対し、盆地中南部では森脇遺跡(33)、北堀池遺跡(32)など北部に比べ出土例、検出例は近年の調査で増加している。

弥生時代の遺跡は、栢植川南部の印代地区の印代

東方遺跡(3)や、その南の新寺A遺跡(7)で新たに確認され、この地域には弥生時代後期の拠点となる集落の存在が推定される。栢植川北部では北門遺跡(26)があり、近年の調査で遺跡数は増加しているものの、弥生時代前期にまで遡るものはない。

### 古墳時代

当地域周辺には、古墳時代前期の山神奇建神社古墳(25)、東山古墳(11)、中期の全長188mの累下最大規模を誇る御墓山古墳(15)など有力な古墳の存在が知られる。北の丘陵背後には外山古墳群(20)をはじめ、上野市から阿山町まで多くの古墳群があり、4世紀から6世紀にかけての古墳群が存在する。なお、外山古墳群中の踏込塚古墳(21)は、7世紀前半の当地域最後の大型古墳の一つである。

また、これらをささえた経営基盤である集落は、近年の調査で検出例が増加している。阿山町内では北中溝遺跡(10)、天道遺跡(12)、栢植川南部の御墓山古墳周辺では喜春遺跡(16)、宮ノ森遺跡(22)、対岸の栢植川北部では外山人坪遺跡(19)など、弥生時代中後期から継続して営まれ、開発の進む様子が、遺跡の上からも裏付けられる。

### 飛鳥・奈良時代

日本書紀の壬申の乱の記載では、大海人皇子が吉野から挙兵する際、名張から上野を通り東門に入っている。飛鳥に都が置かれていた頃、これが東国への街道に当たったものであろう。奈良に遷都されると、和銅四(711)年伊賀国阿賀郡新家駅が新設され、街道も変わる。現在の木津川沿いの関西本線のルートで、伊賀国府を通り、東の加太越で伊勢・東国へと向かう。9世紀平安京に遷都すると東海道は近江国経由に代わり、更に仁和二(886)年鈴鹿越えの東海道(阿須波道)、現国道1号線へと移っていく。名張から東に伊勢へと向かう道は、平安時代の齋王が都に帰京する、齋王の退下の道として知られている。

伊賀国府の所在地は奈良時代までは東海道の主要道に面し、平安時代になると東海道からは離れるが、伊賀から畿内への街道の道筋にあたる。地理的に重要な位置を占めていたことは、遺跡の分布の様子を



第2圖 遺跡位置圖 (1 : 50,000)



見ても間違いないことである。

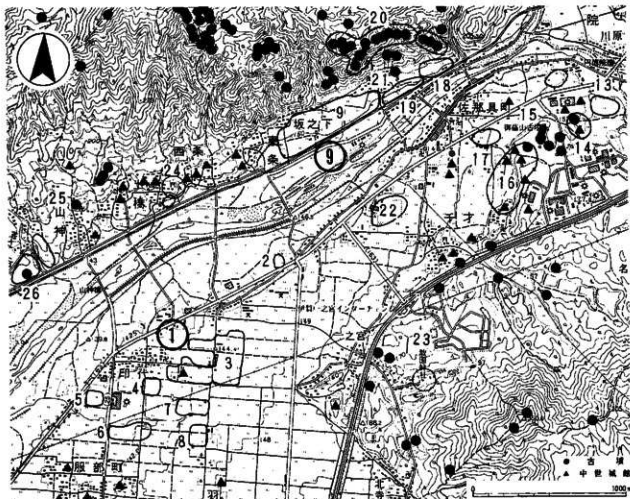
名張から上野にかけての道筋には南から白鳳時代の才良庵寺(35)、伊賀郡家に比定される下部遺跡(34)、飛鳥時代から平安時代にかけての多数の掘立柱建物や円形硯、斎亭、墨書土器などを出土した森脇遺跡(33)などがある他、伊賀国府の南5kmには伊賀国分僧寺(30)と国分尼寺に比定される長楽山庵寺(31)が位置し、伊賀国内の主要な街道であることを示している。木津川沿いには、木津川の北側で西から新家駅に比定される官舎遺跡(28)や、三田庵寺(27)、北門遺跡(26)があるほか、これらの遺跡の周辺で調査の行われていない遺物散布地が多数ある。国府に東接する外山大坪遺跡(19)では、飛鳥・奈良時代の遺構が検出され、その東には緩之森遺跡(18)が広がる。また、伊賀国府の東南、御室山古墳の西北にある三反田遺跡(17)、東の堂垣内遺跡(14)、大多田遺跡(13)では平成3年度に調査が行われ、三反田遺跡からは平安時代後半～鎌倉時代の掘立柱建物、堂垣内遺跡からは平安～鎌倉時代の掘立柱建物、大多田遺跡からは飛鳥～奈良時代の掘立柱建物が出た。奈良時代の遺跡分布から東海道は、伊賀国府の西では川の北側を通り、東は川を渡り南を通る可能性が高い。なお、国分寺の西を北に延長する位置には条里の痕跡が見られ、さらに延長する位置に国町地域が存在することから、国分寺と国町の位置関係は有機的なつながりがあるとと言える。

式内社には、伊賀国一宮の敷国神社(23)、二宮である小宮神社(24)、三宮である波多岐神社(29)などが周辺に見られる。遺跡・式内社の位置から見ても、当地域周辺は古代の重要な位置を占めていたことは間違いない。

## 注

1. 伊賀国府所在地の研究については以下のものがある。
  - ・堀末三三『伊賀の関 伊賀郡の歴史地理』地理書房、1972年
  - ・『国府研究の現状(その一)』国立歴史民俗博物館研究報告10集『国府研究』1986年
  - ・木下良『伊賀国府』『国立歴史民俗博物館研究報告20集』共同研究古代の国府の研究(総)1989年
2. 『天沼遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会、1980年  
石塚江左衛門河原段江に位置する。中心は古墳時代後期(6世紀)、堂柱柱礎6棟を検出した。ほかに縄文時代後期の環状、弥生時代中期の遺物が出土した。
3. 堀出幸兵『近代家方遺跡群』『平成2年度産業基盤整備事業地域歴史文化財調査報告書第1分冊』三重県教育委員会、1991年
4. 『森脇遺跡』『三重県歴史文化財年報19』三重県教育委員会、1989年

5. 『三重県歴史文化財年報20』三重県教育委員会、1990年
6. 森川孝厚『森脇遺跡(第三次)発掘調査報告』1991年、三重県教育委員会
7. 『北沼遺跡発掘調査報告 第一分冊』三重県教育委員会、1981年
8. 本報告に一部掲載。
9. 『新寺遺跡』『三重県歴史文化財センター年報1』三重県歴史文化財センター、1990年。平成元年成立委員会調査。本報告に一部掲載。
10. 『北門遺跡発掘調査報告(資料)』上野市教育委員会、1991年。  
奈良時代後期の穴式住居1棟と奈良時代の掘立柱建物9棟、懸穴住居2棟、井戸3基、平安時代の掘立柱建物7棟を検出した。遺物は、円形硯や、井戸から遺骨などが出土した。
11. 『東京国立博物館国史館跡遺跡遺物群(五巻)』東京国立博物館、1988年。  
三角縁三輪式銅鏡、勾玉などが出土している。
12. 仁保孝行『河内山古墳の遺構と遺物』『研究紀要第1号』三重県歴史文化財センター、1992年  
河合川と新瀬川が合流する地点から東方1kmの河口丘陵の先端に位置し、4世紀前半の築成で、伊賀地方では最古の古墳である。墳丘は21.0×17.0mの楕円形を呈する。主体部は削形木棺葬室で、中冨層時代の円筒鏡、鉄剣、鉄鏃、銅鏡と高杯、香炉(注内式洋行)が出土した。
13. 山本純樹『御室山古墳の検討』『考古学論集第1集』考古学を学ぶ会、1985年。  
南宮山から北に延びる丘陵状に位置する。全長188mの前方後円墳である。3世紀最大規模を有するもので、階差2基を持ち、環壕も含むことから見て、5世紀前半の造営である。
14. 三重大学原田古代史学部『資料1号墳遺跡調査報告』1981年。  
外山地区の古墳の規模上に位置し、前方後円墳4基、方墳6基を含む加蓋式古墳群である。  
また、塚原古墳は、外山古墳群の眼下にある丘陵先端部につくられた古墳で、現在は穴式石室の玄室の一部を残すにすぎない。15m程度に復元でき、7世紀前半の時期と思われる。当該地域の最後の大型古墳の一つと考えられる。
15. 『藤井天4号古墳・第六号1号古墳』河内山町歴史文化財調査報告書第2集、河内町教育委員会、1989年
16. 『北中遺跡群』『三重県歴史文化財年報10』三重県教育委員会、1988年。  
新瀬川と河合川の合流する沖積地のほぼ中央に位置する。奈良時代末から古墳時代はじめにかけての遺物と、懸穴住居11棟と、それらに属する大溝を検出した。
17. 2号と同じ。
18. 『藤谷遺跡発掘調査報告(遺構編)』上野市教育委員会・上野市遺跡調査会、1989年。  
山本純樹『伊賀の古式墳墓とその周辺』『考古学論集第2集』考古学を学ぶ会、1988年。  
南宮山から北に延び、御室山古墳に至る丘陵の西斜面に位置する。中世城跡、遺跡の中には石室式と、高さTK73mの円形土塔を含む最古の石室式があり、5世紀前半に築造された御室山古墳と密接な関係があったと思われる。  
また、奈良時代の川原式式の軒先記が出土している。
19. 『新ノ宮遺跡発掘調査報告』上野市教育委員会、1979年  
古墳時代の穴式住居3棟、土坑を検出した。
20. 川口清也『外山大坪遺跡』『平成3年度産業基盤整備事業地域歴史文化財調査報告書第1分冊』三重県教育委員会、1992年。  
伊賀国府所在地に東接する遺跡である。古墳時代前期の懸穴住居9棟が検出され、骨格に造営された玄室との関係が注目される。また、規模は不明であるが、7世紀後半の掘立柱建物1棟、奈良時代の穴式住居4棟や円形硯2点も出土し、伊賀国府との関連の強い遺跡である。
21. 奥田については以下のものがある。
  - ・藤本利尚『伊賀国』藤岡謙二郎編『古代日本の交通路1』、大洲堂、1978年
  - ・星村雅彦『大和から伊勢神宮への古代の道』土田和雄編『藤田古代の道1』法政館、1988年



第3図 遺跡位置図(1:25,000)

- ・足利兼亮「平安室から伊勢特等への古代の道」上田正昭編『藤樹古代の道』2) 扶風閣、1981
- 20、財鳥神社「三重町の地名 日本歴史地名大系24」平凡社、1983.5
  - ・「三重県上野市才高遺跡概要」『古代学研究』12号、1955.
  - 天武・持統天皇に関係する伊賀河原郡四ヶ寺中の伊賀郡の寺である。川原寺式の積舟遺文軒瓦片が出土しているが、遺構については不明。
- 21、『下部遺跡発掘調査報告』上野市教育委員会、1978.3
  - ・『下部遺跡試掘調査概要』三重県教育委員会、1975.5
  - ・『下部遺跡第二次試掘調査報告』三重県教育委員会、1980.3
  - ・『下部遺跡附属57・58年度の発掘調査報告』三重県教育委員会、1984.5
- 22、4と同じ
- 23、伊賀岡分寺、24、長葉山崎寺については、山田弘「伊賀岡分寺」『新編国分寺の研究』2巻 畿内と東海編 有朋文館、1991.11を参照した。
  - 伊賀岡分寺は天正12年国分寺となる。東西約210m、南北約250の範囲に土盛が残り、中に北から殿堂、金堂、中門跡の土盛が残り、金堂と中門には草席が取り付く。南西には塔と思われる高まりも残る。主要堂構の概定中軸線はN-47°30'で国分寺の西室を北に延長するとはほぼ伊賀岡内に貫通する。
  - 西明寺遺跡は1980-83年国分寺の範囲での同寺関係資料を得るために行った調査で、寺域北側の築地外郭の瓦葺り様などを検出し、寺域は東西720尺、南北800尺に復元される。調査で出土した遺物から、国分寺の造営は奈良時代後半で11世紀には少なくとも国分寺跡はその機能を停止しており、10世紀後半から平安時代末期までが築造期と位置付けられる。
- ・山本清雄「西明寺遺跡発掘調査報告 遺構編」上野市教育委員会、1981
- ・田村輝之「西明寺遺跡発掘調査報告」上野市教育委員会、1982
- ・西森平之「西明寺遺跡発掘調査報告」上野市教育委員会、1983
- 長葉山崎寺(国分尼寺)は国分寺の東約200mに位置し、大正12年長葉山崎寺として瓦室跡に指定された。築地は南側と西側が二重で北側と東側は一重で存在する。東西500尺、南北540尺程度に復元でき、金堂、講堂の土壁跡が残る。方位は佛寺と異なり、N-7°30'である。
- 25、『新宮駅』『三重県の地名 日本歴史地名大系24』平凡社、1983.5
  - 新宮駅指定地は、伊賀岡南の西5kmの位置にある。現在の上野市新宮小学校裏の官倉遺跡が相応する。木津川の北の微高地にあり、上宮倉、下宮倉等の地名も残り、新宮駅の指定地とされる。一部試掘調査が行われているが、詳細は不明。
- 26、石田茂作「三田坂寺」『鹿島時代寺院地の研究』1961.11.
  - 過去においては礎石も存在していたといわれ、瓦の敷布する地域である。調査は行われず、地層Ⅱから石田茂作氏は四天王寺式の南面する伽藍配置を想定し、瓦の中には147世紀後半のものも見られることから、その造営が鴨島時代に求めることができるとしている。
- 27、8と同じ
- 28、18と同じ
- 29、遺跡台標には礎石のみ六坪遺跡と記載されているが、外山大坪遺跡と一連の遺跡の可能性が高く、註18の参考文献では「遺のものとして扱っている。
- 30、『三反山遺跡』『三重県歴史文化センター年報』3、三重県歴史文化センター、1992.3
- 31、『東の堂内・大多田遺跡』『三重県歴史文化センター年報』3、三重県歴史文化センター、1992.3
- 32、鹿島神社「三重県の地名 日本歴史地名大系24」平凡社、1983.5
- 33、小宮神社「三重県の地名 日本歴史地名大系24」平凡社、1983.5
- 34、波多崎神社「三重県の地名 日本歴史地名大系24」平凡社、1983.5

### Ⅲ. 柘植川南部の調査

#### 1. 印代東方地区

柘植川左岸の印代地区では、県営は場整備事業に先立って昭和63年から範囲確認調査が行われた。昭和63年度は、東西650m、南北400mの範囲で井桁状に幅3mのトレンチを延長1,700m設定して、合計約5,000㎡を調査した。平成元年度には、前年度の補足の試掘調査を40ヶ所で実施した。また、2年度には、排水路部分の立会い調査を一部で実施した。<sup>1)</sup>

標高145m前後の印代東方地区の基本的層位は、南北で大きく様相が異なる。A～C区とE区北半部は耕作土、床土の下に明灰褐色砂質の旧耕作土や明黄褐色の旧床土が2～3層あり、その下に茶褐色や暗褐色粘質土が1～2層で、灰黄色粘土の地山面となる。地山面までの深さは0.3～0.8mである。

一方、D・F区とE区南半部は耕作土と床土の下

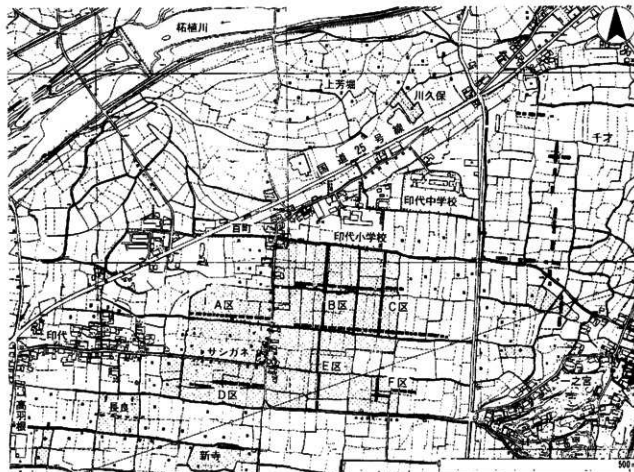
に旧耕作土が1～2層あり、その下が灰褐色砂質土であり、地山は暗褐色砂質土となっている。地山面までの深さは0.2～0.5mである。

#### (1) 遺構

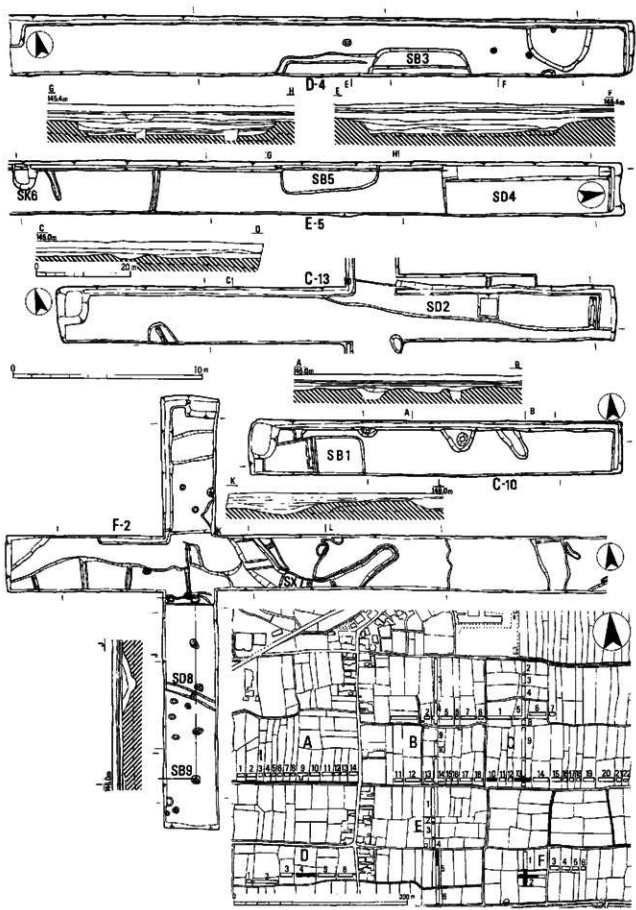
A～C区は、壑穴住居、土坑、ピット、溝を検出しているが、全体的に非常に希薄である。

A-4・B-4では水田状遺構を検出したが、プラントオパール調査の結果、イネは検出されず、古墳時代頃の湿地状の窪みの可能性が高い。

C-9では、挟入木製品(84)が出土した浅い溝がある。埋没時期は、出土遺物から古墳時代と推察される。C-10で検出したSB1は、出土遺物から弥生時代後期のものと考えられる。また、手焙形土



第4図 印代東方地区調査区平面図(1:10,000)



第5図 印代東方地区遺構平面図（1：200 但し土層断面図は1：100）

区画	遺 物				小字名	区画	遺 物				小字名				
	弥生～古墳	その他	～古墳	弥・平			中	新	その他	弥生～古墳		その他	～古墳	弥・平	中
A-1	土坑	溝				室木									神野
A-2						*	C-6								*
A-3						*	C-7		土坑・ビット						*
A-4		水田状遺構				*	C-8								*
A-5		溝				*	C-9	溝	ビット						狭小墓止
A-6						*	C-10	竪穴住居							*
A-7						*	C-11		土坑・ビット						*
A-8						*	C-12								*
A-9						*	C-13	溝	ビット						*
A-10						*	C-14	土坑							*
A-11						*	C-15		溝						*
A-12		土坑・ビット				*	C-16								*
A-13						*	C-17								*
A-14		ビット				*	C-18								*
B-1		土坑 溝				*	C-19								*
B-2						*	C-20		自然流路						堀之塚
B-3		土坑	溝			*	C-21								
B-4		土坑・ビット	水田状遺構			*	C-22								
B-5						*	D-1	土坑							城ノ内
B-6						*	D-2	竪穴住居	中世ビット						狭小墓止
B-7						*	D-3	土坑 溝							*
B-8						*	D-4	竪穴住居							*
B-9						*	D-5	土坑							*
B-10						*	D-6	土坑	溝・ビット						*
B-11						*	E-1		溝・中世ビット						南田
B-12						*	E-2								*
B-13						*	E-3								*
B-14						*	E-4	溝							*
B-15						*	E-5	竪穴住居							成石
B-16						*	F-6		自然流路						*
B-17						*	F-1		溝						神野
B-18		土坑				*	F-2	方形溝墓	竪穴住居						*
C-1						*	F-3								*
C-2						*	F-4		溝						*
C-3						*	F-5								*
C-4						*	F-6								*

第2表 印代東地方 遺物・建物一覧表

○は多量出土を示す

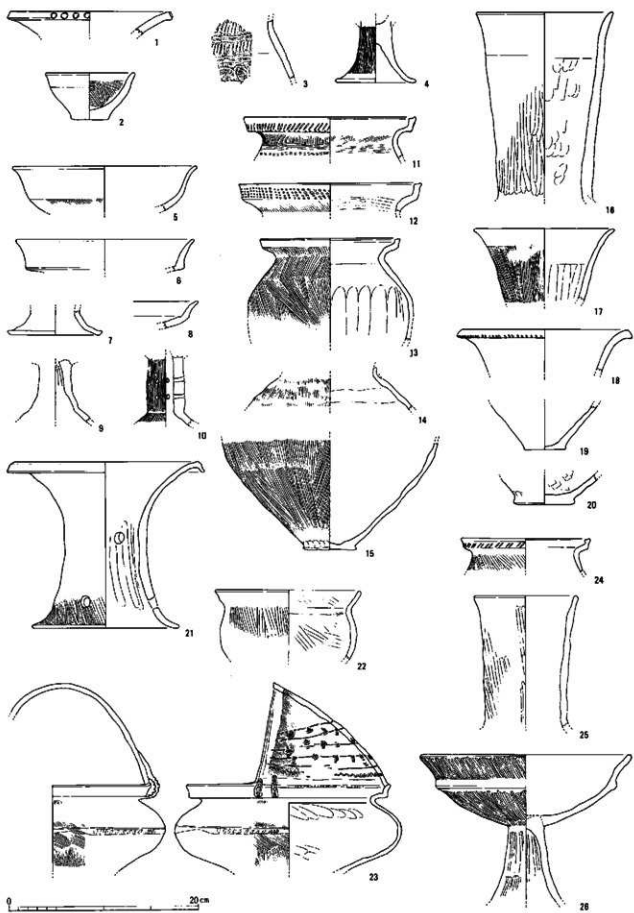
器の出土したC-13のSD2は幅1mで深さ0.5mほどの逆台形状の断面を呈する。

D区では、弥生時代中期の竪穴住居、土坑、溝と中世の柱穴を密に検出した。SB3は、一辺5.4mの隅丸方形の竪穴住居の一部と推察される。出土遺物は、弥生時代中期を含む多量の後期の土器である。D-3では、柱間2.4mの2周分の柱穴をはじめとして、40cm程の円形の掘形をもつ柱穴群を検出したが、全体規模は不明である。

E区では、E-5から南側で大溝、土坑や竪穴住居などを検出した。SD4は、幅9m、深さ1m以上の東西溝である。E-6にも細砂が厚く堆積した自然流路が東西方向に流れており、両溝の間にSB5や

SK6がある。SB5は、一辺5.2mの竪穴住居で、トレンチ西壁に柱穴の断面が観察された。SK6は、径1.2m、深さ0.6mである。出土遺物から、これらの遺構はいずれも弥生時代後期のものである。

F区では、方形周溝墓や溝、掘立柱建物を検出した。SX7は調査区外へ延びており、幅1.2m程の溝が方形に巡っているものと推察される。一方所の竪部が確認でき、周溝からは弥生時代後期の土器が出土している。SD8は幅1.7m、深さ0.4mの浅いU字形の溝であり、手焙形土器が出土している。SB9は築間4間の南北棟と考えられ、柱間は2.4mである。柱掘形は円形で、黒色土器片が出土していることから平安時代の後半と推察される。



第6図 遺物実測図 柘植川南部(1)

No.	登録No.	部 種	遺跡	出土位置	造 量 (m)	口徑	底径	器高	調査注記の特長	胎 土	焼成 色 調	残存率 (%)	備 考
1	17	粘土土器 広口壺	SB1	C-10 SB1	16.5	-	-	外 ヘラミダキ	底、3cm以下の砂粒を含む	軟	乳白色	25	口縁部縁部外面に内科埋文
2	15	* 鉢 *	*	*	9.1	3.8	4.9	内 ハケメ	底、小石を含む	良好	淡乳白色	50	外面に黒染あり
3	36	* 壺 *	*	*	-	-	-	外一腕の押付後、縁部より上縁	底、小石を含む	良好	茶褐色	-	外面灰色
4	16	* 高杯 *	*	*	-	8.2	-	外一腕いミダキ、頸部部狭ナデ	底、裏目、金雲母を含む	良好	淡乳白色	頸部:8	
5	41	* * *	SB3	D-4 SB3	17.0	-	-	内外一狭ナデ	底、金雲母多く含む	良好	乳茶褐色	外縁:8	
6	22	* * *	*	*	18.0	-	-	内外一狭ナデ	底、小石多く含む	良好	灰白色	外縁:13	
7	73	* * *	*	*	-	9.4	-	内外一狭ナデ	底、雲母、磁砂を含む	良好	淡茶褐色	頸部:8	黒染あり
8	57	* * *	*	*	-	-	-	内外一狭ナデ	底	やや軟	淡茶褐色	外縁:13	
9	68	* * *	*	*	-	-	-	頸部外一狭ナデ、頸部内面段り込み残存	底	やや軟	淡茶褐色	頸部:端文	磨耗著しい
10	43	* * *	*	*	-	-	-	頸部外一狭いヘラミダキ	底、2cm以下の小石を含む	良好	乳褐色	-	頸部段りつ所に穿孔
11	52	* 甕 *	*	*	19.0	-	-	口縁部外ヘラによる刺突文、頸部以下ハケメ、裏面縦線、刺突文	底、磁砂を含む	良好	灰茶色	35	外面黒付着
12	53	* * *	*	*	19.0	-	-	口縁部外一刺突文、底ハケメ	底、磁砂、雲母を含む	良好	灰茶色	13	
13	40	* * *	*	*	14.6	-	-	体部外ハケメ、内一定方向ナデ	底、小石を若干含む	良好	茶褐色	50	
14	55	* * *	*	*	-	-	-	外ハケメ	底、小石を多く含む	軟	淡茶褐色	35	口縁部欠陥 磨耗著しい
15	66	* * *	*	*	-	5.0	-	外ハケメ、内ナデ、底土粒残存	底、小石を多く含む	軟	淡茶褐色	35	磨耗著しい 外底面付着
16	42	* 長頸壺 *	*	*	14.2	-	-	頸部外一下半部広いヘラミダキ、内ナデ	底、金雲母、黒石を含む	やや軟	乳褐色	50	内面にヘラのあたり
17	72	* * *	*	*	14.4	-	-	外ハケメ、内一定位置	底、金雲母を含む	軟	茶褐色	35	
18	64	* 広口壺 *	*	*	17.2	-	-	口縁部一筋のみ、頸部一ケズリ	やや軟、小石を多く含む	良好	淡茶褐色	25	
19	45	* 壺 *	*	*	-	4.2	-	底部一ナデ	やや軟、小石を多く含む	やや軟	茶褐色	50	保存書
20	44	* 壺 *	*	*	-	5.4	-	底部一筋土粒残	底	軟	乳茶褐色	-	内面ヘラのあたり
21	39	* 甕 *	*	*	15.4	15.2	17.5	頸部外ナデのちヘラミダキ、内一狭い一定方向ナデ	底、金雲母、小石を含む	良好	茶褐色	50	頸部穿孔
22	18	* 甕	SD2	C-12 SD2	15.0	-	-	口縁部内外一狭ナデ、体部内ハケメのちケズリ、外一筋ハケ	底、3cm以下の小石を含む	軟	乳白色	25	
23	7	* 手網り *	*	*	-	-	-	外ハケメのち流線、縦穴文、内ナデ	底、小石、雲母を含む	やや軟	淡茶褐色	70	黒染あり
24	28	* 甕	SK6	E-5 SK6	13.4	-	-	口縁部内外一狭ナデ、外一刺突文、体部外一筋ハケ	底、小石、雲母を含む	良好	茶褐色	90	保存書、磨耗著しい。
25	100	* 長頸壺 *	*	*	10.6	-	-	口縁部内外一狭ナデ、外一筋方向のヘラミダキ	底、磁砂含む	良好	淡茶褐色	頸部のみ	磨耗著しい。
26	30	* 高杯 *	*	*	21.6	-	-	口縁部内外 狭ナデ、外 ヘラミダキ、頸部外ヘラミダキ、内一筋り目筋。	底、3cm以下の小石を含む	軟	乳褐色	17	磨耗著しい。
27	132	* * *	SB3	D-4 SB3	-	-	-	内外ヘラミダキ	底	良好	淡茶褐色	頸部:50	3ヶ所穿孔
28	134	* * *	*	*	-	-	-	外ヘラミダキ、体部内・頸部内ハケメ。	底	良好	緑褐色	-	3ヶ所穿孔
29	75	* * *	*	*	-	14.8	-	頸部外一筋方向の狭いハケメの後、上半ヘラミダキ。	底、小石を含む	軟	淡茶褐色	-	3ヶ所穿孔
30	130	* 壺 *	*	*	-	2.5	-	体部外ヘラミダキ、内一上半ナデ、下半ハケメ	底、小石、雲母、黒石を含む	良好	緑褐色	75	
31	63	* * *	*	*	12.2	-	-	外ヘラミダキ、内ナデ、流線	底、小石を含む	軟	淡茶褐色	-	
32	76	* * *	*	*	11.0	-	-	外ナデ、内一ケズリのちナデ、頸部一ハケメ	底、雲母を含む	軟	淡茶褐色	20	磨耗著しい。
33	74	* * *	*	*	13.2	-	-	口縁部内外一狭ナデ、頸部内外ハケメ。	底、3cm以下の小石を含む	良好	緑褐色	25	
34	150	* * *	*	*	-	-	-	体部外 横線彫文・流穴文、内ナデ。	底、3cm以下の小石を含む	良好	淡褐色	20	
35	77	* * *	*	*	15.0	-	-	口縁部外 竹管文、内 細いハケメ。	底、小石を多く含む	軟	淡茶褐色	25	

第3表 遺物観察表・柘植川南部(1)

## (2) 遺物

出土遺物は縄文時代から中・近世に及び、量はそれほど多くない。奈良・平安時代の遺物は極めて少量であり、弥生土器が比較的多い。

縄文時代の遺物には、縄文地を太い沈線によって区画した後期の縄文土器片が数点みられる。

弥生土器は比較的多量に出土している。中期のものも若干含まれるが、後期のものが主流を占める。図示したものは良好な遺構の一括遺物で、器種には長頸壺・短頸壺・壺・高杯・器台や手焙形土器などがある。長頸壺(18・25・31)には、外面ハケメ調整のものとヘラミガキ調整がある。壺は、外面タタキ調整(37)は少なく、ハケメ調整が多い。また、近江型の受口状口縁を呈するもの(11・12・24)もある。高杯は、杯部に稜をもちヘラミガキを施すもの(6・8・26)が多いが、碗形のもの(5)もある。器台(21)は、受部の方が脚部より幅広く、底部に面をもち鼓形を呈する。29は、胴部がしぼみ、

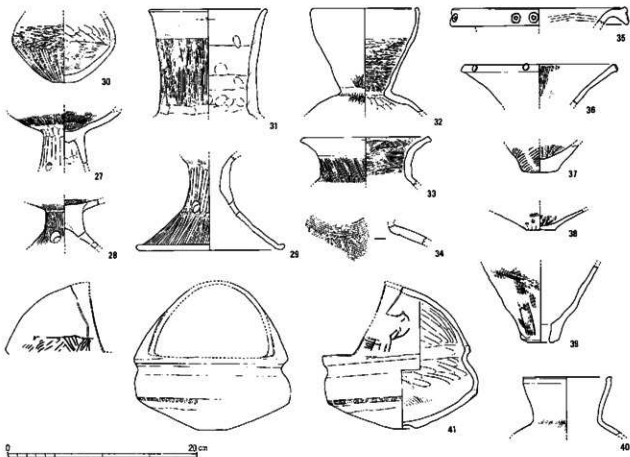
脚部が大きく開く。手焙形土器は、2点出土した。23は受口状口縁の鉢に覆部を付けたもので、ハケメ調整の上に、櫛状沈線や屈状文をもつ。41は覆部に線刻がみられ、やや小振りである。体部と覆部が一体に成形され、覆部背面には突起がめくらない。

古墳時代以降の遺物については、遺構に伴うものは僅かであり、ほとんどが包含層出土である。これらには、須恵器、土師器、黒色土器、灰釉陶器、山茶碗、瓦器、土師質土器、貿易磁器、銅銭、土符、砥石、鉄製紡錘車がある。

須恵器には、5世紀まで廻る把手付碗(42)、6世紀の杯蓋や杯身(43・44)の小片があるほかに、飛鳥～平安時代の杯蓋や杯身(45～52)もあるが、ごく少量で細片に過ぎない。

このほか、灰釉陶器(53・54)や黒色土器(55)、土師器壺(56)などが少量ながら出土している。

中世の遺物は、量的には弥生時代に次ぐものであるが、磨耗を受けた小片が多い。土師器には鍋(57・58)・皿(59～63)や蓋(64)があるが、量として

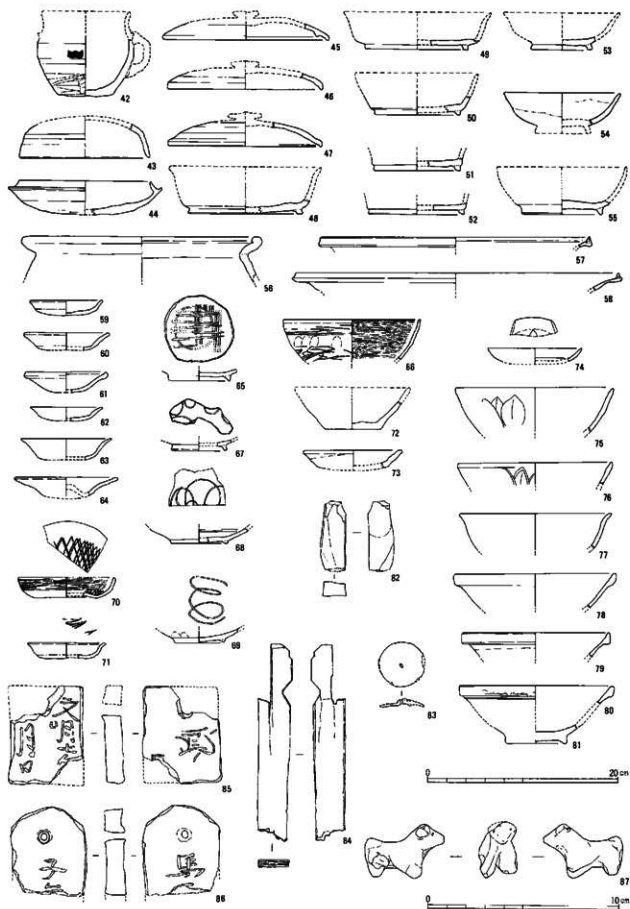


第7図 遺物実測図 柘植川南部(2)



No.	登録地	器 種	遺 跡	出土位置	法 量 (m)		調査技法の名称	土 質	焼 色	残存率 (%)	備 考		
					口径	器高							
36	130	熟土器	壺	SD3	D-4	16.4	-	口縁部内 円形浮文、内ヘラミダキ。	青、小石、金葉を多く含む	やや軟	淡褐色	30	器台少
37	130	*	壺	*	*	3.8	-	底部外ヘラミダキ、内ヘラミダキ。	青、3cm以下の小石を含む	良好	灰褐色	底部	
38	143	*	*	*	*	3.1	-	底部内外ヘラミダキ。	青、3cm以下の小石を含む	良好	淡茶褐色	底部	外周縁付着
39	79	*	甗	*	*	3.0	-	底部外ヘラミダキ、内ヘラミダキ。	灰、小石、金葉を多く含む	中硬	茶褐色	底部	底部に摩り、黒皮あり
40	76	*	甗	SD6	F-2	9.0	-	口縁部内外一線ナゲ、底部外ヘラミダキ。	青、小石、金葉を多く含む	良好	灰褐色	25	磨耗大きい
41	108	*	手磨り	*	*	-	-		青、小石、金葉を多く含む	やや軟	淡褐色	75	壁部磨耗
42	53	磁器類	碗	-	C-9	6.0	-	内外ヘラミダキ、底部外ヘラミダキ、体部上平1条(10本)の波状文。	青、3cm以下の小石を含む	良好	淡青灰色	底部	器台は欠損
43	52	*	杯蓋	-	C-9	13.8	-	口縁部内外、底部内ヘラミダキ。底部外ヘラミダキの波状文。	青、1cm以下の小石を含む	良好	灰色	10	
44	30	*	杯蓋	-	B-4	13.0	-	口縁部内外、底部内ヘラミダキ。底部外ヘラミダキ。	青、3cm以下の小石を含む	やや軟	灰色	25	磨耗大きい
45	38	*	杯蓋	-	F-2	17.0	-	内外ヘラミダキ。	青、4cmの黒石を含む	良好	灰色	8	内面に磨り
46	121	*	*	-	A-5	16.0	-	口縁部内外ヘラミダキ、天部外ヘラミダキ。	青、黒石を含む	中硬	淡青灰色	5	
47	1	*	*	-	B-7	16.3	-	口縁部内外ヘラミダキ。	青、3cm以下の小石を含む	良好	緑褐色	20	
48	5	*	杯蓋	-	B-2	11.8	-	底部外ヘラミダキ、体部上平1条。	青	良好	灰色	10	
49	2	*	*	-	B-7	10.8	-	底部外ヘラミダキ、体部上平1条。	青、3cm以下の小石を含む	良好	緑褐色	10	
50	4	*	*	-	C-13	8.9	-	磨耗著しく、遺跡不明。	青	良好	淡灰色	13	磨耗大きい
51	3	*	*	-	B-4	8.9	-	底部外ヘラミダキ。	青、3cm以下の小石を含む	良好	淡青灰色	13	
52	57	*	*	-	B-4	10.1	-	内外ヘラミダキ。	やや軟。	良好	灰色	10	
53	6	灰磁器類	碗	-	A-6	6.0	-	口縁部内外ヘラミダキ、底部外中央にヘラの痕跡。	青	やや軟	淡灰白色	底部	内面に浅彫の灰輪
54	132	*	*	-	B-2	12.0	-	口縁部内外ヘラミダキ。	青	やや軟	淡灰白色	17	口縁部につけ磨き
55	96	黒熟土器	* 壺	-	D-6	8.2	-	底部内外ヘラミダキ、張り付け高台。	青	やや軟	灰-淡褐色 内-黒色	底部	底部外面に三叉文様のヘラ痕
56	136	土器類	壺	-	C-2	34.0	-	内外ヘラミダキ。	灰、小石、金葉を多く含む	やや軟	淡茶褐色	17	
57	138	*	甗	-	A-8	28.0	-		やや軟	良好	茶褐色	5	
58	117	*	*	-	C-5	34.0	-		青	良好	茶褐色	5	
59	21	*	甗	-	C-3	7.6	-	口縁部一線ナゲ。	青	中	乳白色	26	
60	24	*	*	-	B-7	8.8	-	口縁部一線ナゲ。	青	良好	乳褐色	25	
61	105	*	*	-	D-2	8.6	-	口縁部一線ナゲ。	青	良好	明褐色	40	
62	45	*	*	-	C-2	7.6	-	口縁部一線ナゲ。	青	良好	淡褐色	35	
63	44	*	*	-	C-6	9.6	-	口縁部一線ナゲ。	青、3cm以下の小石を含む	良好	淡褐色	35	
64	25	*	甗	-	B-7	10.8	-	口縁部一線ナゲ。	小石を含む	やや軟	淡茶褐色	35	
65	54	瓦器類	碗	-	C-3	6.4	-	底部内ヘラミダキ。	1cm以下の小石を含む	良好	淡灰褐色	底部	内面に格子目文、円形に加工
66	48	*	*	-	C-2	14.5	-	内ヘラミダキ、口縁部外一線付のヘラミダキ。	青	良好	灰褐色	26	
67	55	*	*	-	B-5	5.8	-	底部内ヘラミダキ。	青	良好	灰色	35	底部に浅彫輪状文4層以上
68	50	*	*	-	C-9	6.0	-	底部内ヘラミダキ。	青	良好	灰褐色	50	底部に浅彫輪状文4層以上
69	49	*	*	-	C-2	5.5	-	底部内ヘラミダキ。	青	不良	灰褐色・淡褐色	底部	内面に1文字、狭い高台
70	19	*	小型	-	A-9	10.0	-	底部内ヘラミダキ、口縁部内外ヘラミダキ	青	やや軟	淡灰褐色	25	底部内面に4層以上のジグザグ文

第4表 遺物観察表・柘植川南部(2)



第8図 遺物実測図 柘植川南部(3)

地 区	発見地	器 種	遺構	出土位置	法 量 (m)			調査技術の種類	新 土	焼成 色 調 (%)	残存率 (%)	備 考
					口径	高さ	厚					
71	20	瓦器	小皿	—	—	—	—	—	—	—	—	—
72	127	白磁碗	—	—	—	5.6	—	—	—	—	—	—
73	113	白磁	—	—	10.0	—	2.2	—	—	—	—	—
74	12	白磁	小皿	—	—	—	—	—	—	—	—	—
75	10	青磁	碗	—	16.4	—	—	—	—	—	—	—
76	120	+	+	—	16.0	—	—	—	—	—	—	—
77	11	+	+	—	15.8	—	—	—	—	—	—	—
78	14	白磁	+	—	16.8	—	—	—	—	—	—	—
79	94	+	+	—	15.4	—	—	—	—	—	—	—
80	98	+	+	—	16.0	—	—	—	—	—	—	—
81	115	+	+	—	—	6.0	—	—	—	—	—	—
82	124	石製	碇石	—	長 7.6 幅 2.7 厚 1.6	—	—	—	—	—	—	—
83	126	鉄製	紡錘	—	口径 4.7 厚 2.0	—	—	—	—	—	—	—
84	100	鉄木製品	—	—	口径 21.0 幅 3.3 厚 0.8	—	—	—	—	—	—	—
85	9	土製	土符	—	口径 5.0 幅 3.0 厚 1.0	—	—	—	—	—	—	—
86	101	+	+	—	口径 10.0 幅 3.9 厚 1.1	—	—	—	—	—	—	—
87	7	+	土人	—	口径 14.0 幅 4.0 厚 1.0	—	—	—	—	—	—	—

第5表 遺物観察表・柘植川南部(3)

は瓦器碗・皿(65~71)が最も多く各時期のものがある。ほかに山茶碗(72)・山皿(73)も僅かに出土している。青磁(74~77)や白磁(78~81)の碗・皿もあるが、量的にさほど多くない。また、上野市北部を中心に出土する土符(85)が1点ある。表面に「文明七年」の年号があり、1475年にあたる。下半部の一部が欠損しており、裏面には花押と「馬」という文字を確認できる。

この他、鉄製紡錘車(83)は紡錘が欠損しているが、径4.8cmのもので、包含層出土である。

鉄木製品(84)はC-9の溝から出土した。残長21cm、幅3.3cm、厚0.8cmで、共存遺物から古墳時代の可能性が高く、人形や木簡の可能性は少ないものと考えられる。また、長径57cmの楕円形の曲物の底部が出土している。径は欠損しているが、把手をもち、桜皮が4ヶ所に残っている。

## 2. その他の印代地区

は場整備事業に伴う事前の試掘調査を実施した結果、印代南方地区では、長良遺跡、新寺A遺跡・B遺跡、間田遺跡を、また印代西方地区では、高羽根遺跡を、印代北方地区では川久保遺跡を確認することができた。なお、印代集落のすぐ北側でも試掘調査を実施したが、遺構や包含層は確認されなかった。

長良遺跡は100m四方の範囲があり、最も古いものとしては縄文時代晩期の条痕文土器片やサヌカイトの剣片が出土した。遺構に伴うものとしては、土坑から多量の弥生時代後期の土器が出土した。その他、

包含層出土遺物として緑釉陶器が1点あるが、平安時代の明確な遺構は検出されなかった。

新寺A・B遺跡は、ともに弥生時代の遺構や遺物が試掘調査によって確認されたもので、新寺A遺跡にかかる排水路部分では立会調査が実施され、弥生時代後期の長頸甕や高杯などの弥生土器が出土し、溝が検出された。

間田遺跡は、試掘調査によって弥生時代の遺構や中世の遺物が確認され、立会調査を実施した。<sup>21)</sup>

高羽根遺跡は印代・服部を通る国道24号線を通る

で両側に広がる遺跡である。包含層から「千年」  
「馬」の文字が判別できる土符(86)が出土している。  
また、国道の西側では、古墳時代の土師器が多量に  
出土している。

川久保遺跡は低位河岸段丘上に分布する遺跡であ

### 3. 一之宮・千才地区

市道東條・一之宮・西明寺線の東側の水田地帯に  
おいて、平成元年度に幅3m、総延長800mにわたっ  
てトレンチ調査を実施した。当地区には灰青色粘土  
層が分布しており、近代以降に瓦粘土として盛んに  
採取されている。遺構は全体に希薄であり、溝など  
を検出したにすぎない。遺物は古墳時代の須恵器の  
ほか、黒色土器、瓦器、土師質土器や中世陶器など  
であり、奈良・平安時代の遺物は僅かであり、包含

### 4. 小

これまで、印代地区周辺に伊賀国府が置かれてい  
たとする説が有力であった。今回の調査により、そ  
の想定地の歴史的環境をほぼ解明することができた。

まず、印代東方遺跡では、弥生時代の遺構と中世  
の遺構が主で、平安時代後期の遺構を僅かに検出  
したに留まる。全体的に遺構は希薄であり、弥生時代  
になって微高地に集落が形成され、その後水田とし  
て開発が進んだことを窺わせる。

また、古代の遺物も稀薄に少なく、仮に中世の水  
田開発によって削平されたとしても全くといって  
いほど痕跡が見当たらない。古代官衙を彷彿させる  
には遺物の質、量とも余りにも貧弱である。

印代の南、西、北においても上記と同様な様相が  
見られる。長良・新寺遺跡などでも弥生時代の遺構  
や遺物が確認されているが、奈良・平安時代の国府  
を想定させる遺構・遺物は皆無に等しい。高利根遺

り、中世の遺物が出土した。遺構は極めて希薄で、  
浅い箇所から裸層が検出された。川久保遺跡の北方  
の上荒畑遺跡にも遺物の散布がみられたが、試掘調  
査の結果、遺構は検出されず、遺物の分布密度も薄  
く、包含層も確認されなかった。

層からは土製犬(87)が出土している。

また、先述の市道東側の細長く延びる畑地にトレ  
ンチを入れたところ、幅0.5m、深さ0.4m程の断面  
台形の溝を南北方向に検出した。溝からは小片であ  
るが土師器が出土しており、古代条里あるいは古道  
に伴う側溝の可能性もある。ちなみに、北方の延長  
線上には、柘植川北岸に岡町遺跡が、南方の延長線  
上の服部川南岸には伊賀国分寺跡が所在している。

### 結

跡でも奈良・平安時代の遺物は見当たらない。川久  
保遺跡のある一段低い地点は、旧河川の流路であっ  
たことが地形的に読み取れ、氾濫原の一部に中世以  
降の生活の跡が僅かに残されているに過ぎない。

一之宮・千才地区では、整然と条里制地割が展開  
しており、遺構・遺物が希薄な点から古代の比較的  
早い段階から水田開発が行われていた可能性が高く  
印代地区と同様に古代官衙の痕跡は見当たらない。

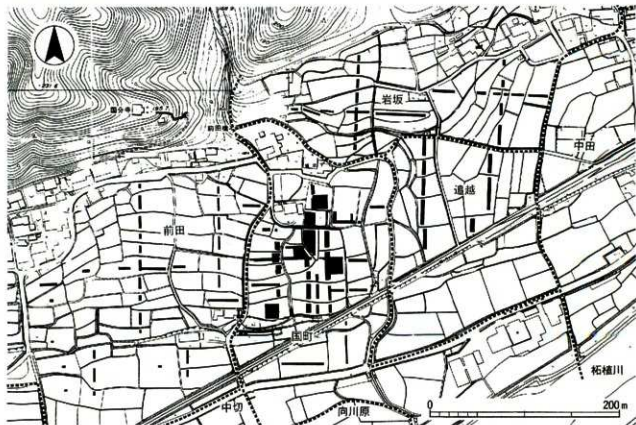
以上の点から、柘植川南部の印代・一之宮・千才  
地区に古代官衙が造営された可能性は皆無に等しい。  
今回の発掘調査が国府位置の確認という性格をもつ  
たものであり、調査範囲や調査地点からみても、こ  
れまで想定されていた柘植川南部の印代周辺の地域  
には、伊賀国府跡は所在しないとの結論を下さざる  
を得ない。

注1) 『平成2年度発掘調査報告書東海地区歴史文化財発掘調査報告書1(甲)』  
\*\*発掘調査文化財センター、1991.3  
2) 同上

## Ⅳ. 柘植川北部の調査

柘植川北部の調査は、大字外山（小字-中田・岩坂・追越）、坂之下（小字-国町・前田ほか）で実施した。川の北部は標高145m前後の平野部と、その北に比高約5mの段丘が見られ、遺構を検出したのは、段丘上の平地である。平地は南北幅約200mあり、西側の大字東条では丘陵が張り出すために途切れ、東側は大坪遺跡へと通なる。畦畔の方向は、西の前田・国町地区ではほぼ東西方向であるに対し、東では現地形と同じ東南方向の畦畔となっている。

調査地区表示は、小字別（第9図）に東から中田＝A地区、岩坂＝B地区、追越＝C地区、国町＝D地区、前田＝E地区とし、その地区毎に大きく水田・畑が区画される範囲で中地区（各字別調査地区の中の……で囲まれた地区）、さらに個別の水田・畑単位に数字（小地区）を与えて地区表示とした。このうち中田（A地区）は試掘調査を行ったが、遺構はほとんど検出されていない。以下、地区別に遺構を、遺物についてはまとめて時期別に記述する。



第9図 柘植川北部調査区位置図（1：4,000）

### 1. 岩坂地区

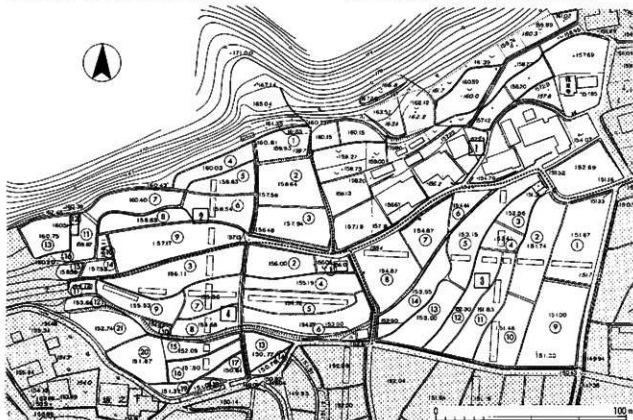
岩坂地区（B地区）は国町地区の北に位置し、北側には丘陵が迫る。北端の水田の標高は約160m、南は約150mとかなりの標高差がある。地区表示は第10図のとおりで、東のB3地区と西のB2・4地区に十文字にトレンチをいれて調査を実施した。

遺構は、北側のB2地区と東側のB3地区では確認していない。西側のB4地区は遺構面までの深さ

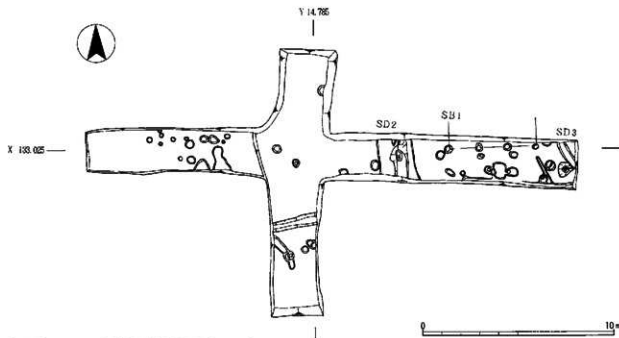
は1mで、B4-4地区のトレンチ西部で土坑・柱穴、B4-7地区では柱穴・溝等を検出した。B4-7地区の掘立柱建物SB1は、東西2間、柱掘形は径0.3mの円形を呈する。棟方向はE-0°-Nで、時期は不明である。その他、SD2・3などの混入の可能性が高い弥生時代の遺物を少量出土する溝を検出した。遺物は、縄文時代と弥生時代-古墳時代初頭

にかけてのものを少量、古墳時代～平安時代にかけたものを多く出土した。SD 3からは弥生時代後期の甕(7)、B 4-4調査区西部の包含層から6～7世紀と思われる土師器の甕(48)やB 4-7調査区の包含層から円面硯(442)が出土した。

岩坂地区の内、遺構を確認したのはB 4-4からB 4-7にかけての地域である。この地域は後で述べる岡町地区の北に隣接し、遺構が少なく地形的には条件が良くないが、円面硯の出上などから国庁に附属する施設の存在も類推される地域である。



第10図 岩坂地区調査区位置図 (1:2,000)



第11図 B 4-7調査区遺構配置図 (1:200)

## 2. 追越地区

追越地区（C地区）は国町地区東の国町川を挟んだ地区で、北は岩坂地区である。北側水田の標高は152m、段丘縁辺部の標高は約150mと、東南に向かってならだかに傾斜する。地区表示は第12図の通りである。

平成2年度にC1地区とC2地区に幅3mの南北トレンチを約100mの間隔で設定し、調査を実施した。基本層位は北側では耕土、床土のみで、南側では瓦器を含む包含層が若干認められる。遺情検出面までの深さは概ね0.3～0.8mほどで、それぞれの水田の北側では浅く南側が深くになっている。

検出した遺構は、弥生時代中期から鎌倉時代までのものがあり、北側の岩坂地区に近い所では遺構密度が薄く、南の河岸段丘縁辺部にいくほど多くなる。

遺物は、縄文時代から鎌倉時代までのものがあるが、古墳時代の遺物が最も多く出土した。

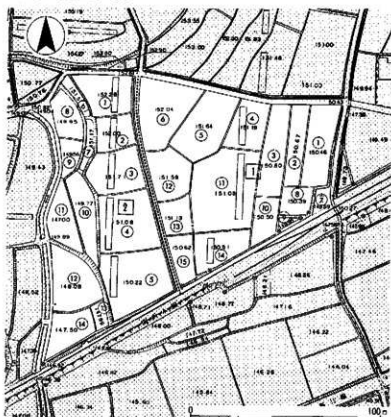
なお、掘立柱建物の柱穴からは5世紀後半の須恵器などが多く出土し、時期判断を困難にしているため、掘立柱建物については一括して記述する。

### （1）弥生時代の遺構

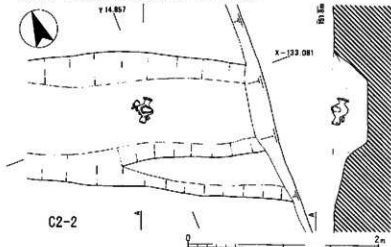
西のC2-2調査区で検出したSD13（第13図）があるのみである。幅1.4m、深さ0.4mの規模で、東南の方向に流れる。弥生時代中期のほぼ完成の台付粗頸壺（4）と、甕（5）の破片が若干出土している。溝の延長部にあたる東のトレンチで検出していないため、方形周溝墓の可能性が高い。

### （2）古墳時代の遺構

SH9（第17図）東のC1-14調査区にあり、方形を呈し、西半分を検出した。方位はN-27°-W、南北北3.7m、深さ0.2mの規模である。竈・周溝な



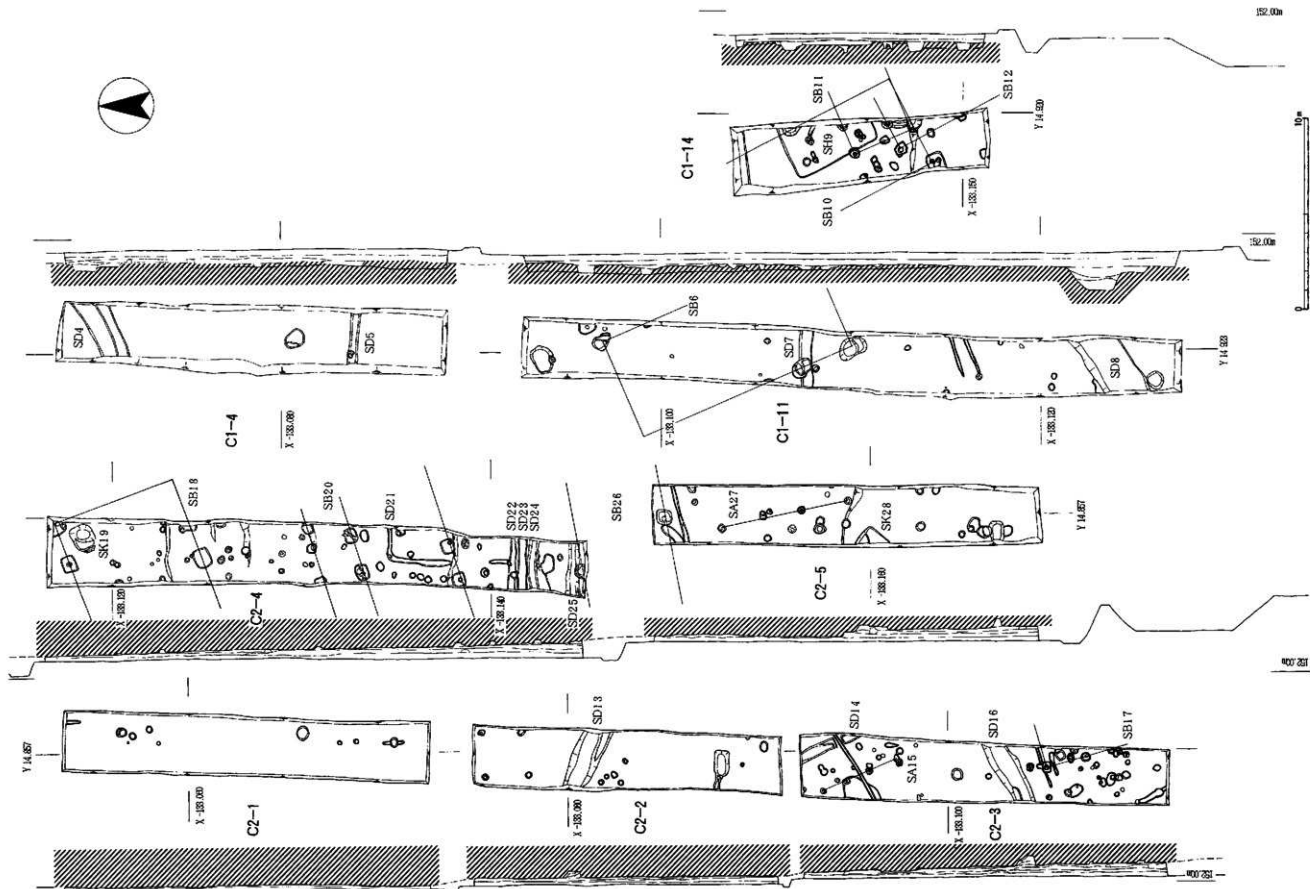
第12図 追越地区調査区位置図（1：2,000）



第13図 SD13遺物出土状況（1：40）

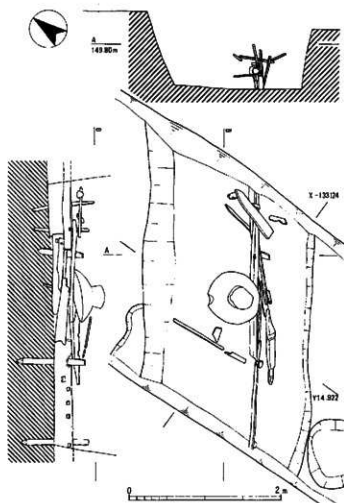
どは検出していないが、各隅から約0.2m離れた位置で直径0.4m、深さ0.2mの支柱穴を二つ検出した。出土した遺物は、土師器杯（8・9）・甕（10）のほか、須恵器杯の破片が少量あるだけである。須恵器からTK23-47号型式と思われる。

SD8（第15図）C1-11調査区南側にあり、幅2.3m、深さ1.0mの規模の溝で、西南の方向に流れる。溝底のやや南側に建築部材を転用して、先を



第14图 迤善地区建筑平面图 (1:200)





第15図 SD 8 遺物出土状況 (1:50)

尖らせた矢板を打ち込み、板材を矢板の北側に土留め(551~557)として並べている。堆積の状況から、索掘りの溝を改修して使用したものと思われる。遺物には、土師器(18~23)、須恵器(24~30)や、衣笠状木製品(558)などがある。

### (3) 飛鳥時代の遺構

溝が3条ある。追越地区内を区画する溝の可能性があり、溝と掘立柱建物とは方位が近似し、関連を窺うことができる。

SD 4 C 1-4 調査区北で検出した、幅1.0m、深さ0.2mの溝である。埋土からは木簡(538~543)のほか、子持勾玉(524)が1点出土している。南に幅0.5m、深さ0.1mの溝が重複する位置にあるが、遺物はなく別の遺構か堆積の差かは判断し難い。SD 4を西に延長する位置にはSD 16が見られ、同一の溝になる可能性が強く、方位はE-26°-Nに復原できる。子持勾玉は他からの混入品と思われる。

SD 14 C 2-3 調査区の東北部にある幅0.6m、深さ0.3mの南北溝である。溝の方位はN-20°-W前後で、掘立柱建物の方向と近似する。遺物は少なく、北のC 2-2 調査区では確認していない。

SD 16 SD 14の南にある、幅1.2m、深さ0.6mの東西溝である。出土した遺物(35~39)から見ると、7世紀前半には埋没している。

### (4) その他の遺構

SD 7 C 1-11 調査区中央にある、幅0.6m、深さ0.2mの東西溝で、遺物は出土していない。掘立柱建物SB 6より古い。

SK 19 土師器、瓦器が出土している。瓦器は山田編年のⅢ-1期で13世紀にあたる。

SD 21~25 出土した遺物は少ないが、SK 19同様13世紀代の範囲に入るものである。

SK 28 C 2-5 調査区中央西壁にあり、南北1.8m、東西は調査区外に延びるため、1m以上の三角形を呈する。竪穴住居のコーナー部分の可能性もある。土師器、須恵器が少量出土した。

### (5) 掘立柱建物について

C 1-11 調査区では、1棟検出した。

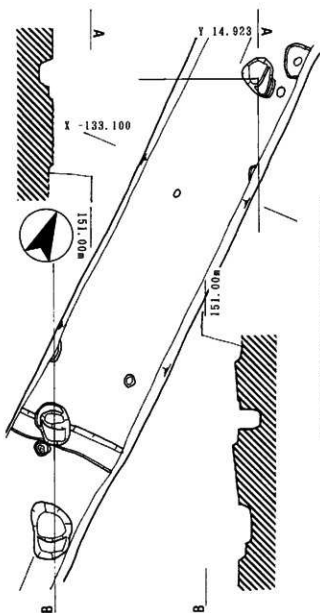
SB 6 (第16図) 梁行2間、桁行5間以上に復元できる南北棟である。柱掘形は同一柱掘形内の北側が深く2棟重複する様相を呈するため、同一場所での建て替えの可能性が大きい。SD 7より新しい。

C 1-14 調査区では、3棟(第17図)検出した。

SB 10 トレンチ南の両壁際とSH 9と重複する位置で検出した。東西2間、南北2間以上で、柱掘形は、径0.7m、深さ0.4mの方形を呈する。

SB 11 梁行2間、桁行1間以上の東西棟である。北側柱は竪穴住居SH 9と南側柱はSB 10と重複しており、共にSB 11が新しい。柱掘形は径0.5m、深さ0.2~0.4mの円形を呈する。

SB 12 南北2間、東西2間以上の規模で、棟方向は不明である。北側柱列には、径約20cm程度の残りの悪い柱根が残存する。柱掘形の大きさは、北側柱列のものが、径0.5m、深さ0.4mの方形を呈するのに対し、南側柱は、一辺0.4mとやや小さい。南側柱は、東壁付近で一部を検出したのみである。



第16図 SB 6遺構平面図 (1:100)

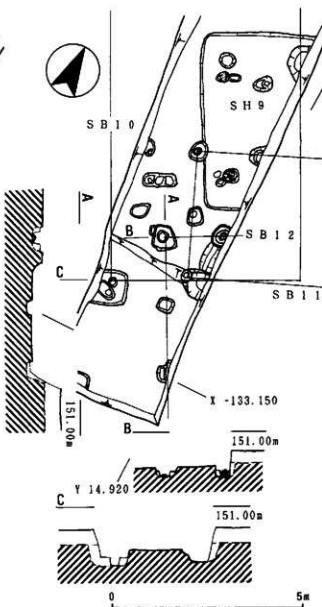
C 2-4 調査区では、2棟検出した。

SB 18 (第18図) トレンチ北側で、東西方向に並ぶ柱掘形を2列検出した。南北間の距離からみて、南北3間、東西は3間以上である。

SB 20 (第19図) SB 18の南にあり、南北3間、東西2間以上の東西棟で、北側に廂を持つ。柱掘形は廂が径約0.5m、深さ0.3mであるのに対し、桁行の柱掘形は一辺約0.8m、深さ0.4mと大きい。北桁柱列西柱穴から、馬歯 (PL 26) が出土した。

C 2-3 調査区では、1棟と柱列1条を検出した。

SB 17 トレンチ南東部で検出した、南北2間以上の建物である。柱掘形は、北側から0.4×0.6mの隅丸方形と径約0.5mの円形の二つの柱穴で、深さは



第17図 C 1-14調査区遺構平面図 (1:100)

いずれも0.3m程である。

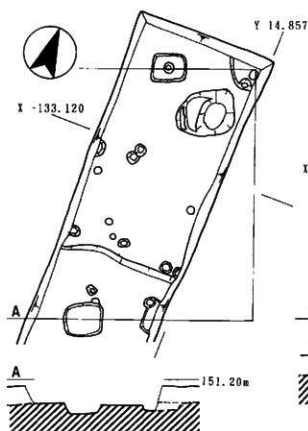
SA 15 南北3間で、柱掘形は径0.3m、深さ0.3mの円形を呈する。

C 2-5 調査区では、1棟と柱列1条を検出した。SB 26 調査区北端の一辺0.8m、深さ0.15mの方形を早する柱穴と、北側のC 2-4 調査区南端のほぼ同規模の柱穴で想定した建物である。

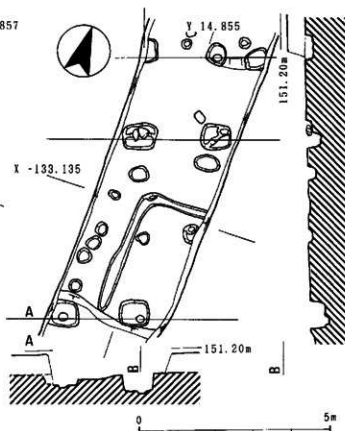
SA 27 3間分検出した。柱掘形は径0.4m、深さ0.2~0.3mの円形で、建物になる可能性も残る。

## (6) 小結

掘立柱建物の時期は、上限として5世紀後半のSH 9より新しいSB 10・11でその一端が窺え、奈良・



第18図 SB18遺構平面図 (1:100)



第19図 SB20遺構平面図 (1:100)

遺構番号	規模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m)		時期	備考
					桁行	梁行		
SB 6	(5) × 2	N23° W		5.4	2.4	2.7		2棟重複か
SB 10	(2) × 2	N27° W		5.0	—	2.5		SH9より新
SB 11	(1) × 2	E23° N		3.4	1.7	1.7		SB10より新
SB 12	(1) × 2	E28° N		3.6	1.6	1.8		
SB 17	× (2)	N16° W			—	2.2		
SB 18	(3) × 3	E20° N		6.6	2.2	2.2		
SB 20	(2) × 3	E18° N		6.9	2.1	(2.4)		廂柱間2.1m
SB 26	(1) × 2	E12° N		4.6	—	(2.3)		
SA 15	3	N23° W		4.2		1.4		
SA 27	3	N12° W		6.9		2.3		

第6表 追越地区建物規模表

平安時代の遺物が柱穴より出土しないこと、同時期の遺構も調査区にほとんど見られないこと、方位の近似するSD16が7世紀前半に埋没していることから、下限の一端を推定することができる。SD8から出土した建築部材などから、5世紀後半に周辺に掘立柱建物が存在したことは間違いないが、建物の時期を断定することは出来なかった。ここでは建物の時期は、5世紀後半から7世紀前半と幅広く考えておく。

追越地区の調査はトレンチ調査のため不明な点が

多いが、古墳時代の堅穴住居を中心とする集落と掘立柱建物、方位を同じくする溝、木簡の出土など奈良時代以前の大規模な集落が存在することが明らかとなった。堅穴住居は東の外山大坪遺跡などでも同様に検出しており、背後に造営された古墳群や御墓山古墳との関係が、掘立柱建物については、時期・規模など不明な点が多いが、国府の成立した基盤との関係で注目される地域である。

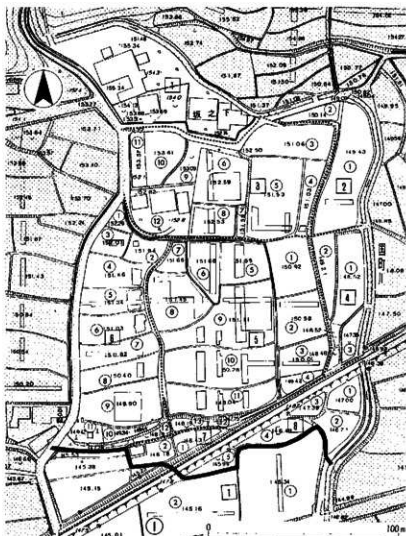
註: 1 田辺昭三「陶器古墳址」平安学術考古クラブ 1966  
2 山田隆「伊賀の瓦器に関する若干の考察」【中央土師の基礎研究Ⅱ】中央土師研究会 1966

### 3. 国町地区

丘陵背後から流れ出る国町川が、あたかも人為的に付け替えたような様相を呈して逆L字状に国町地区の西を巡る。平成元年度（調査面積約570m<sup>2</sup>）と2年度の調査（同約650m<sup>2</sup>）で、脇殿と考えられてた南北棟2棟が検出されている。今回の調査は、中軸線上に位置する正殿、南門等の施設を検出すること、脇殿の規模を明らかにすることを目標とし、1,700m<sup>2</sup>を調査した。南の水田部分については、南北と東西のトレンチを設定したが、遺構は確認できず、遺物も出土していない。

現地形は、国町地区北のD3-5地区は標高151.5mで、その西は一段高くなっており標高約153.6~152.6mである。D5-6地区は標高151m、台地南端では149mと柘植川に向かってなだらかに傾斜し、台地下の水田は標高145m程である。

遺構面までの深さは、それぞれの水田の北側で0.3m、南側では0.7~0.8mと深くなる。基本的な土層は、水田の北側では大半が層十と床十のみであるが、南側には包含層が堆積する。



第20図 国町地区調査区位置図（1：2,000）

時期	調査区域 (調査地)				(政庁域外)	土坑	溝
	正殿	前殿	西脇	東脇			
古墳					SA1025	1003	1043-1104
奈良後 期-半 安初期	1056	1065	1084 1085	1075 1070	SA1052 SA1091	1034 1011	1010-1053-1087- 1098-1099
平安 前期	1055	1066	1095	1073		1021-1105-SA1040	1028-1087-1088
						1016-1047	1009-1018-1019-1023 1030-1033-1035-1046
不明						1102	1024
平安 中期	1060		1090	1071		1022-1100	1005-1038-1050- 1069-1080-1081- 1082-1092
平安 後期	1062 1059			1072	P1074 P1078 (SD1063)	P1026	1013-1014-1034-1057 1061-1064-1101
鎌倉							1039-1041-1042- 1048-1049
不明	SA1058	1096 1097			SA1089	1037-1093-1094	1079

第7表 国町地区時期別遺構一覧表

検出した主な遺構は、5世紀後半のものを若干検出した以外は、奈良時代後半から瓦器出現前後の平安時代後期のものが中心である。以下、古墳時代、奈良時代後半から平安時代初期（8世紀末から9世紀初め）、平安時代前期（9世紀）、平安時代中期（10世紀）、平安時代後期（10世紀末～11世紀）の時期に分け、建物については政庁城内と政庁城外（外郭）の建物に分けて既述する。なお、遺構について主要なものは本文中に記載したが、その他のものについては付図の国町地区遺構平面図（1：200）を、また、建物規模などについては、第8表（P49）を参照された。

## （1）古墳時代の遺構

古墳時代の遺構・遺物は、北の岩坂地区から続くD3地区と東南部のD5-3地区で主に検出した。遺物から見て、5世紀後半から6世紀初頭にかけての時期が中心である。

SA1025（第32図）D5-9東調査区の南側にあり、北東から南西方向に延びる柱列である。東のD5-2、西のD5-9西調査区の柱列延長上でも柱穴が多数あり、国町地区を横断する柱列の可能性も残る。柱穴は径0.6m程度の円形で、ここでは8間分を確認した。遺物はほとんど出土していないが、柱列の方向が国町地区で検出した他の建物と異なり、古墳時代の溝や追越地区の建物の方向に近いことから、追越地区の建物同様に、5世紀後半から7世紀まで幅広く時期を考えておく。

SK1003 D3-6地区の平成2年度調査区の西南にあり、南北5.5m、東西は2m以上、深さ0.2mの方形を呈する土坑である。平面形態から見て、堅穴住居になる可能性もある。

土師器碗（42・43）、甕（44・45）が出土しているが、明確な時期は判断し難い。6世紀代に入るものかと思われる。

SD1043（第31図）D5-3地区の東西トレンチで検出した。幅1.1～1.3m、深さ0.5mの東北から西南の方向に流れる斜行溝である。

埴土から土師器碗（11・12）・高杯（13）・甕（15～17）、須恵器杯（14）・甕等が少量出土している。須恵器は、5世紀後半のTK23号型式に比定できる。

SD1104（第29図）D6-9調査区の東南にあり、幅0.8～1.5mの斜行溝である。SB1105より古く、一部を断ち割り、深さ0.3mであることを確認した。建物より古く、奈良時代以前の遺構と言えるが、遺物が出土していないために時期は断定できない。

## （2）奈良時代から平安時代初期の遺構

遺物の中には奈良時代に属するものが一部見られるが、遺構から出土したものが少なく初現の時期を確定することが困難である。奈良時代の前半の遺物はほとんど出土していないため、奈良時代前半まで遡る可能性は低いものと考えられる。この時期の建物から出土する遺物のうち時期の明確なものには、8世紀末から9世紀初頭にかけての平安時代初期のもので、建物自体は平安時代前期前半まで一部存続する可能性がある。

平成3年度の調査は、平成元年度で検出したSB1085と2年度で検出したSB1020を東西の両脇殿と当初考え、その中軸線上、特にD5-8地区では正殿、前殿、後殿のいずれかの建物が検出できるように、広めの調査区を設定して調査を開始した。D5-8北側とD5-6西側で約3m間隔に並ぶ柱列を多数検出したが、更に調査区の西側に延びるため、D5-8北側で調査区を一部西に拡張して建物の規模を確認することとした。この結果（第21図）、柱間がほぼ3m等間の正殿に相当する建物を4棟以上、前殿2棟を検出した。後殿に該当する建物は、なかったものと思われる。建物は一部のみを確認したものが多く、後述する脇殿の建物にしても、全体が判明したものはない。そのため、今後の調査で遺構の把握が出来るよう、柱穴の断ち割り等はできるだけ避けた。

### 政庁城の建物

正殿SB1056、前殿SB1065、西脇殿SB1084・1085、東脇殿SB1070・1075、掘立柱榭SA1052・1091がある。

SB1056（第21図）SB1056は、D5-8調査区北側のSB1055の柱穴立割りを2ヶ所で行った際、その断面の下層で確認した。D5-6調査区の東北隅の柱穴は、当初SB1055の北南部分の東から2番目と考えていたが、SB1055北南部分の東隅柱穴と

思われるものは浅く、柱穴と断定するには至らなかったため、断面下層で確認したS B1056の東北隅の柱穴と考えた。

S B1055とはほぼ重複する位置であるため、東西5間、南北についてはD5-6調査区とD5-8調査区の柱穴間の距離が約9mあることから、南側に廂のつく5間×3間の建物が想定できる。

S B1065 (第21図) D5-8調査区の西南側にあり、東西3間以上、南北2間の東西棟である。柱筋は北のS B1055・1056に揃う。柱掘形は一辺1.2mの方形で、調査区西の北隅柱を立割り、深さ0.7mであることと、後述するS B1062・1066より古いことを確認した。埋土は、黄褐色土である。前殿に相当する建物で中軸線が正殿と同一と考えるならば、桁行3間、梁行2間の規模に復原することができる。

S B1085 (第23図) D6-5・6-6調査区で検出した4間×2間の南北棟で、西脇殿に相当する。柱掘形はD6-5調査区のものは一辺0.8~1.0m、D6-6調査区では一辺1.0~1.2mの方形を呈し、深さは約0.6mの規模である。柱根は、西側柱列の北側(559)や北から3・4番目、南妻柱等に残っていた。S B1090より古く、南西隅柱から土師器碗(398)、須恵器杯(402)、南妻柱の柱痕跡上面で土師器杯(399・400)、黒色土器碗(401)などの遺物が出土した。

S B1084 (第23図) S B1085の北に位置し、棟方向はS B1085と揃える。西南隅の柱穴はS B1085の西北隅の柱穴から2間目の位置にあたり、当初はS B1085が北に更に延びるものと考えていた。しかし、その間の柱想定位置では、平面精査および立割を行ったが柱穴は検出できなかつたため、S B1085とは別の建物と判断せざるを得なかつた。2間×2間の規模として復原したが、妻柱の未確認など問題の残る建物である。西北の柱掘形は東西1.6m、南北1.3mの隅丸方形で、深さは0.8mである。この柱穴内には径42~47cm、残存高約80cmの柱根(560)が残っており、土師器(395・396)、須恵器(397)等の遺物が出土した。

S B1070 (第25図) S B1070の位置するD5-8調査区の東南は、東脇殿の推定位置にあたる。ここは4棟以上の建物が重複していることや、建物として復元していない柱根の残る柱穴もあることなど、

東脇殿を考える上で問題の多い地区である。最も古い建物と考えられるS B1070は、西側柱列を3間分検出した。西脇殿のS B1085と対象位置にあるが、調査区内では、北妻柱及び西北隅柱は確認していない。北から3番目の柱掘形堀上から完形の土師器碗6個体(384~389)が集中して出土したほか、北から4番目の柱穴からは土師器碗(390・391)・皿(392)が出土した。

S B1075 (第25図) S B1070の北に想定した建物で、西のS B1084に対応するものである。D5-6調査区の南端とD5-8調査区南端で検出したもので、柱掘形は一辺0.8~1.0mの方形を呈する。

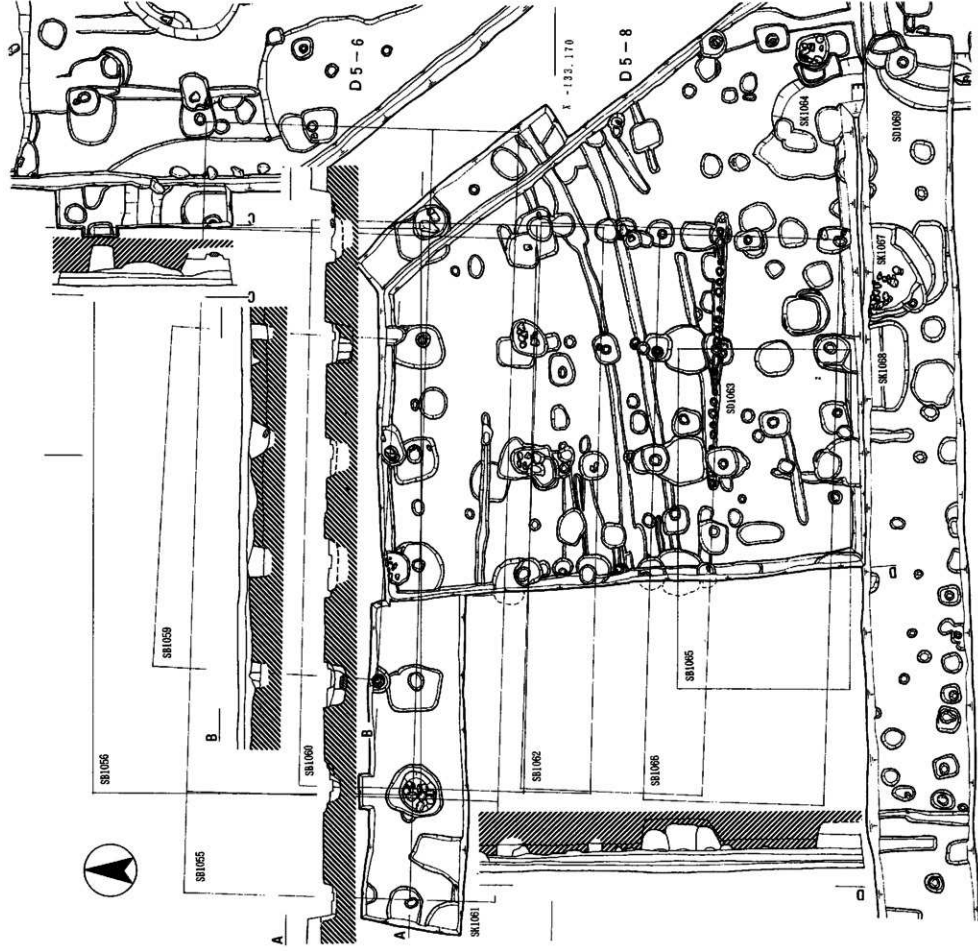
S A1052 (第26図) D5-6調査区の北側で、東西3間分を検出した。柱掘形は一辺0.8mの方形で、東の柱穴を立割り、深さ0.5mであることを確認した。平成元年度の南北トレンチでは、東壁に沿って南北にはほぼ等間隔に並ぶ柱穴を多数検出しており、北端のものは塙東北隅の柱穴にあたるものと思われる。この位置で東西方向の塙がL字状に南に折れ曲がる可能性が高い。塙東端から東1間目の柱想定位置では、柱穴を確認していない。

S A1091 (第23図) D6-5調査区にある南北3間以上の掘立柱塙である。柱掘形はばらつきがあるが、一辺0.5~0.8m、深さ0.5mの方形を呈する。平安時代前期の遺構と重複しており、掘立柱塙S A1091→南北溝S D1088→土坑S K1086の順であることを確認した。この南北塙の位置は東に推定される南北塙S A1052と正殿を挟んでほぼ対象位置に当たり、政庁を囲む塙の可能性が高いものである。

#### 外郭の建物

政庁域の北側でS B1001・1002、西側でS B1015・1020がある。

S B1001 (第30図) 平成元年度のD3-6南北トレンチで検出した、西に延びる南北3間の東西棟である。北側の柱掘形は一辺0.7mと他の一辺1mと比較して小形であること、北側の柱間が狭いことから北側に廂を持つものと考えた。なお、南に1間の廂がつく可能性もあるが、柱掘形が不定形のためここでは廂とはしていない。埋土から出土した遺物の大半は5世紀後半のものであるが、底部へう削り・内面に暗文の残る土師器皿などの破片が数片出土し



821.7.1



第21図 正殿、前殿地区遺構平面図 (1:100) レベル高: 152m

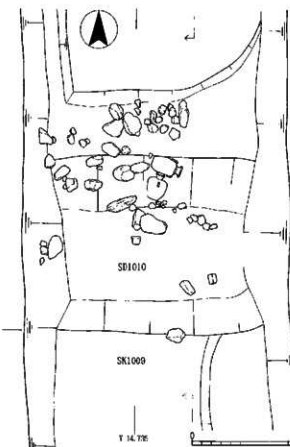
ている。

SB1002 平成2年度のD3-6調査区の東北部で検出したもので、南北2間、東西は調査区東に延びる1間以上の東西棟である。柱掘形は径0.5mの円形で、深さ0.4mである。遺物は出土していないが、南に位置する南北棟SB1015の西側柱と柱筋を描えるため、当該期とした。

SB1020 (第28図) D5-9調査区にある平成元年度、平成2年度の調査で一部確認し、当初は東脇殿と想定した建物である。平成3年度の調査で、桁行5間×梁行3間の南北棟であることを確認した。柱掘形は一辺1.5m、深さ約1mと柱掘形の規模としては、当該路では最大級のものである。

北側柱列東から2番目の柱穴内では、径約0.2mの外側の木質部分のみが残る柱根を検出した。柱根は、残存長約0.2mほどの小さなものである。柱痕跡がずれることやその大きさなどから、SB1020の柱根とは考え難く、他の建物が重複していると思われるが確認することは出来なかった。

SB1015 (第27図) D5-5調査区にある、桁



第22図 SD1010遺物出土状況 (1:40)

行5間×梁行3間の南北棟である。棟方向は、南にあるSB1020と西側柱列を描える。柱掘形は一辺0.6mの方形で、深さは0.5~0.7mの規模である。西南隅の柱穴には径0.3mの柱根が残っていたが、他の柱穴のものは腐って粘土質状となっていた。柱掘形埋土から、9世紀初めに比定できる土師器杯(393)・碗(394)が出土した。

その他の遺構

SD1010 (第22図) D3-8調査区で検出した。上面での幅は約3m、なだらかに落ちて途中から約2mとなり、深さは約0.7mで、溝の南半部は時期の新しいSK1009と重複する。遺物は、土師器(49~53)、須恵器長頸壺(56・57)・横瓶(54)・鉢(55)などが出土した。この内、須恵器長頸壺(56・57)はほぼ完形で、調査区東側の平成元年度の調査で、埋土上層から掌大の礫と共に出土した。

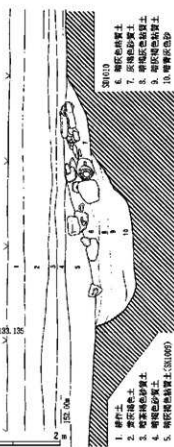
現地形を見ると、D3-8調査区の東と南は約1m以上の比高差があり、溝底面の標高15L.3mは、東のD3-5調査区の遺構検出面に相当する。そのため、東の延長上で検出したSD1004は、規模的には

類似するものの深さは数cmに満たないもので、遺物もなく、同一の溝かは断定できない。

SD1053 (第26図)

D5-6調査区のSA1052の南1mにある幅1.2~2.0m、深さ0.5mの東西溝である。東端は途切れ、西は調査区外に延びる。方向から、北にある掘立柱塼SA1052に伴うものとも考えられるが、南北方向の溝に伴う溝は確認していない。土師器・須恵器が少量出土した。

SD1087 (第23図)





D6-5調査区の西壁際で検出した、幅0.6m以上で、深さ0.1mの南北溝である。方向は北で西に2°振れる。遺物はほとんど出土していないが、平安時代前期の土坑SK1086より古い。

SD1098(第24図) D6-6調査区の南にある、幅1.0m、深さ0.15mの東西溝で、SB1090・1095より古い。方向は東で南に約3°振れる。遺物は、外面にヘラミガキ・内面に螺旋状暗文の残る土師器杯や須恵器杯などが少量出土した。

SD1099(第24図) D6-6調査区からD6-5調査区で検出した、幅0.5m、深さ0.2mの小規模な南北溝である。遺物は出土していないが、SB1085より古い。検出した範囲がSB1085の西隅柱列とほぼ同じ範囲であるため、当該期の西脇殿に伴う溝の可能性もある。

SK1011 D3-8調査区の南に位置し、SK1009を完掘して検出した。幅2.2m、長さは4.5m以上の規模で、西の調査区外に延びる。埋土中には木片が多く混入しているため、溝の可能性も残る。遺物は、土師器(59-70)、須恵器(72-73)の他、黒色土器(71)の細片が3片、須恵器製の体部片を利用した転用現(457)が出土した。

SK1034(第33図) D5-9東調査区南側で検出した、幅0.6m、長さ1.0m、深さ0.2mの小規模な土坑である。遺物は少ないが、円面硯(438)が出土している。

### (3) 平安時代前期の遺構

この時期の遺構と思われるものが最も多い。出土した遺物から、9世紀前半の狭狭黒管14号窯期と後半の黒笹90号窯期の選擇に別れる。建物については9世紀前半・後半に分けることが困難なために一括し、その他の遺構については時期別に既述する。

#### 政庁城の建物

正殿SB1055、前殿SB1066、西脇殿SB1095、東脇殿SB1073がある。

SB1055(第21図) D5 6・5-8調査区にある、桁行7間、梁行3間の東西棟で、西・南・東の三面は廂部分になると考えられる。柱間は母屋部分3mであるのに対し、廂は2.7mである。柱掘形は母屋部分が一辺1.2mの方形で、深さは0.2-0.3m

であり、廂部分はやや小形で一辺0.8mの方形を呈する。掘形埋土はいずれも黄褐色土である。正殿SB1056より新しく、SB1060より古い。

SB1066(第21図) D5-8調査区南側にある前殿SB1065より新しく、東西3間以上、南北2間の東西棟である。SB1065と同様に考えるならば、桁行5間×梁行2間の東西棟に復原できる。柱掘形は一辺0.7mの方形で、深さは0.5mである。

SB1073(第25図) D5-8調査区東南の東脇殿にあたる礎石建物SB1071と、重複する位置にある。SB1071のすべての礎石掘え付けの根石のド(3ヶ所)で柱根が腐ったためか、空洞が平面で確認できた。そのうち1ヶ所です立割りをを行い、径0.35mの柱根が残存することを確認した(PL7下)。柱掘形は一辺1.0mの方形で、深さは0.6mの規模である。礎石建物と重複する位置にあるため、柱を上面で切断して礎石に建て替えたことが推察される。遺物はほとんど出土していない。

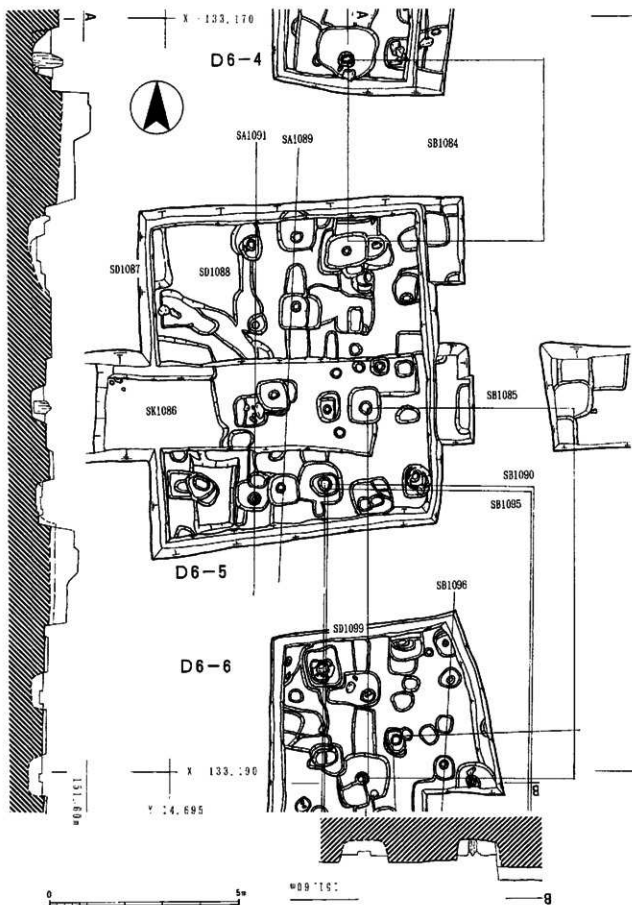
SB1095(第24図) D6-5・6-6の内脇殿SB1090のドで確認した。SB1073と同様に礎石の根石の下にあるもので、SB1090のすべての掘方のドで確認した。柱掘形は一辺0.7mの方形で、深さは立割りを行っていないために不明である。遺物は出土していない。

#### 外郭の建物

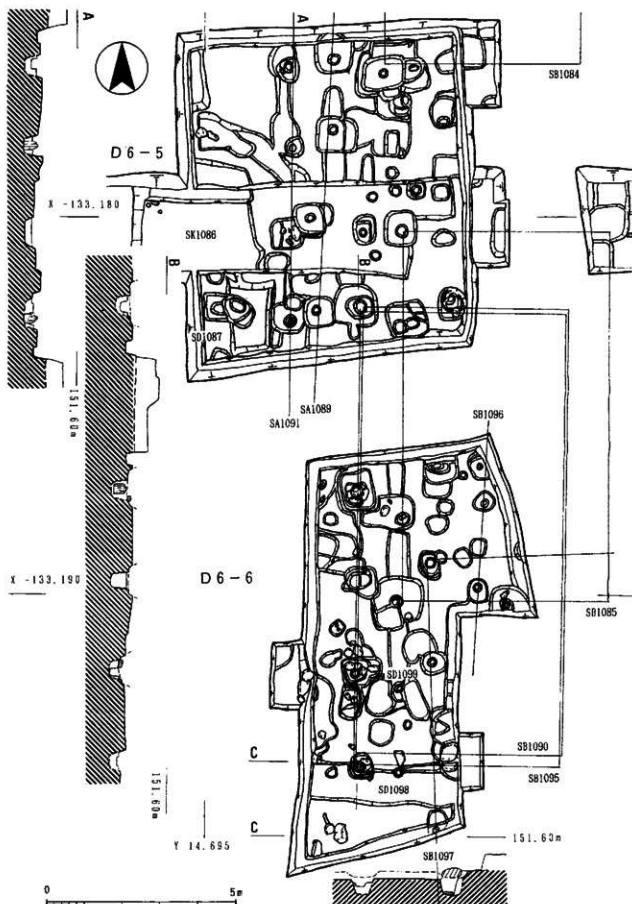
政庁城の東側でSB1016・1021、西側でSB1102、SA1040、東南側でSB1047、西南側でSB1105がある。

SB1016(第27図) D5-5調査区東にある。南北3間の東に延びる建物で、南妻柱を確認しているため3間×2間の南北棟の可能性が高い。柱掘形は径0.5-0.8mの隅丸方形で、深さは0.3-0.5mである。西北隅の柱穴には残りの悪い柱根が残存する。柱掘形から9世紀後半の灰胎陶器の薄片が出土した。

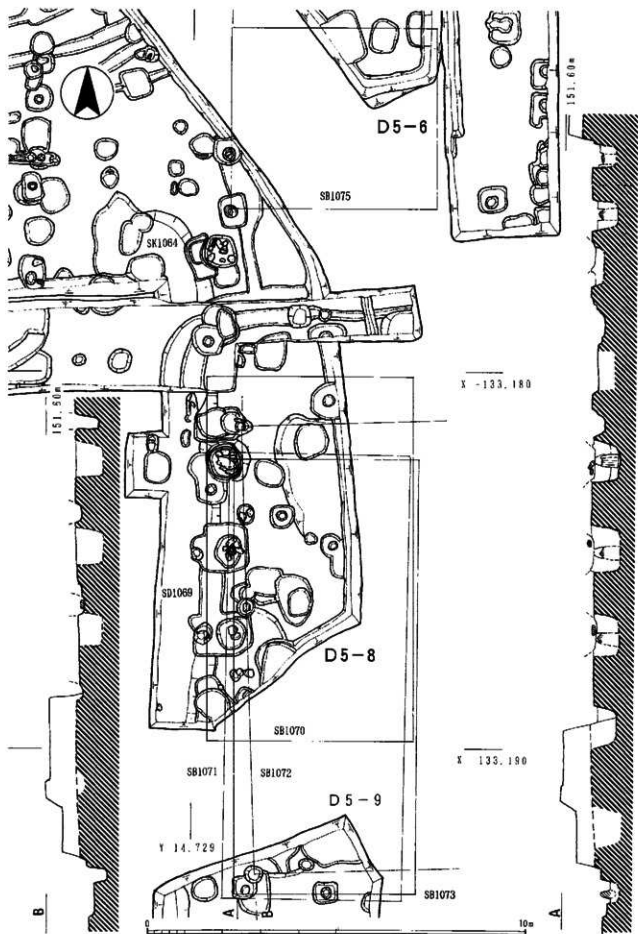
SB1021(第28図) D5-9東調査区のSB1020と重複し、重複関係は、SB1020→SB1021→SK1018である。柱掘形は、一辺0.6-0.8mの方形を呈する。北側柱列が位置する平成元年の東西トレンチでは、柱穴を確認していない。建物は検出した柱位置から考えると、南に廂のつく3間×2間以上の東西棟と思われる。



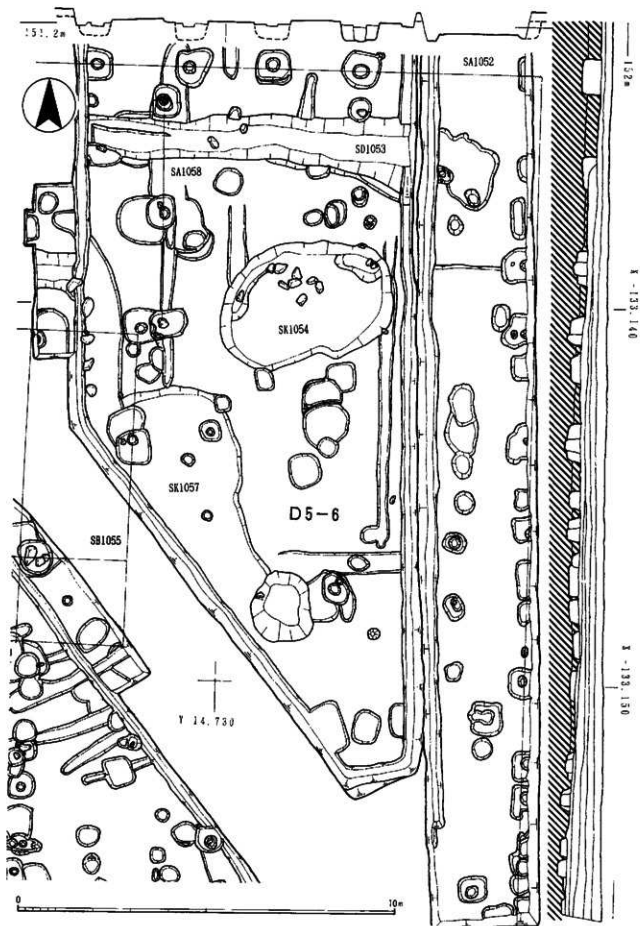
第23図 西船殿 S B 1084-1085遺構平面図 (1:100)



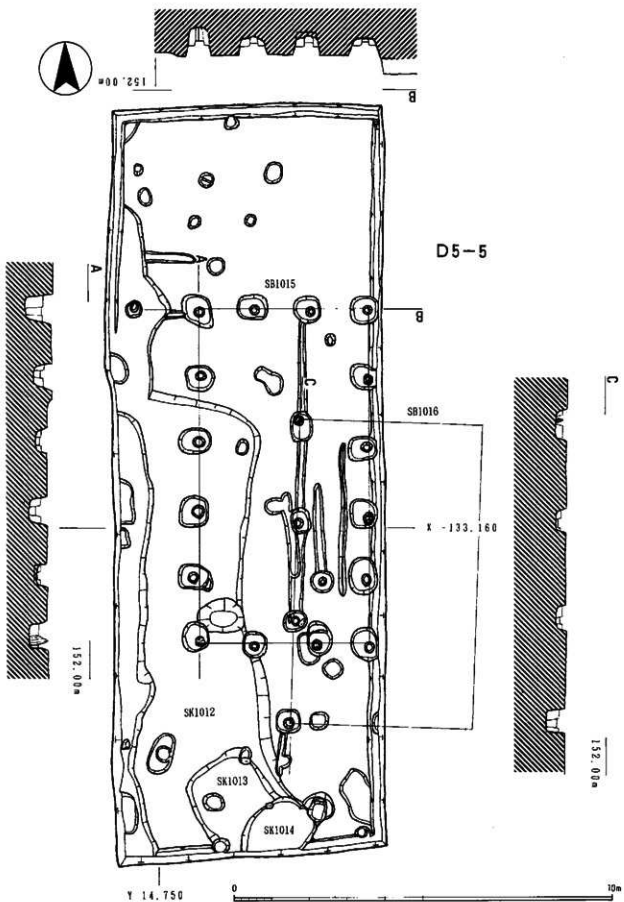
第24図 西脇殿 S B 1090・1095遺構平面図 (1 : 100)



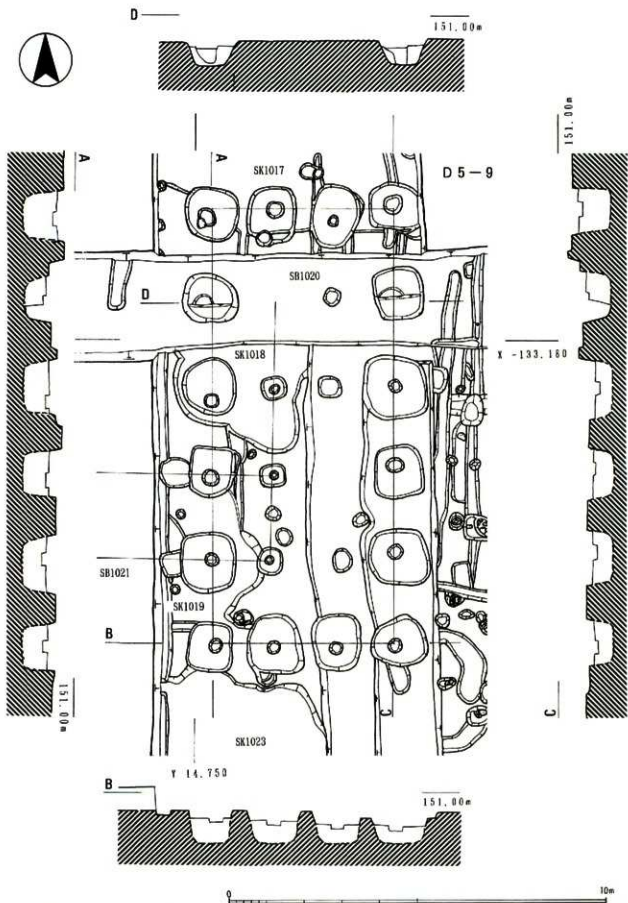
第25図 東脇殿 S B 1070~1073・1075遺構平面図 (1 : 100)



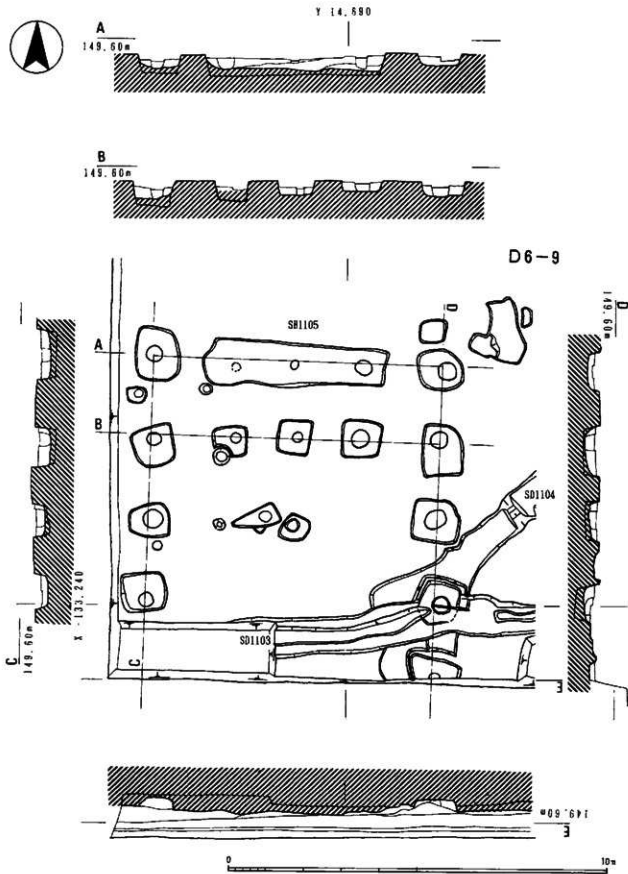
第26図 SA1052遺構平面図 (1:100)



第27図 S B 1015・1016遺構平面図 (1:100)

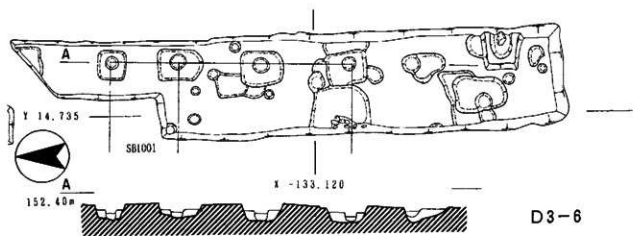


第28図 SB 1020遺構平面図 (1:100)

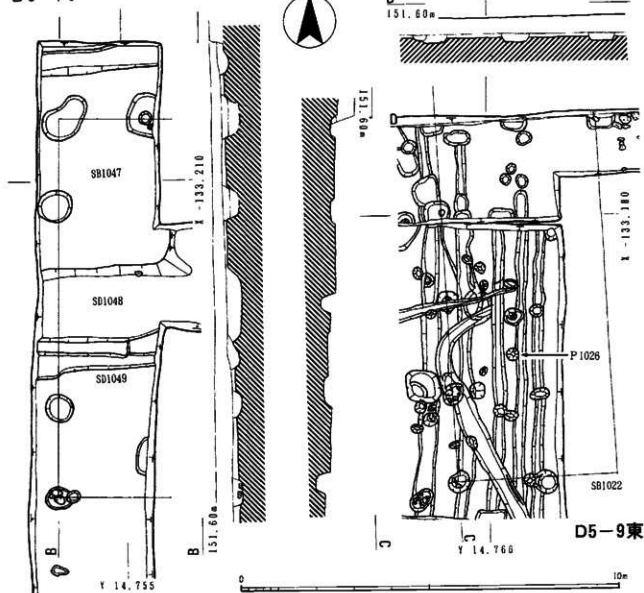


第29図 SB1106遺構平面図 (1:100)





D5-10



第30圖 S B 1001-1047-1022遺構平面圖 (1:100)

出土した遺物はわずかであり、9世紀後半の土坑 S K1018より古いために9世紀前半とした。

S B1047 (第30図) D5-10調査区で検出した。鎌倉時代の溝に壊されているが、4間×2間の南北棟と考えられる。掘形埋土から猿投窯黒笹90号窯期の灰軸陶器皿の小片が出土した。

S B1105 (第29図) 平成2年度のD6-9調査区で検出した、北端を持つ東西4間×南北5間以上の建物である。北側柱掘形は両端が単独で、中の3ヶの柱掘形は共有するいわゆる溝持ちの柱掘形である。東西4間、南北5間以上であるため、南北棟と考えられる。総柱建物とは考え難く、東柱と思われる柱を1ヶ検出したが他にはなく、建物構造については不明である。遺物はほとんど出土していないが、棟方向がほぼ真北で、奈良時代後期から平安時代前期の建物と同じであることから当該期とした。東側柱列北から5番目の柱穴は、S D1104より新しく平安時代後期のS D1103より古い。西側柱列の北から5番目の柱穴は、調査区南壁の断面でのみ確認した。

S B1102 (第34図) D6-7調査区の中央にあり、東側柱は南北両壁際、西側柱は南壁際で検出した。東側柱の柱間から、南北柱間は3mと復原される。柱掘形は径0.6mの円形で、深さは断ち割っていないが0.3m以上である。東北と西南には径約0.3mの柱根が残る。遺物はほとんどなく、時期については断定できないが、棟方向から平安前期とした。

S A1040 (第31図) D5-3調査区西端にある柱穴である。柱掘形は、一辺0.9mの方形で、深さ0.4mである。埋土から、猿投窯黒笹14号窯期の灰軸陶器片、黒色土器、製塩土器の小片や馬歯1点を出土

した。柱穴から西5mのD5-10調査区では確認していないため、堺の可能性が高いものである。

#### その他の遺構

##### A) 9世紀前半の遺構

S K1008 D3-8調査区に位置し、S K1009より古い。幅1.4m、長さ約6mの不定形を呈する。土師器杯(103・104)・皿(105・106)と少量の須恵器のほか、馬歯が1点出土した。

S K1086 (第23図) D6-5調査区東側で平成元年度と3年度の調査で検出した土坑で、東西4.7m、南北4.6m、深さ0.2mの円形を呈する。埋土は炭化物を含む。南北溝S D1088・1087より新しい。

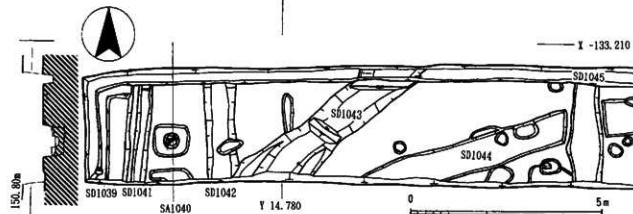
遺物は土師器(83-98)が中心で、須恵器、黒色土器(99・100)、猿投窯黒笹14号窯期の灰軸陶器(101・102)が少量と、円面硯(441・446)や黒色土器風字硯の破片と思われるもの(451)も出土した。

S D1028 (第33図) D5-9東調査区の南にある、幅1.95m、深さ0.35mの東西溝であるが、西7mにある南北トレンチでは確認していない。少量の土師器(74-77)、須恵器(78-80)のほか、猿投窯黒笹14号窯期と思われる灰軸陶器碗の小片(81)と瓶(82)が出土した。S K1030より古い。

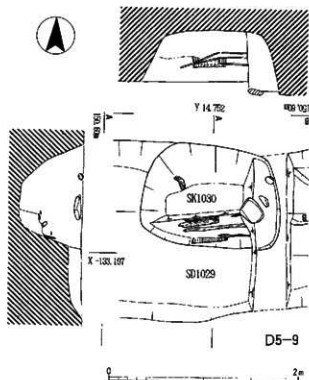
S D1088 (第23図) D6-5調査区で検出した幅0.3-0.4m、深さ0.1mの南北溝で、方向は北で東に約3°振れる。土師器、須恵器を少量出土した。切合関係は、S A1091→S D1088→S K1086である。

##### B) 9世紀後半の遺構

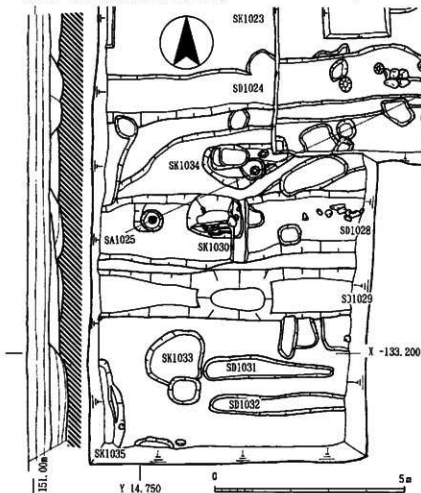
S K1009 (第22図) D3-8調査区の南にあり、西・東・南は調査区外に延びるため規模は不明である。深さは、約0.2mである。北側ではS D1010と一



第31図 D5-3調査区西部遺構平面図(S A1040)(1:100)



第32図 SK1030遺構平面図 (1:40)



第33図 D5-9東調査区南側遺構平面図 (1:100)

部重複し、切り合いはSK1009が新しい。

堀土中に炭化物を多く含み、遺物はコンテナで4箱ある。土師器(107~126)、黒色土器、須恵器(127~133)、灰釉陶器(134・135)、製塩土器の小片のほか、灰釉陶器風半碗(454)が出土した。

SK1018(第28図) D5-9東調査区で検出した、東西3.5m、北半分は平成元年度の東西トレンチで切られているために南北3m以上、深さ0.2mの楕円形を呈する。SB1020・1021より新しい。土師器(181~185)、須恵器、黒色土器が少量出土した。

SK1019・1023(第28図) SK1018の南に位置し、西の調査区の外に延びる重複する二つの土坑で、深さ0.2mの不定形を呈する。重複関係はSK1019→1023で、いずれもSB1020より新しい。

SK1019からは、土師器、須恵器が僅かに、SK1023からは、土師器(186~194)、須恵器(197)、黒色土器(195)、緑釉陶器(474・479)、灰釉陶器(196)などがコンテナで2箱のほか、黒色土器風半碗(452・

453)が出土した。遺物から見てこれらの土坑は、ほぼ同時代のものと考えられる。

SK1030(第32図) D5-9東調査区の南にある、東西1.42m、南北1.1m、深さ0.64mの隅丸方形を呈する土坑である。

遺物は少ないが、上面で口縁部の欠けた緑釉陶器唾壺(486)の他、土師器皿(139)・杯(140)、黒色土器杯(141)が出土した。

土坑壁面に沿って、縦方向の板材の痕跡が一部に残っているため、木製容器が据え付けられていた可能性もある。内側上部でも、東西方向に木目の残る板材の痕跡が一部残存している。調査時点で水が湧き出たことを考え合わせると、井戸の機能を有する遺構の可能性もある。SD1028より新しい。

SK1033(第33図) SK1030の南にある、径1.5m、深さ0.1mの楕円形を呈する土坑である。遺物は、

土師器杯(198)・皿(199)・鉢(202)、ロクロ成形土師器碗(200・201)、黒色土器碗(203)等を出土した。

SK1035(第33図) D5-9東調査区の西南隅で検出したもので、東西0.5m以上、南北2.3m以上、深さ0.4m、西と南は調査区外に延びるために規模は不明である。

埋土は炭化物を多く含んでおり、遺物はコンテナで3箱出土した。土師器(142-166)が大半で、他に黒色土器(167-178)、須恵器(179)、緑軸陶器(465・470・476・477)、灰軸陶器(180)、黒色土器の風守硯(449)などが出土した。

SK1046 D5-3調査区の東端で検出し、東と南は調査区外に延び、北側は攪乱やSD1044によって壊されているため、規模は不明である。深さは0.1mである。土師器、黒色土器、土師などをコンテナで1箱出土した。

SD1029(第33図) D5-9東調査区の南にある、幅1.3mの東西溝で、東西共調査区外に延びるが、西の南北トレンチでは検出してない。深さは0.1mほどで、中央はやや深く0.3mである。遺物は、土師器(136)、須恵器(137)のほか、黒色土器片がわずかに出土した。

SD1031・1032(第33図) これらはSD1029の南に位置する、幅0.5m、深さ0.1mの東西溝で、長さ3-4mにわたり検出した。

SD1032からは、緑軸陶器とともにロクロ成形土師器碗(138)が出土し、9世紀後半に比定できる。

SD1031はSK1033より新しく、出土した遺物は少ないが、同様な時期が考えられる。

この周辺では、SD1028・1029など東西溝を多数検出している。西側のD5-8調査区では検出してないため、この間に政庁の東を囲する南北溝が位置し、これに取り付け可能性が高い。

#### (4) 平安時代中期の遺構

##### 政庁域の建物

SB1060・1071・1090がある。

SB1060(第21図) D5-8調査区の北にあり、5間×3間と推定される東西棟で、正殿に相当する建物である。柱掘形は浅く不定形を呈し、人頭大の礎が多くみられることから、礎石の据付痕の可能性

が高い。礎石の抜き取りに伴うと思われる、10世紀末の遺物も一部混入している。

SB1071(第25図) D5-8調査区の東南にある、東脇殿に相当する建物である。西側柱列のみで、妻柱は検出してない。柱掘形は浅く不定形を呈し、人頭大の礎が見られ、礎石建物の据付痕と思われる。東側柱列北から2番目の柱掘形から406、3番目から403-405・407の土師器が出土した。

SB1090(第24図) D6-5・6-6調査区で検出した南北棟で、西脇殿に相当する。西側柱列、南北両妻柱を検出した。柱掘形は浅く、人頭大の石が混入している状況から見て、SB1071同様に礎石建物と考えた。埋土は炭化物を含み、土師器(419-436)、黒色土器B類碗(431)等の遺物を少量出土した。

##### 外郭の建物

政庁域の東側にSB1022、西側にSB1100がある。

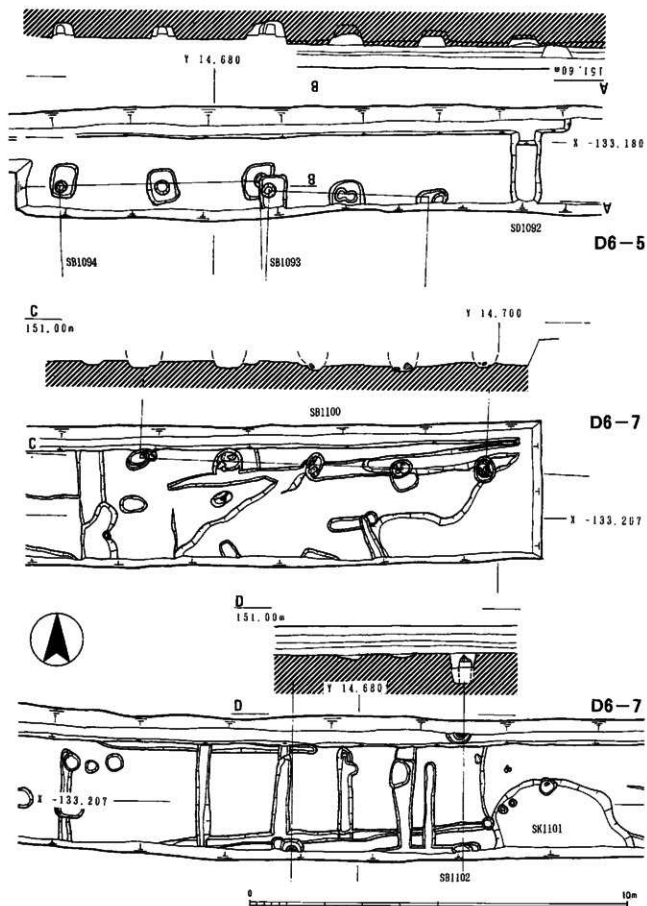
SB1022(第30図) D5-9東調査区の平成元年、2年度の調査で検出した、南北棟である。柱掘形は径0.3mの円形で、深さは0.4mとやや小型である。出土した遺物から、10世紀後半の建物と考えられる。他の建物方向が北で東に振れるのに対し、SB1022は北で西に振れる。

SB1100(第34図) D6-7調査区東側で、北壁に沿った位置で4間検出した。柱掘形は径0.6mの円形で、深さは0.2mと浅く、0.2m程度の礎を多く混入していた。埋土から10世紀前半の遺物が出土した。掘立柱塼の可能性も残るものの、北側のD6-5調査区で柱穴を確認していないため、ここでは掘立柱建物としておく。

##### その他の遺構

P1026(第30図) 平成2年度のD5-9東調査区の東北部で検出した柱穴で、径0.3m、深さ0.1mの円形を呈する。柱穴内中央部で、下から黒色土器碗(417)、土師器杯(415)、黒色土器碗(418)、黒色土器壺(416)の順で遺物が出た。

P1074(第35図) D5-9西調査区の中央にある、径0.5m、深さ0.2mの柱穴である。建物としてはまとまらなかった。後述する整地層を除去して検出した。柱痕跡内から、宍形の土師器皿(408-410)、黒色土器碗(411・412)が出土し、建物廃後に土



第34图 SB1093·1094·1100·1102纵横平面图 (1:100)

器を埋納した状況を呈する。他に柱穴検出時に包含層として取り上げた黒色土器小碗が1点あるため、3対ずつ埋めた可能性もある。

P1078 (第35図) D5-9西調査区にある径約1m、深さ0.2mの柱穴である。建物としてはまともななかった。後述する整地層を除去して検出し、SK1077より新しい。ロクロ成形土師器碗(413)、土師器碗(414)などが出土した。

SK1006・1007 この2基の土坑は、D3-4調査区に位置し、重複関係はSK1006→1007である。規模は、いずれも調査区外に延びるために不明である。

SK1006は深さ0.5mで、遺物をコンテナで1箱出土した。遺物の大半は6世紀代のものであるが、10世紀前半の土師器小皿、黒色土器、緑軸陶器碗などを少量出土した。

SK1007は深さ0.2mと浅く、土師器と須恵器が少量出土した。SK1006同様、10世紀代の遺構と思われる。

SK1012 (第27図) D5-5調査区西部にあり、規模は調査区外の西と南に延び、東西4m以上、南北12.5m以上である。深さ0.2mで、西端は一段深くなり0.4mである。9世紀後半から10世紀前半の遺物が混在し、幾つかの遺構が重複している可能性もある。

遺物はコンテナで4箱あり、土師器(204~221)と黒色土器(222~228)が大半で、灰軸陶器(229~231)、緑軸陶器(467~472)、須恵器装面視(455)等を少量出土した。重複関係は、SK1012→1013→1014である。

SK1017 (第28図) D5-9東調査区の北端で検出した、南北5.0m、東西6.0m、深さ0.1mの不定形を呈する土坑で、SB1020より新しい。遺物はコンテナに1箱で、土師器(269~281)、須恵器、黒色土器(282~286)、緑軸陶器(488)等がある。土師器小皿等があることから10世紀でも中頃以降のものと思われる。SB1020の柱掘形と重複する位置付近で平安前期の特色を残す土師器皿(281)、黒色土器鉢(286)、土師器杯(277~280)が出土しているため、別の遺構の重複している可能性もある。

SK1051 D5-11東調査区の東南隅で検出した。深さ0.2mで、調査区外に延びるため規模は不明であ

る。遺物は、土師器、黒色土器A・B類の小片が出土しており、10世紀前半頃の遺構と思われる。

SK1067 (第21図) 平成元年度D5-8東西トレンチの中央北側で検出したもので、東西2.5m、深さは0.2mの円形を呈する。遺物には10世紀代の土師器、黒色土器を少量出土したほか、近江産の緑軸陶器の小片が1点ある。

SK1068 (第21図) 平成元年度のD5-8東西トレンチの中央北側で検出したもので、東西2.2m、深さは0.1mの円形を呈する。

SK1077 (第35図) D5-9西調査区の東西溝SD1069と南半が重複し、東西1.7m、南北約3m、深さ0.1m程の方形を呈すると思われる。遺物は、10世紀中頃の土師器(247~255)、黒色土器(256~260)の他、緑軸陶器碗の小片も出土した。

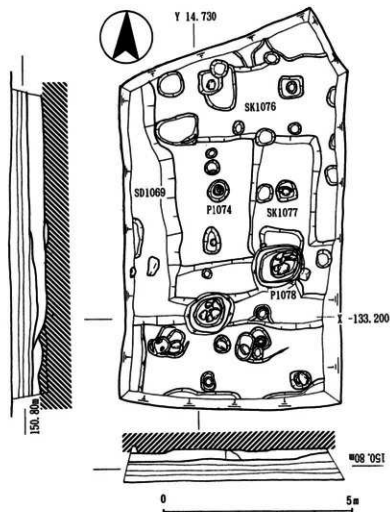
SK1083 D5-11西調査区の東北隅で検出した。調査区外に延びるために規模は不明であるが、2m以上の円形を呈するものと思われる。深さは0.15mである。遺物は、10世紀代の土師器杯、黒色土器碗などを出土した。

SD1005 D3-5調査区西半で検出した、幅1.6m、深さ0.1mの南北溝である。遺物は少なく、9世紀代の土師器皿や10世紀前半の土師器杯の小片がある。南側の水田では畦畔が溝の延長とほぼ同位置で見られるため、当初は外郭を画する東西溝SD1010がこの位置で南に折れ曲がる可能性が強いものと考えた。しかし、南に延長上に位置する平成元年度、2年度のD5-9東調査区の東端では確認されていないために性格は不明である。

SD1038 平成元年度のD5-2調査区の東で検出した、幅1.1m、深さ0.2mの南北溝である。緑軸陶器碗(483)が出土した。

D5-2調査区の東側は約2mの標高差で、国町川に沿って幅約20mの水田が見られ、国庁の東の範囲を画する施設が想定できる地区である。この溝の延長を確認するため、南のD5-3地区で調査区を設けたが、東側では攪乱及びSK1046のために溝の続きは確認することは出来なかった。

SD1050 D5-11東調査区で検出した、幅1.5m、深さ0.4mの東西溝である。土師器皿(289)・碗(287・288)、黒色土器A類碗(290)と黒色土器B類碗、緑



第35図 D 5-9 西調査区遺構平面図 (1:100)

釉陶器碗の小片が出土した。

西 8 m に位置する D 5-11 中央南北トレンチでも幅 3.5 m、深さ 0.5 m の東西溝があるが、更に西の D 5-11 西調査区では検出してない。

**SD 1069・整地層 (第35図)** SD 1069 は D 5-8 東南部から D 5-9 西調査区にかけて検出した溝である。D 5-8 東南部では L 字状に検出し、北側の東西方向の部分では幅 0.4 m、南北方向の部分では西側が調査区の外に延びるために幅は 2.5 m 以上になる。南に向かう程深くなり、D 5-8 南端では 0.5 m である。南の D 5-9 西調査区では西壁近くで検出したが、さらに南には延びず東へと向かう。東西方向のものは、上面での幅は 2.2 m で、途中より幅は 0.8 m となり一段深くなる。深さは 0.4 m ほどである。D 5-9 中央の南北トレンチでは一段深くなる溝の続きは認められるが、D 5-9 東調査区では検出してない。このため、東脇殿の建物の周囲を巡る排水溝の可能性もある。遺物は、土師器 (368~377)、黒

色土器 (378) などがある。北側から出土した遺物には 11 世紀のものが一部見られるため、場所により埋没年代が異なるものと思われる。

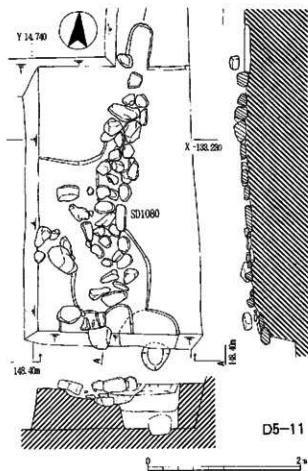
南の D 5-9 の西調査区では、遺構検出時に南端と北端では地山面を検出し、この間は土器を多量に含んでいるために土坑として下げた。前述した SD 1069 はこの土坑として下げた後で検出した。この土坑は、溝が完全に埋没しないうちに埋め立てた整地層と言う性格と思われる。遺物はコンテナで 5 箱出土し、主なものには土師器 (292~313)、黒色土器 (314~325) がある。また、D 5-9 西調査区の南では、柱穴が東西方向に並んでおり、櫛の様な施設の存在も窺わせているが、ここでは指摘だけにとどめておく。

**SD 1080 (第36図) D 5-11**  
中央にある平成元年度の南北ト

レンチで検出した。北側の幅は 0.6 m、深さ 0.2 m の南北溝である。南側は他の遺構と重複しているため、遺構面上面では明確に確認していない。拳大の礫が南北に連なるため、溝内に礫を詰めた暗渠排水と思われる。礫に混じり、10 世紀前半の黒色土器 A 類碗が出土した。また、溝の南側下で一辺 0.8 m、深さ 0.9 m の方形を呈する柱穴を確認しており、周辺に建物の建つ可能性も残る。

**SD 1081** D 5-10 西調査区にある、幅 4.4 m、深さ 0.4 m の東西溝で、埋土は木片を含む砂質土である。9 世紀後半 (233~237) から 10 世紀前半 (232) の遺物のほか、黒色土器 B 類碗 (246)、ロクロ成形土師器杯 (238) などを出土した。東の調査区では検出してない。SD 1082 より新しい。

**SD 1082** SD 1081 の東側から南に延びる溝で、東は調査区外に延びるため幅は 1.4 m 以上、深さは 0.4 m である。埋土は粘質土である。平面精査では SD 1081 の方が新しく別の遺構としたが、一連の溝の可能性も残る。10 世紀前半の土師器 (261~265)、黒色



第36図 SD1080遺構平面図 (1:50)

土器(266~268)を出土した。

SD1092(第34図) D6-5・6-7調査区で検出した、幅0.7m、深さ0.2mの南北溝である。両調査区は南北に約23m離れているが、方向から見て同一の溝と思われる。溝の方位は北で西に3度振れる。北の延長上のD6-3、南の延長上のD6-9では検出していないため、途中で折れ曲がるものと思われる。10世紀前半の土器、黒色土器を少量出土した。

## (5) 平安時代後期の遺構

### 政庁域の建物

SB1059・1062・1072がある。外郭の建物については不明である。

SB1059(第21図) D5-8調査区北端で検出した建物で、南側柱列を3間検出した。これまで正取が建てられている位置である。柱間は3m等間で、更に西の柱想定位置を一部拡張したが柱は検出していない。柱掘形は径0.6mの円形で、西端のものには柱根が残る。SB1060より新しく、遺物の中には瓦

器の細片が見られる。

SB1062(第21図) 南北2間、東西3間以上の東西棟である。SB1060より新しい。

SB1072(第25図) D5-8東南部からD5-9西調査区に位置する南北棟である。西側柱列5間分を確認しただけで、南北両妻柱は不明である。柱掘形は径0.5m、深さ0.3mの円形を呈する。SB1070より新しい。

### その他の遺構

SD1063(第21図) SB1062の南側柱と重複し、埋土は炭化物を多く含む。幅0.3m、深さ0.1mの浅い東西溝である。方位は、西で南に3度振れる。SB1062より新しく、SB1062の柱穴の東から2間目でいったん途切れ、さらに西に続く。溝底には、径0.1mの浅い穴をほぼ等間隔で多数検出した。瓦器小片、土器器小皿を出土し、11世紀後半には埋没する。重根のような正殿の前方を目隠しする施設と思われる、方位から見てSB1059に伴う可能性が高いものである。

SK1013(第27図) D5-5調査区南端にあり、幅は東西2.1m、南方をSK1014に壊されているため南北2.5m以上で深さ0.2mの隅丸方形を呈する。土器器(383)、須恵器、黒色土器を少量出土した。遺物から11世紀前半に比定できる。

SK1014(第27図) 南は調査区外に延び、径1.5~2.0m、深さ0.3mの楕円形を呈するものと思われる。SK1013より新しい。土器器皿(379・380)、須恵器片、黒色土器(381・382)が少量出土し、11世紀前半に比定できる。

SK1054(第26図) D5-6調査区中央にある、東西4.5m、南北3.5m、深さ0.2mの楕円形を呈する土坑である。人頭大の礫が多く含まれており、遺物はコンテナ3箱で、土器器(326~352)、黒色土器(354~358)の他、瓦器(353)が1点出土した。

SK1057(第26図) D5-6調査区西南で検出した深さ0.15m、規模は調査区西南外に延びるために不明である。遺物は、11世紀前半の土器器杯、小皿、ロクロ成形土器器の杯・小皿などが少量出土した。

SK1061(第21図) D5-8調査区の西北隅にある、深さ0.2m、調査区外に延びるため規模は不明である。遺物は、土器器小皿・杯、須恵器、黒色土器碗、ロクロ成形土器器等を出土した。



S K 1064 (第21図) D 5-8 調査区にある、東西3.1m、南北約3m、深さ0.1mの不定形を呈する土坑である。埋土は炭化物を多量に含んでおり、遺物には土師器杯(365)・皿(359-364・366)、黒色土器A類碗の底部(367)などを出土した。

S K 1101 (第34図) D 6-7 調査区中央で検出した、東西3.7m、南北は南に延びるため1.8m以上、深さ0.2mの円形を呈する土坑である。土師器の小皿を中心に、ロクロ成形土師器小皿、黒色土器などが出土し、10世紀末から11世紀前半に比定できる。

S D 1044 (第31図) D 5-3 調査区西半にある、幅0.9m、深さ0.2mの斜行溝である。土師器小皿、黒色土器碗、緑釉陶器皿などを少量出土した。11世紀前半に比定できる。

S D 1045 (第31図) D 5-3 調査区中央にある、幅0.9m、深さ0.15mの南北溝である。方位はほぼ真北で、北方のD 5-2 調査区では確認していない。遺物は10世紀末から11世紀前半の土師器小皿、黒色土器A・B類碗、ロクロ成形土師器小皿などを少量出土した。S D 1044、S K 1046より新しい。

S D 1103 (第29図) 平成2年度調査のD 6-9 調査区南で検出した、幅1.0m、深さ0.1mの東西溝である。S B 1105、S D 1104より新しく、遺物は少ないが平安時代後期のものと思われる。

## (6) 時期不明・その他の時期の遺構

### A) 時期不明の遺構

#### 政庁内の建物

S A 1058 (第26図) D 5-6 調査区の北西にある、南北2間の竪である。正殿のS B 1055より新しく、柱掘形は一辺0.6~0.8m、深さ0.4mの方形を呈する。残りの悪い径0.2mほどの柱根が残る。柱間は3.0mで正殿の柱間と似ており、西に延びる建物の可能性もあるが、ここでは掘立柱竪としておく。出土した遺物はないため、時期はS B 1055の平安時代前期以降としか判断できない。

#### 外郭の建物

S B 1097 (第24図) D 6-6 調査区の東で検出し、柱掘形は径0.5m、深さ約0.4mの円形を呈する。S B 1090・1095より古く、南端で検出した柱穴には残りの悪い径0.15mの柱が残る。

S B 1096 (第24図) D 6-6 調査区の東で検出し、柱掘形は一辺0.6m、深さ0.2m以上の隅丸方形を呈する。

S B 1037 平成元年度D 5-2 調査区中央の南北両壁際で検出した。柱掘形は一辺0.7m、深さ0.2mの方形を呈する。遺物はほとんど出土していない。

S B 1093 (第34図) 平成元年度のD 6-5 調査区の西で、東西2間分検出した。南北棟になるものと思われる。柱掘形は一辺0.7~0.8mの方形で、深さは西端のものが0.6m、東側のものは0.3mと浅い。このため南北棟と考えているが、隅柱は深いことを考えると東西棟になる可能性もある。柱掘形はS B 1094と一部重複し、S B 1093が新しい。

S B 1094 (第34図) S B 1093より古いもので、東西2間分検出した。柱掘形は一辺0.7~0.8mの方形で、深さは0.4mである。横方向は他の多くのものは異なり、西で北に振れるものである。

S D 1079 平成元年度のD 5-9 中央南北トレンチで確認した深さ0.1mの溝で、北の幅は1.0m、南に行くにしたがい細くなり、南端では0.2mとなる。出土した遺物はほとんどなく、時期は不明である。位置的には政庁の東を向する南北溝に当たるものの、南のD 5-10中央トレンチでは確認していない。

### B) その他の時期の遺構

S D 1048・1049 (第30図) S D 1048は、D 5-10東調査区で検出した、幅1.8m、深さ0.3mの東西溝で、弧を描き西のトレンチに続く。遺物は、土師器、須恵器、黒色土器片類の小片、青磁(498)等を少量出土した。南にあるS D 1049は、幅0.6m、深さ0.3mで、東ではS D 1048と重複する。S D 1048より新しく瓦器の小片を出土した。鎌倉時代に属する。

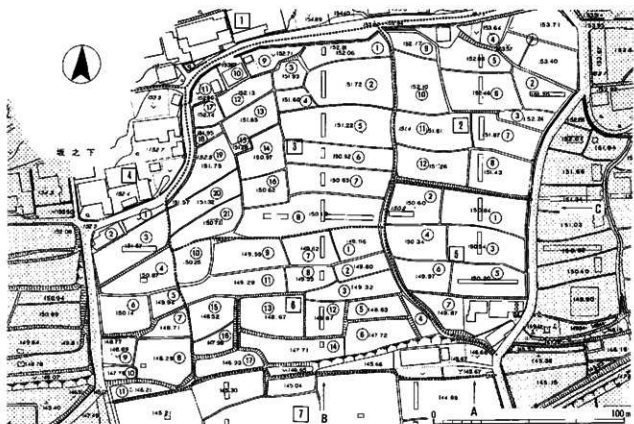
S D 1039 (第31図) D 5-3 調査区の西端にある南北溝で、調査区の外に延びる。規模は幅1.3m以上、深さ0.4mで、瓦器の破片を少量出土しており、鎌倉時代以降の溝である。

S D 1041・1042 (第31図) D 5-3 調査区の西端にある南北溝である。S D 1041は幅0.4m、深さ0.2m、S D 1042は幅0.8m、深さ0.1mの規模である。土師器、須恵器の細片が出土しただけで、時期を断定することは出来ない。現代の畦畔に沿うため、新しいものかも知れない。

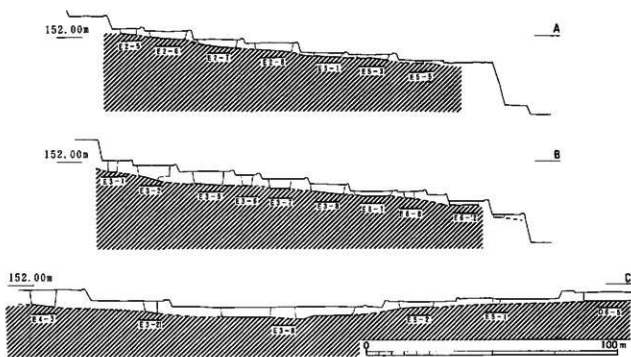
建物番号	規模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m)		時期	備考
					桁行	梁行		
SA1025		E20° N					奈良以前	8間以上
SB1001	— × 3	N1° E	—	6.1	—	2.3	8末～9C前	北廂柱間1.5m
1002	— × 2	N0° E		4.2	2.1	2.1	8末～9C前	
1015	5 × 3	N0° E	8.9	4.5	2.25	1.5	8末～9C前	SK1012より古い
1020	5 × 3	N0° E	11.5	4.8	2.3	1.6	8末～9C前	SB1021より古い
1056	(5) × (3)	N0° E	—	—	(3.0)	(3.0)	8末～9C前	SB1055より古い
1065	(3) × 2	E0° S	—	4.6	3.0	2.3	8末～9C前	SB1066より古い
1070	(4) × (2)	N0° E	—	—	2.4	—	8末～9C前	SB1071.1073より古い
1075	(2) × (2)	N0° E	—	—	—	—	8末～9C前	
1084	2 × (2)	N0° E	—	—	2.4	—	8末～9C前	
1085	4 × 2	N0° E	9.8	5.4	2.45	2.7	8末～9C前	SB1090より古い
SA1052		N1° E		東西2.3m、南北2.4mか			8末～9C前	東西側、南北側以上
1091		N1° E			2.3		8末～9C前	南北3間以上、
1021	(3) × (2)	N1° E	—	—	2.3	2.3	9C前半	南廂、SK1018より古い
1105	(5) × 4	N1° E	—	7.6	2.2	1.9	9C前半	北廂柱間2.1m
SB1016	3 × (2)	N2° E	8.1	—	2.7	2.4	9C後半	
1047	4 × (2)	N1° E	10.0	—	2.5	2.3	9C後半	
1055	7 × 3	N1° E	20.4	8.7	3.0	3.0	9C後半	三面廂柱間2.7m
1066	(4) × 2	E1° S	—	4.8	3.0	2.4	9C後半	SB1065より新しい
1073	(5) × 2	N0° E	—	—	2.3	—	9C後半	SB1071より古い
1095	5 × (2)	N1° E	12.0	—	2.4	2.7	9C後半	SB1090より古い
SB1102	(2) × 2	N1° E	—	4.6	3.0	—	9C	
SA1040		N0° E			—		9C	
SB1022	3 × 2	N3° W	9.6	4.2	2.4	2.1	10C後半	
1060	5 × (2)	N1° E	15.0	—	3.0	3.0	10C	礎石建物
1071	(5) × (2)	N1° E	11.8	—	2.37	—	10C	礎石建物
1090	5 × (2)	N1° E	11.8	—	2.37	2.7	10C	礎石建物
1100	4 × —	E2° S	9.2	—	2.3	—	10C	塀の可能性あり
SB1059	3 × —	N3° E	15.0	—	3.0	—	11C	
1072	5 × (2)	N1° W	12.0	—	2.4	—	11C	
1062	(4) × 2	E2° S	—	4.8	3.0	2.4	11C	SD1063より古い
SB1037	(2) × 2	N2° E	—	3.8	2.1	1.9	不明	
1093	— × 2	N1° E	—	4.2	—	2.1	不明	SB1094より新しい
1094	— × 2	N2° W	—	5.4	—	2.7	不明	
1096	(2) × —	N3° E	—	—	2.25	—	不明	
1097	(3) × (2)	N1° W	—	—	2.4	2.4	不明	
SA1058		N1° E			3.0		不明	狭、SB1065より新しい
1089		N3° E			2.3		不明	3間以上

第8表 国町地区建物規模表

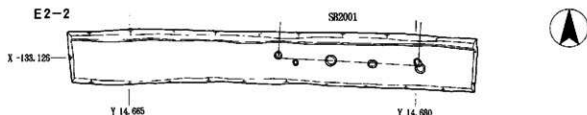
## 4. 前田地区



第37图 前田地区調査区位置图 (1:2,000)



第38图 前田地区東西・南北断面略图 (1:1,500、高さは1:150)



前田地区の地区表示は、第37図のとおりである。当地区の北・西北側には丘陵がせまり、南は約4～5mの比高を持つ段丘上面の南北約180mほどの平坦地である。平成2年度はE5-2・E3-8・E3-21・E4-3地区に幅3mの東西トレンチ（面積200㎡）を、平成3年度には中央と東部に幅3mの主に南北トレンチ（面積660㎡）を設定し、調査を実施した。当地区の調査は、調査期間との関係から主に遺構の広がり確認に重点を置き、国庁の範囲（区画溝）を確認することとした。なお、段丘下の水田にも古道の確認を目的とし、幅2mの南北トレンチを設定したが、遺構・遺物は確認できなかった。

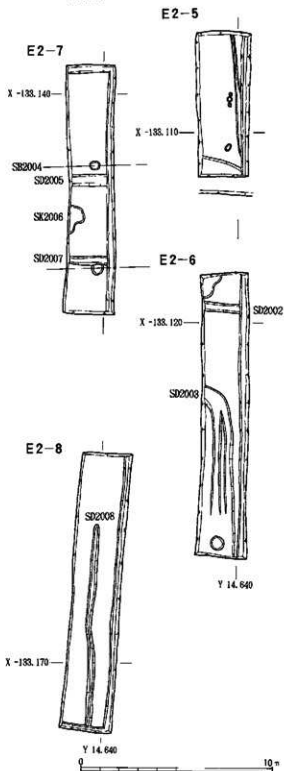
現地形の標高は、北端で152m、南の段丘周縁部で150m前後である。東西方向（第38図）で見れば、東の国町地区に隣接する地域と西端がやや高く、中央部が低い地形である。遺構検出面までの深さは、北側が約0.5～0.6mと深く、南側は0.4m程と浅い。

### (1) 東北部 (E2) の概要 (第39図)

E2-2は東西21mの調査区で、遺構検出面までの深さは約0.5mである。トレンチ東部で樹立柱建物SB2001を検出した。SB2001の柱形は、径0.3～0.5m、深さ0.1～0.2mの円形で、3間分検出した。柱間は西のみが2.7mで、ほかは2.3mである。棟方向はE-3°-Sで、東西棟になるものと思われる。柱掘形から出土した遺物の内には黒色土器の細片が見られることから、平安時代中期以降のものである。

E2-5は南北8mの調査区で、遺構面までの深さは北側が0.5m、南側が0.65mである。東壁近くで幅0.2m、深さ0.1mの南北溝、南端で深さ0.15mの調査区外に延びる土坑や径0.3m程度の柱穴を二つ確認している。これらから出土する遺物は土師器のみであり、おおむね11世紀代に比定できる。

E2-6は南北18mの調査区で、遺構面までの深さは北端で0.5m、南端で0.7mである。北端でSD



第39図 E2調査区遺構平面図 (1:200)

2002、南半部ではSD2003や柱穴を検出した。SD2002は幅0.4m、深さ0.1mの規模である。方向はE-3°-Nの東西溝で、11世紀の遺物を少量出土した。SD2003中央から南西のものは当初は上坑として全体を下げ、その下で中央で西に向かう幅0.4~0.5m、深さ0.2mの溝を2本確認した。出土した遺物から11世紀代の遺構である。南端の柱穴は溝の底で確認したもので、径0.6m、深さ0.15mの円形を呈する。建物の柱穴と思われるが、南の調査区まで7m以上あるため、規模は不明である。

E2-7は南北13mの調査区で、遺構面までの深さは北端で0.3m、南端で0.9mである。調査区中央で獨立柱建物SB2004、東西溝SD2005・2007、土坑SK2006を検出した。SB2004の柱廻りは径0.5m、深さ0.1mの円形で、建物方向はN-2°-Wである。柱間距離は5.4m程あるため、梁間2間の東西棟と思われる。後述するSD2007より古い、遺物がないために時期は断定できない。北側のSD2005は幅0.6m、深さ0.1m、南側のSD2007は幅0.5m、深さ0.1mである。SD2007からは、11世紀代の土師器が少量出土した。溝の方向はいずれもほぼ東西方向であり、同時期のものと思われる。土坑SK2006は、南北1.5m、東西0.7m以上、深さ0.07mの不定形なもので、10世紀代の遺物が少量出土した。

E2-8は南北15mの調査区で、遺構面までの深さは、北端では0.5m、南端で0.7mである。幅0.3m、深さ0.05mの南北溝SD2008を検出した。方向はほぼN-2°-Eで、遺物は11世紀代のものを少量出土

した。

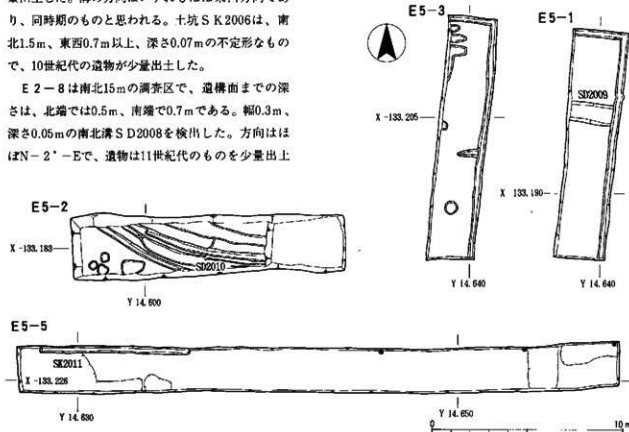
## (2) 東南部(E5)の概要(第40図)

E5-1は南北12mの調査区で、遺構面までの深さは0.5mである。遺構は、幅1.1m、深さ0.1mの東西溝SD2009がある。方向はE-6°-Sで、遺物はほとんど出土していないために時期は不明である。

E5-3は南北13mの調査区で、遺構面までの深さは北端で0.6m、南端で0.8mである。土坑や小溝などがあるが、遺物もなく、時期は不明である。

E5-5は東西32mの調査区で、遺構面までの深さは0.5m程で、調査区西端で土坑SK2011を検出したが、遺構検出のみにとどめた。遺構検出時に緑釉陶器片や10世紀代の遺物を出した。

E5-2は東西15mの調査区で、遺構面までの深さは0.5m程である。弧状に走る東西溝を2条検出した。南側のSD2010は上面は幅1.5mで、下方では3本に分かれていた。出土した遺物は鎌倉時代のものと、奈良時代まで遡るもの(39~41)があり、すべての溝が鎌倉時代とするには問題が残る。



第40図 E5調査区遺構平面図(1:200)

### (3) 中央北(E3)の概要(第41図)

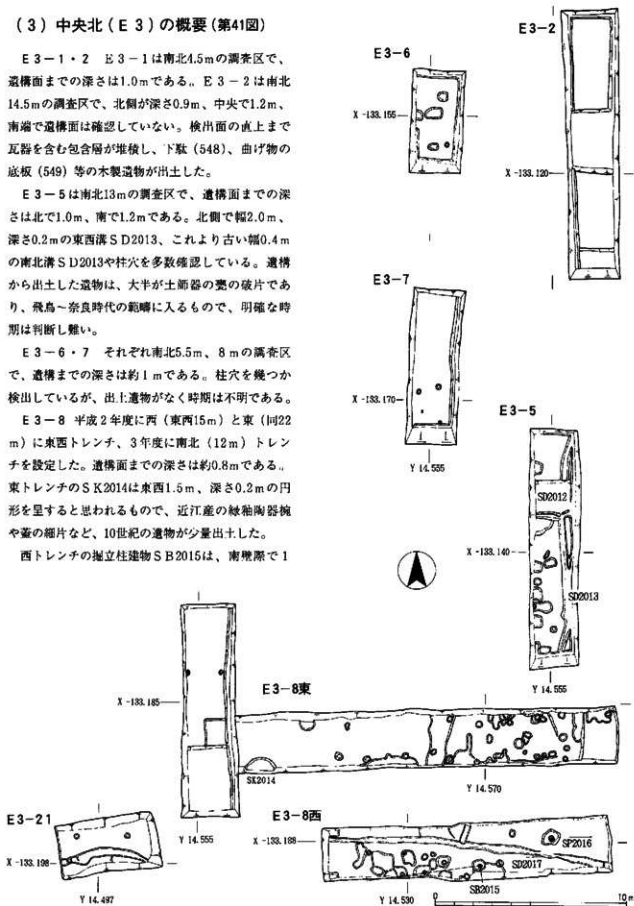
E3-1・2 E3-1は南北4.5mの調査区で、遺構面までの深さは1.0mである。E3-2は南北14.5mの調査区で、北側が深さ0.9m、中央で1.2m、南端で遺構面は確認していない。検出面の直上まで瓦器を含む包含層が堆積し、下駄(548)、曲げ物の底板(549)等の木製遺物が出土した。

E3-5は南北13mの調査区で、遺構面までの深さは北で1.0m、南で1.2mである。北側で幅2.0m、深さ0.2mの東西溝SD2013、これより古い幅0.4mの南北溝SD2012や柱穴を多数確認している。遺構から出土した遺物は、大半が土器の甕の破片であり、飛鳥~奈良時代の範囲に入るもので、明確な時期は判断し難い。

E3-6・7 それぞれ南北5.5m、8mの調査区で、遺構までの深さは約1mである。柱穴を幾つか検出しているが、出土遺物がなく時期は不明である。

E3-8 平成2年度に西(東西15m)と東(同22m)に東西トレンチ、3年度に南北(12m)トレンチを設定した。遺構面までの深さは約0.8mである。東トレンチのSK2014は東西1.5m、深さ0.2mの円形を呈すると思われるもので、近江産の緑釉陶器碗や甕の細片など、10世紀の遺物が少量出土した。

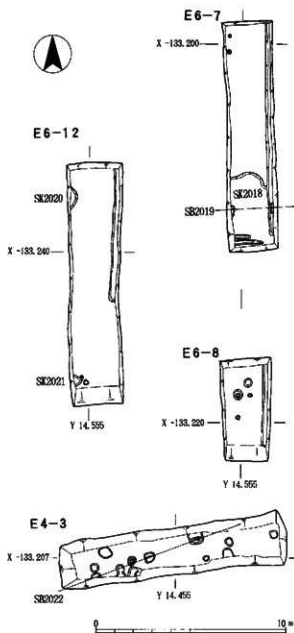
西トレンチの掘立柱建物SB2015は、南機際で1



第41図 E3調査区遺構平面図(1:200)

間分検出した。柱掘形は円形を呈し、径・深さともに約0.6mで、柱間は3.0m、棟方向はE-8°-Wである。西側柱穴内には径0.2m、東側は曳船用の穴が穿たれた0.25mの柱根(559)が残る。黒色土器片が出土し、10世紀に比定できる。ほかに東端でも柱根の残る柱穴S P2016を検出している。東西溝S D2017は、おおよそ10~11世紀代のものである。

E 3-21は東西5mの調査区で、E 3-8から西に30mほどの位置にある。遺構面までの深さは1mである。東西溝と柱穴を確認しているが、遺物が出土していないために時期は不明である。



第42図 E 6・E 4調査区遺構平面図(1:200)

#### (4) 中央南部(E 6)の概要(第42図)

E 6-7は南北12mの調査区で、深さは約0.7mである。南側で土坑S K2018と、土坑下の東西両壁で掘立柱建物S B2019を検出した。柱間は約2.3m、棟方向はW-3°-Nである。遺物が出土していないために時期は不明である。

E 6-8は南北5.5mの調査区で、深さ0.6m。径0.4m程の柱穴を検出しており、その内の一基からは10世紀後半~11世紀前半の土師器を少量出土した。

E 6-12は南北11mの調査区で、深さ0.5mである。北のS K2020は奈良~平安時代の土師器薬片、南のS K2021からは11世紀後半の土師器や瓦器の細片が出土した。更に南のE 6-14にもトレンチを入れたが、0.4m程で地山となり、遺構は検出できなかった。

#### (5) 西部(E 4)の概要(第42図)

E 4-3は東西12mの調査区で、深さ1.1mである。掘立柱建物S B2022や柱穴を多数検出した。

掘立柱建物S B2022は東西2間分検出しただけで、規模は不明である。柱掘形は径0.5mの方形で深さ0.4m、棟方向はW-21°-Nである。7世紀後半の須恵器杯蓋(36)、土師器甕(37・38)を出土した。

#### (6) 小結

前田地区東部は、現地形でみると東の国町地区に連なる地域である。ここでは遺構密度は薄いものの掘立柱建物や溝、土坑等を検出しており、平安時代中期以降の遺構が広がることが明かとなった。建物や溝の性格については不明点が多いが、隣接する国町地区の国庁城の範囲に入る可能性が高いものと思われる。

中央部は地形的に谷部に当たるもので、北側は11~12世紀代の包含層が厚く堆積し、中央から南で10~11世紀の遺構を検出している。緑釉陶器もE 3-8で多量に出土しており、国庁の周縁部にあたる地域であろう。中央部でも西は遺構が少ないが、調査区の数が少ないために断定は出来ない。

西部で検出した遺構は7世紀後半のもので、国町地区で確認されている平安時代の遺構は確認されていない。平安時代の国庁城の範囲には入らないものの、注目される地域である。

## 5. 遺物

### (1) 縄文～弥生時代の遺物

縄文時代の遺物は、4点と非常に数が少ない。すべて追越地区からの出土だが、当該期の遺情も確認されており、他からの混入品である。縄文土器で最も古いものは、SD8から出土した後期の鉢(3)である。晩期の鉢(1)は貼付凸帯を持つ。同様なものがSD3から1点出土している。2は縄文が残り、縦方向に張り付け凸帯を持つ。

弥生時代の遺物には、方形周溝墓と思われるSD13から中期の土付細頸壺(4)と甕の底部(5)が出土した。その他、包含層から後期の甕(6)、壺の体部(7)などがあるが、数は少ない。

### (2) 古墳時代の遺物

SH9出土土器(第44図) 丸底で口縁部を外反させる小形の鉢(8)や口縁部が内湾する鉢(9)、甕(10)がある。

SD1043出土土器(第44図) 土師器には、体部が丸く口縁部が外反する鉢(11・12)、平坦な杯下半

から直線的に開く口縁を有する高杯(13)や体部が丸くなる小形の甕(15～17)がある。

須恵器杯身(14)は口縁部の立ち上がりが高く長く、ロクケズリは浅いもの、やや扁平な底部を持つことから、5世紀後半の陶器窯TK23号型式に比定できる。

SD8出土土器(第44図) 土師器には、平底で器壁が厚い鉢(18)、口縁部を欠くがやや丸みをもつ口縁部になると思われる高杯(19)がある。甕にはいわゆる複合口縁をもつもの(20)、丸底で口縁部をやや外半させて端部を丸く納めるもの(21・22)、口縁部外面に面を持つ大形のもの(23)がある。23は下層出土である。

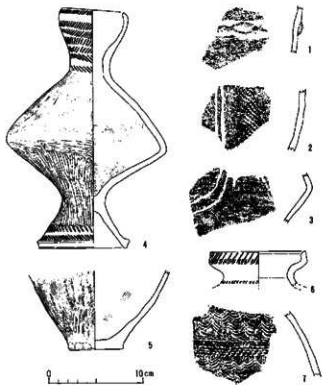
須恵器のうち、杯蓋(24)や杯身(25)はロクケズリが深くTK23号型式に比定されるが、SD1043出土の須恵器と比較するとやや後出の様相を呈する。杯蓋(26)はロクケズリの範囲が狭く、TK47号型式に比定される。また、小形の甕(28)は体部外面が無文で断面はセピア色を呈し、TK208号型式まで遡る可能性もある。甕(30)は下層出土である。

土師器は鉢(18)・高杯(19)がSD1043のものと比較しても新しい様相を呈する。下層から出土した土師器甕(23)は、口縁端部が肥厚しないが布留式の甕の系譜を引くと思われ、上層から出土した甕(21・22)とは大小の違いというより時期差があると思われる。

SD16出土遺物(45図) 高杯の脚(32)は短脚・段透かして、土師質のものである。

須恵器杯身(34)・杯蓋(33)はTK209号型式のもので、7世紀初頭に比定される。短頸壺(35)は体部に対して口縁部が長く直立し、体部下半はヘラケズリで調整されており、6世紀代まで遡る可能性が高い。

SK1002出土遺物(第45図) 土師器杯(42・43)は、甕の底部下半を作った後に上方縁部をヨコナアして口縁としたもので、内面には刷毛目が一部に残る。甕(45)は外上方に向かって延びる口縁部を持つもので、類似する甕に包含層出土の48があり、周辺から6世紀代の須恵器が出土していることから、SK1002も6世紀代まで遡る可能性が高い。



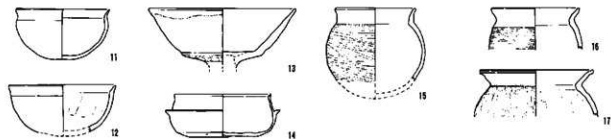
第43図 遺物実測図(1) 縄文・弥生時代



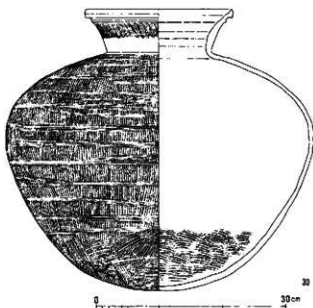
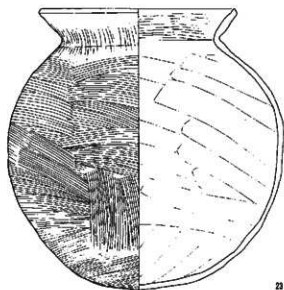
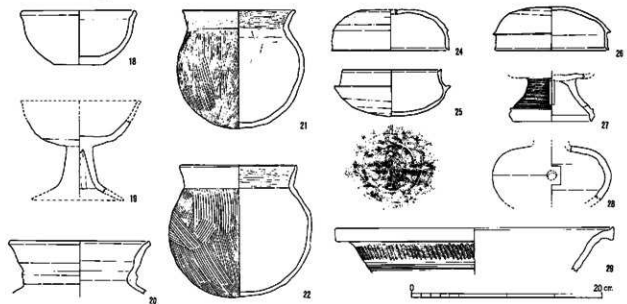
SH 9 (8~10)



SD1043 (11~17)



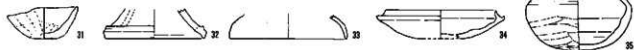
SD 8 (18~30)



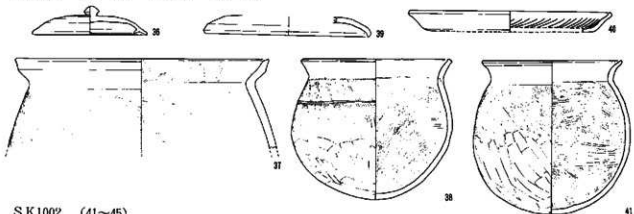
第44图 遺物実測図(2) 古墳時代(30は1:6)

### (3) 飛鳥・奈良時代の遺物

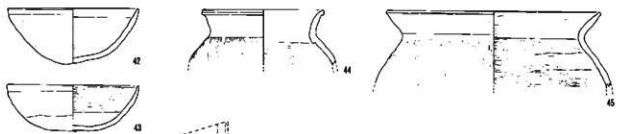
S B 2022出土遺物(第45図) 須恵器杯蓋(36)は、内面に返りの残る飛鳥第3型式のものである。土師器甕(38)は体部下半へラケズリを行う、いわゆる近江型の甕で、体部上半に一条沈線が通る。口縁 S D 16 (31~35)



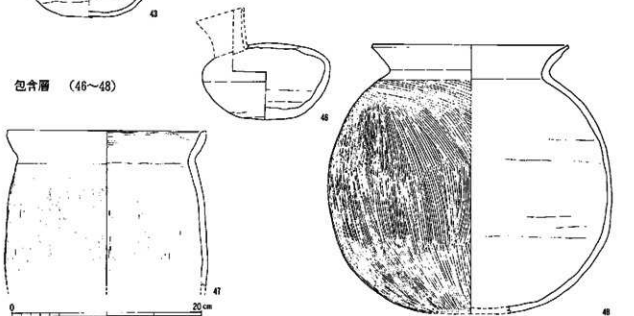
S B 2022 (36~38)・S D 2010 (39~41)



S K 1002 (41~45)



包含層 (46~48)



第45図 遺物実測図(3) 飛鳥・奈良時代

部が受口状になる大形の甕(37)も38と同様に近江型の甕であり、7世紀後半に比定できる。

S D 2010出土遺物(第45図) 8世紀前半の須恵器杯蓋(39)、土師器皿(40)があるほか、土師器甕(41)は体部下半をラケズリする近江型の甕で、体部は球形に近い。

#### (4) 平安時代初期の遺物

平安時代の遺物は、多種多量に出土している。まず遺構毎に土師器・須恵器などの土器類について記述し、硯、緑釉陶器、墨書土器などについては、その他の遺物としてまとめて説明する。なお、小形器種の名称は、原則的に奈良国立文化財研究所の川例に準ずる<sup>2</sup>。

##### S D 1010出土土器 (第46図)

遺物量が少なく、総破片点数は約200片ほどである。土師器杯AⅡ(49・50)・皿AⅡ(51・52)・皿B(53)、須恵器横瓶(54)・鉢(55)・壺(56・57)などがある。

土師器杯AⅡはe手法で、口縁部をつまみ上げる。端部内面の沈線がS K 1011出土の杯と比較してもより強く残り、古い様相を示す。皿はe手法で、口縁部は丸く収めるもの(51)、肥厚するもの(52)がある。52の底部内面には螺旋状暗文、口縁部外面には粗くヘラミガキを施す。53は高台を張り付けたナデの痕跡が一部に認められるため、皿Bとした。口縁部は短く外反し、端部は丸く収め、底部外面はナデのみのe手法である。

須恵器鉢(55)は平底で、口縁部が内湾しながら立ち上がり、端部は内傾する面を持つ、いわゆる鉄鉢である。外面は6回に分けヘラミガキを施す。54は外反する口縁部で横瓶の可能性が高い。壺は双耳の例が2点ある。いずれも平底で卵形の体部に外上方に広がる口縁部を持つ。56は口縁部をつまみ上げて外傾する面を持つ。粘土板を貼付けて面取りを行った後に穿孔する双耳を持つ。57は口縁部が外反し、口縁部は折り曲げて外側に面を持つ。粘土紐を張り付けた双耳を持つ。

土師器壺B(58)は、口縁部が外湾気味に開き、端部は丸く収める。外面には横方向のヘラミガキを施す。平成元年度調査で出土したもので、出土位置からS D 1010ないしはS K 1009の可能性が高い。この器種の出土はあまりなく、遺構は確定できないが、平安時代初期～前期に属するものである。

##### S K 1011出土土器 (第46図)

土師器には、杯AⅠ(64)・杯AⅡ(59～62)・皿AⅠ(67・68)・皿AⅡ(63・65・66)・碗B(69)・壺(70)があり、そのほか黒色土器杯A(71)、須恵器皿(72)・

壺(73)が出土した。破片総数は、土師器片222(杯等191、高杯等3、壺28)、黒色土器杯片3、須恵器片25(杯等10、壺8、壺7)の250片と少なく、法量の平均を出すには至っていない。

土師器杯はすべてe手法で、やや平底気味の底部で、口縁部は内湾しながら延びる。杯AⅠ(64)は、口縁部を丸く収める。杯AⅡは、内傾する面を持つもの(59)と、つまみ上げるもの(60・61)、丸く収めるもの(62)など、口縁部部の形態は様々である。AⅡの底部外面には、乾燥前に板の上に置いたためか、木目の残るものも見られる。皿AⅠには、口縁部が外反しながら短く延びて端部は丸く収めるもの(67)、内湾しながら延びて内面で肥厚するもの(68)がある。底部外面にはヘラケズリを行い、67の底部内面には螺旋状暗文が2段以上残る。68は器高が深く、口縁部部が肥厚することなど、奈良時代の様相を残す。皿AⅡの形態は皿AⅠと同じ特徴を持つが、ヘラミガキは施していない。底部外面はe手法である。63は皿AⅡとしてあるが、口縁部は底部から直線的に開き、底部外面はロクロケズリの後ナデを行ったロクロ成形土師器の可能性もある。壺(70)は、口縁部が外側に延びて端部は丸く収める。

黒色土器杯(71)はA類の底部の小片で、外面は横方向のヘラケズリの後ヘラミガキを施す。器壁は厚く粘土も良く、S K 1086出土の黒色土器杯(100)と胎土が類似する。

須恵器皿(72)は、平底で口縁部が短く立ち上がるもので、他に粘土紐を貼付けて双耳とする壺(73)や杯Bの小片がある。

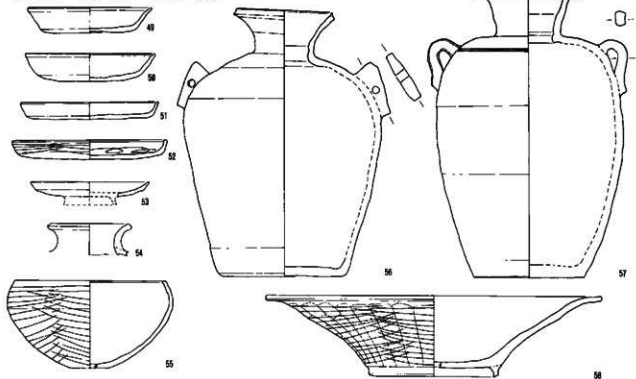
#### (5) 平安時代前期の遺物

##### S D 1028出土土器 (第46図)

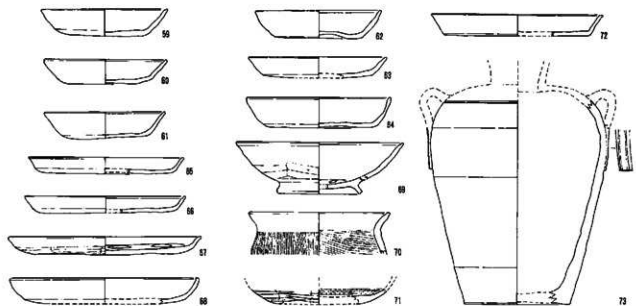
土師器には、杯AⅡ(74)・皿B・碗B・ロクロ成形土師器杯のほか、高杯の小片がある。皿B(75)は内湾する口縁部で、端部は丸く収める。形態的には、灰釉陶器の皿に近い。碗B(76)は、口縁部外面下半を斜め方向にヘラケズリを行い、口縁部内面に螺旋状暗文を1段施す。高台を貼付けたヨコナデの痕跡が残る。ロクロ成形土師器杯(77)は平底の底部で、内湾しながら外上方に延びる口縁部を持つ。

須恵器には、杯B(78)・皿(79)のほか、外上方に

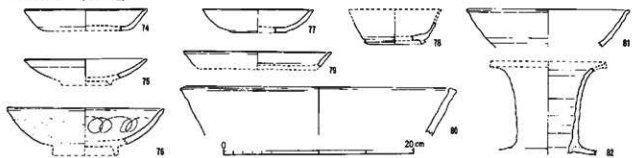
SD1010 (49~57)・包含層 (58)



SK1011 (59~73)



SD1028 (74~82)



第46図 遺物実測図(4) 平安時代初期~前期

直線的に延びる口縁部を持つ甕(80)などがある。

灰釉陶器は、碗・広口壺がある。碗(81)は内面に厚い釉を掛け、口縁部外面下半はロクロケズリを行うもので、黒塗14号窯期に比定できる。

この他図示は出来ないが、口縁部外面ヘラケズリの黒色土器A類の細片が2片ある。

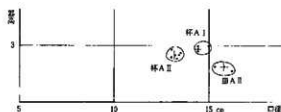
#### S K 1086出土土器 (第47図)

平成元年度と3年度の調査で検出したが、第9表の破片計数表は平成3年度のみのものである。

土師器には、杯AⅠ・AⅡ・ⅢAⅡ・碗Bがある。杯AⅠ(89~92)・AⅡ(83~88)ともにe手法で、口縁部部はつまみ上げるものが多い。底部外面に木目の痕跡が残るものもある。ⅢAⅡ(95~97)は、口縁部が短く外反し、端部は丸く収める。碗B(93・94)

器種	器 形	破片数	比率(%)
土 師 器	杯・Ⅲ・碗	950	97.0
	高杯・壺・鉢	11	1.1
	甕・罎	17	1.7
	その他	1	0.1
	不明		
小計		979	94.7
黒色土器	杯・Ⅲ・碗	18	94.7
	甕	1	5.3
	その他		
	不明		
小計	19	100	1.8
須 恵 器	杯・Ⅲ・碗	16	83.3
	壺・瓶	4	13.3
	鉢		
	壺・大形鉢	8	26.7
	その他	2	6.7
不明			
小計	30	100	2.9
緑釉陶器	杯・Ⅲ・碗	4	
	壺・瓶	2	
	その他		
	不明		
小計	6		0.6
灰釉陶器	杯・Ⅲ・碗		
	壺・瓶		
	その他		
	不明		
小計			
輸入陶磁器	杯・Ⅲ・碗		
	壺・瓶		
	その他		
	不明		
小計			
その他			
	小計		
総数		1034	

第9表 SK1086出土破片土器計数表



第10表 SK1086出土土器器量分布

は内面の暗文はなく、口縁部外面上半はヨコナデを施す。外面下半はSK1011の碗Bと異なり、e手法である。甕(98)は、口縁部が直線的に外上方に開く。

黒色土器はいずれもA類で、杯A(100)はやや丸底気味で、口縁部は内湾する。外面は口縁部直下までヘラケズリを行い、口縁部外面上半と内面にヘラミガキを施す。Ⅲ(99)は、口縁部が外反し、端部は丸く収め、口縁部内外面には、ヘラミガキを施す。これら杯・Ⅲの歯輪は厚いが胎土は良く、丁寧に調整が行われている。内面の暗文は、確認できなかった。風字硯(461)は平底の底部で、口縁部は内湾しながら外上方に延び、縁部上面はヘラケズリにより面を作る。平面の形態から、風字硯の海部先端部にあたるものと思われる。底部外面はヘラケズリの後、底部は同一方向、縁部外面は現状では2回に分け横方向にヘラミガキを施す。

灰釉陶器碗(102)は口縁部が内湾しながら立ち上がり、端部は外反して丸く収める。口縁部外面下半はロクロケズリで、角高弁を持つ。軸は内面のみで、黒塗14号窯期のものである。壺(101)は、口縁部が上方に向かって外反し、端部はつまみ上げて外側に面を持つ。体部下半はロクロケズリで、無花果型の体部になると思われる。

この他、須恵器内面視の脚の小片(441)や、海から脚にかけての破片(446)が出土している。

#### S K 1008出土土器 (第47図)

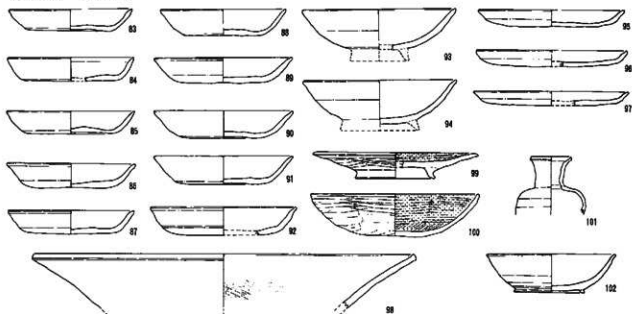
出土量は少なく、土師器杯AⅡ(103・104)、ⅢAⅡ(105・106)の他、須恵器杯、Ⅲ、甕の小片があるだけである。土師器Ⅲの法量は、後述する平安時代前期後半のSK1035に近いものである。

#### S K 1009出土土器 (第47図)

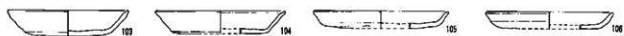
遺物には、土師器・ロクロ成形土師器、須恵器、緑釉陶器などがある。土師器杯AⅡなどに時期幅が見られ、前期前半から後半にかけての年代が与えられる。この土坑の下面にある前期前半のSK1011の遺物が、一部混入していると思われる。

土師器碗AⅡ(107)の口縁部は、内湾しながら外上方に延び、端部はつまみ上げて内傾する面を持つ。口縁部外面には、粗いヘラミガキを施す。杯は口縁部部をつまみ上げるもので、AⅠ(116)・AⅡ(108~115)がある。AⅡの中には器壁が薄く、口縁部が

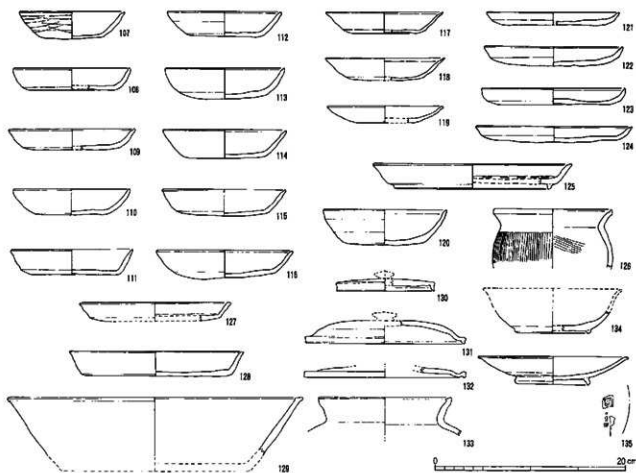
SK1086 (83~102)



SK1008 (103~106)



SK1009 (107~135)



第47図 遺物実測図(5) 平安時代前期

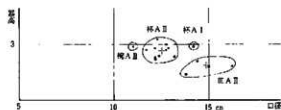
外反する117・118があり、形態的には後出のものである。皿はすべてe手法で、ヘラミガキはなくA I (124)・A II (121~123)に分かれる。皿B (125)は口縁部が外反し、端部は丸く収める。底部内面に螺旋状暗文が1段残る。壺(126)は口縁部が外反し、端部をつまみ上げて内側に肥厚する。

須恵器杯蓋(130~132)は、天井部が丸いもの(130)、平らなもの(131)などがあり、130は口径からみて壺の蓋になると思われる。131の内面は摩滅しており転用瓶として使用されている。その他、皿(127・128)・鉢(129)・短頸壺(133)がある。

緑釉陶器は京都産のみで、図示できたのは碗(469)だけである。口縁部内外面に横方向にヘラミガキを施す、軟質のものである。

器種	器形	破片数	比率(%)
土器	杯・皿・碗	933	75.8
	高杯・鉢・鉢	31	2.5
	壺・甕	269	21.1
	その他	7	0.6
	不明		
小計		1230	100
黒色土器	杯・皿・碗	31	
	壺		
	その他		
	不明		
	小計	31	2.0
須恵器	杯・皿・碗	158	60.7
	壺・甕	18	6.9
	鉢	1	0.4
	壺・人形鉢	79	30.4
	その他	3	1.2
不明	1	0.4	
小計	260	100	
緑釉陶器	杯・皿・碗		
	壺・甕		
	その他		
	不明		
	小計		
灰釉陶器	杯・皿・碗	6	
	壺・甕		
	その他		
	不明		
	小計	6	0.4
輸入陶磁器	杯・皿・碗		
	壺・甕		
	その他		
	不明		
	小計		
その他	製磁土器	1	
	小計	1	0.1
総数		1528	

第11表 SK1009出土破片土器計数表



第12表 SK1009出土土器器量分布

#### SD1029出土土器 (第48図)

遺物は少量で、土師器杯A II (136)・壺・高杯の小片、須恵器杯蓋(137)、黒色土器A類碗の小片があるだけである。

#### SD1032出土土器 (第48図)

土師器杯や須恵器杯の小片、京都産緑釉陶器の小片の他、ロクロ成形土師器碗(138)が出土した。

#### SK1030出土土器 (第48図)

土師器には、皿A II (139)・碗A (140)がある。碗Aは丸底の底部で、口縁部は外上方に開く。底部には粘土紐の痕跡が残る。

黒色土器杯A (141)は、底部と口縁部が接合はしないが、同一個体と思われるものである。やや丸底気味の底部で、口縁部は外上方に開く。底部外面と口縁外面直下までヘラケズリを施す。内面にはヘラミガキのみで、暗文は施さない。

緑釉陶器唾壺(486)は口縁部を欠くが、体部の最大径が下半にある無花果型のものである。口縁部と体部の接合は、体部上端を外に折り曲げ頸部の稜を作り、その内側に口縁部を接合する。底部外面はロクロケズリで、高台を貼り付ける。薄緑色の釉で、猿投窯のものと思われる。

#### SK1035出土土器 (第48図)

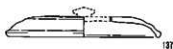
遺物は多量に出土しており、良好な9世紀後半の資料である。

土師器には、杯A I・A II・碗B・皿A II・壺の他にロクロ成形土師器がある。杯A I (156)・A II (142~155)は、口縁部をつまみ上げるものが多い。皿A II (159~161)は、口縁部が内湾し、端部をつまみ上げる。碗B (157・158)は、口縁部がつまみ上げられて、外面はe手法である。その他、高杯の小片も出土している。壺は大きさから小形(163・164)と中形のもの(165・166)に分かれる。小形のものには、球形の体部に口縁部は短く外反し、端部はつまみ上げて外面に面を持つ。中形の口縁部の形態は小形のものに類似するが、体部の形は不明である。

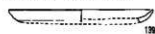
ロクロ成形土師器皿(162)は、皿部は短く外反する口縁部で、端部は丸く収める。高台は、外下方に長く直線的に延びる。

黒色土器は器種が豊富で、杯A・碗B・皿B・鉢の他に風字碗がある。杯A (167・168)は、口縁部が内

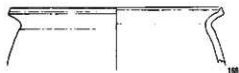
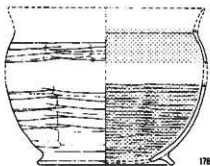
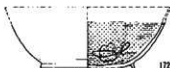
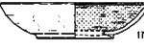
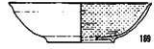
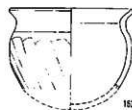
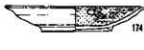
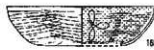
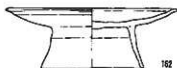
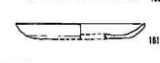
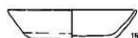
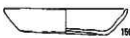
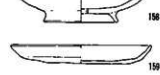
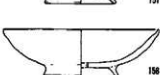
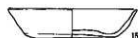
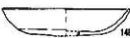
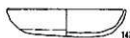
SD1029 (136・137)・SD1032 (138)



SK1030 (139~141)



SK1035 (142~178)

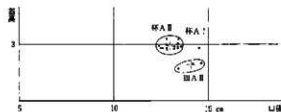


第48図 遺物実測図(6) 平安時代前期



器種	器形	破片数	比率(%)	
土 師 器	杯・皿・碗	652	04.9	
	高杯・盤・鉢	12	1.7	
	甕・甔	23	3.3	
	その他			
黒色 土器	小片	698	99.9	78.0
	杯・皿・碗	144	92.9	
	甕	9	5.8	
	その他	2	1.3	
須 恵 器	不明	155	100	17.6
	小片	8	38.1	
	甕・甔	4	19.0	
	鉢	8	38.1	
緑 釉 陶器	甕・甔	1	4.8	
	不明	21	100	2.4
	小片	15		
	甕・皿・碗	3		
灰 釉 陶器	杯・皿・碗	15		1.7
	甕・甔	3		
	その他			
	不明	3		
輸 入 陶 器	小片	3		0.3
	杯・皿・碗			
	甕・甔			
	その他			
その他	小片	892		
総数				

第13表 SK1035出土破片土器計数表



第14表 SK1035出土土器器量分布

湾して端部を外側につまみ上げる。端部内面に沈線が1条巡り、口縁部内面には暗文を施す。口縁部外面直下までヘラケズリを行い、口縁部外面にはヘラミガキを施す。器壁の薄い丁寧な作りの土器である。碗は大きさにより、A IとA IIに分かれる。共に口縁部外面には、ヘラミガキを施さない。A I(172)は、口径17~18cm程度になり、口縁部内面に暗文が残る。A II(169~171)には、口縁部がつまみ上げられ、端部内面に沈線が1条巡るもの(169-170)、口縁部外面下半に横方向にヘラケズリを施すもの(170-171)がある。断面三角形の高台が付き、内面の暗文は見られない。皿は口縁部が内湾しながら外上方に開き、端部はつまみ上げるもの(173)と外反して丸く取るもの(174)がある。e手法で、内面にはヘラミガキと

暗文を施す。鉢Aは口縁部が短く外に折れ曲がり、大きさから二つに分かれる。小形のもの(175-176)は、器壁が薄く丁寧な作りで、体部上半までヘラケズリを行い、底部内外面は同一方向、体部内外面には横方向のヘラミガキを施す。中形のもの(177)も同様な調整であるが、器壁が小形のものより厚く、ヘラミガキもやや粗雑である。鉢B(178)は高台の付く丸い体部で、口縁部は長く外反すると思われる。体部外面は横方向のヘラケズリの後に幅2mm程の粗いヘラミガキを、内面はヨコナデで底部に近い所はヘラケズリの後に粗いヘラミガキを施す大形の鉢である。風字視(449)は陸部の破片である。丸く面取りした真が付き、内面縁には沈線が1条巡る。陸部内面のヘラミガキは横方向にヘラミガキをした後、縁に沿ってヘラミガキを施す。外面のヘラミガキも内面と同様である。

緑釉陶器はすべてが京都産で、碗(465-470)・皿(476-477)がある。稜を持つ477以外は軟質で、口縁部は外反する。高台には、蛇目高台(465)と輪高台(476)がある。

灰釉陶器には碗・皿があるが、図ができたのは三足皿(180)のみである。内面の軸の特徴から黒笹14号窯期と推定される。黒笹90号窯期の碗の小片も出土している。

須恵器甕(179)は、器壁の厚さが約1cmの大形の甕の体部片である。内面のタタキはいわゆる車輪文で、図では内面の拍本のみを表示した。

#### SK1018出土土器 (第49図)

土師器杯A II(181-182)・皿A I(184)・A II(183)・甕(185)がある他、黒色土器杯A・碗B、須恵器杯蓋・甕の小片がある。土師器皿A Iの底部外面はヘラケズリを施すものである。

#### SK1023出土土器 (第49図)

土師器杯A I・A II・碗A II・皿A I・A II・杯蓋・甕、黒色土器、緑釉陶器碗・皿、灰釉陶器皿、須恵器甕の他、土師(531)がある。SK1035と同時期の9世紀後半のものと思われる。

土師器杯A II(186-188-189)のうち186は、器壁が薄い。碗A II(187)は、やや丸底気味の底部で、口縁部は外上方に内湾しながら延び、端部は外側につまみ上げる。口縁部の下まで横方向にヘラケズリを

施す。皿はe手法で、口縁部は短く外反し、端部は丸く収める。口径の大きさにより、A I (193)・A II (192)に分かれる。杯蓋(191)は丸くほぼ直立するつまみを持ち、ヘラミガキは施していない。

黒色土器A類碗(195)は、内湾しながら外上方に開く口縁部で、端部は丸く収める。口縁部外面は、端部直下までヘラケズリを行う。器壁は厚いが、内外面にヘラミガキを施す丁寧な作りである。他に黒色土器B類の風守硯(452・453)がある。

緑釉陶器碗(174)は、口縁部の途中で稜をもつ稜碗である。外反する口縁端部外面の直下には凹線が通る。高台は削出の輪高台で、口縁部内面は横方向、底部内面は同一方向のヘラミガキを施す。軸は底部外面以外に薄く掛かる。京都の小塩窯のものである。皿(179)は内湾する口縁部で、端部は外反する。猿投窯のものである。

灰軸陶器皿(196)は底部の破片で、灰軸は刷毛塗りである。

須恵器甕(197)は外反する口縁部で、端部は内側に肥厚し、内傾する面を持つ大形の甕である。

#### SK 1033出土土器 (第49図)

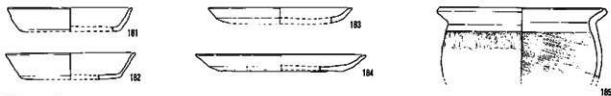
土師器杯A II・皿、ロクロ成形土師器碗A・碗B・鉢がある。

土師器杯A II (198)は、口縁端部をつまみ上げる。皿A II (199)は口径に対して器高が高い。

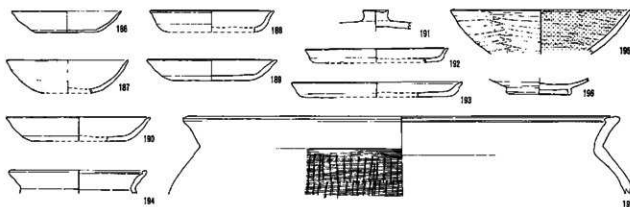
ロクロ成形土師器碗A(200)の底部外面は、ロクロケズリの後にナダを施す。内湾する口縁部で、端部は丸く収める。碗B(201)は、高台が付く。底部外面はナダが施してあるため、ヘラ切りかどうかは不明である。鉢(202)は内湾する体部を持ち、平底になると思われる。口縁部は短く外反し、端部はつまみ上げて外傾する面を持つ。体部の横方向のナダから見ると、ロクロ土師器の可能性が高い。

黒色土器碗A I (203)は、口縁端部を外側につまみ上げる。内面にはヘラミガキを施すが、暗文は施していない。

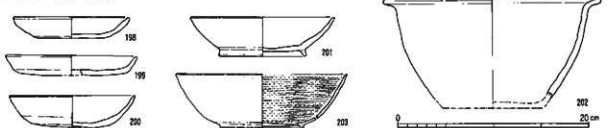
#### SK 1018 (186~197)



#### SK 1023 (186~197)



#### SK 1033 (198~202)



第49図 遺物実測図(7)平安時代前期

## (6) 平安時代中期の遺物

### SK 1012出土土器 (第50図)

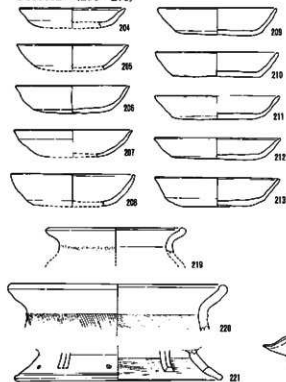
遺物には、灰釉陶器黒笹90号窯期でも新しいものも一部含まれるが、土師器杯・皿などに古い様相が見られ、9世紀後半から10世紀代初頭の遺物が混在していると思われる。須恵器円面硯(447)の脚の小片、猿面硯(455)も出土した。

土師器杯AⅡ(208~213)は、SK 1035のものと同形態、法量が類似する。204は口径、器高共に小さなもので、杯Aでも小形である。皿はAⅡ(215~217)の他、口径の小さな皿(214)はAⅢとするべきものかもしれない。短く外反する口縁部を持ち、端部は丸く取めるもの(215)以外はつまみ上げる。碗AⅡ(205~207)はe手法で、やや丸底気味の底部に内湾する口



第15表 SK 1012出土土師器法量分布

### SK 1012 (204~278)

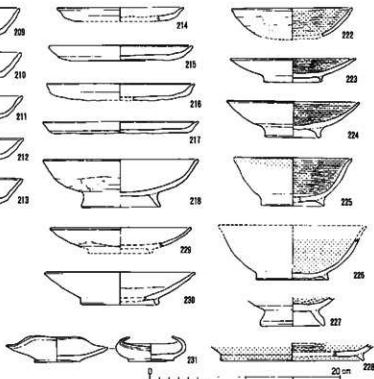


第50図 遺物実測図(8) 平安時代中期

縁部で、端部は外縁につまみ上げられる。碗B(218)は口縁部下半ヘラケズリを施し、内面のヘラミガキは摩滅が激しく不明である。臺は小形のもの(219)と大形のもの(220)がある。口縁部は内湾し、端部はつ

器種	器形	破片数	比率(%)
土師器	杯・皿・碗	1142	89.6
	高杯・盤・鉢	20	1.6
	甕・甗	96	7.6
	その他	15	1.1
	不明	1	0.1
	小計	1274	100
黒色土師	杯・皿・碗	110	8.6
	甕	5	4.3
	その他	1	0.8
	不明	1	0.8
	小計	117	9.2
須恵器	杯・皿・碗	37	2.9
	鉢	8	0.6
	甕・大形鉢	44	3.4
	その他	1	0.1
	小計	89	6.9
緑釉陶器	杯・皿・碗	17	1.3
	甕・瓶	1	0.1
	その他	1	0.1
	小計	19	1.5
灰釉陶器	杯・皿・碗	14	1.1
	甕・瓶	1	0.1
	その他	1	0.1
	小計	16	1.2
輪切陶器	杯・皿・碗	3	0.2
	甕・瓶	1	0.1
	その他	1	0.1
	小計	5	0.4
その他	甗・土師	3	0.2
	フイゴ	1	0.1
	小計	4	0.3
	不明	1514	118.1

第16表 SK 1012出土破片土器計数表



まみ上げて内側に肥厚する。大形のものでは体部が垂直になっているため、長胴壺の可能性がある。221は長方形の透かしが残り、外面の透かし間には棒により刺突を1ヶ所施す。上面には接合の割離痕が残り、頸例は少ないが盤の高台になるとと思われる。胎上が良く、混入した可能性が高い。

黒色土器は、B類(228)が1点ある他はA類である。杯A(222)は器壁が碗Aに比べて薄く、口縁部外面直下までヘラケズリを施す。内面はヘラミガキのみで、暗文は施さない。碗AⅠ(226)はやや粗雑な作りで、残りが悪い内面のヘラミガキについては不明である。碗AⅢ(225)は口径に対して器高の深いもので、器壁は厚く、外面の調整はe手法である。内面はヘラミガキのみである。皿は口縁部が外上方に直線的に延び、端部は外反して丸く収めるもの(223)、内湾する口縁部で器高が深いもの(224)がある。いずれも内面は、幅2mm程のヘラミガキを施し、高台は断面方形で低い。227はA類碗の底部である。内面は板状工具によるナデ調整で、高台が高く、これまでの黒色土器の中では類例が見られない。时期的に新しい11世紀のSK1054の黒色土器(358)と、高台の形態が類似するため、黒色土器碗Bの高台とする。黒色土器鉢(228)は黒色土器B類で、内面にはヘラミガキを密に施す丁寧な作りのものである。高台径が広いいため、鉢の高台とした。

緑釉陶器は、京都産のものが中心であるが、近江産と思われる碗の小片も1点ある。碗(467)は残存する口縁部に輪花と思われるものが1ヶ所残っている。口縁部下半はロクロケズリで、底部はロクロケズリの平高台で、外面に4ヶ所のトチン痕が残る。

灰釉陶器皿(229)は灰釉が付着して、皿(230)は刷毛塗りである。耳皿(231)は底部糸切りである。

#### SD1081出土土器 (第51図)

土師器杯AⅠ(236・237)・AⅡ(234・235)は、口縁端部をつまみ上げる。杯AⅡでも232・233は、内湾する口縁部で、端部は外反する。232は器壁が他の杯と比べて薄い。皿は小形で、口縁部を短くつまみ上げる241は、前代からの系譜を引くものである。これに対し、丸底の底部で口縁部が外に折り曲げられ、端部を上につまみ上げる240は、これまでにない器形で、京都系の土師器皿の影響が窺える。239は丸底の

底部に外上方に開く口縁部で、端部は丸く収める。後出する碗杯の器形に近い。この他、口縁部が長く外に広がる皿の高台(242)がある。

ロクロ成形土師器碗(238)は、内湾しながら立ち上がる口縁部を持ち口縁端部は外反する。底部はヘラ切りである。

黒色土器は、A類の碗AⅡ(245)とB類の碗(246)がある。245は内面ヘラミガキのみ、246は内面端部に沈線が一条巡り、内面にヘラミガキと暗文を施す。

#### SK1077出土土器 (第51図)

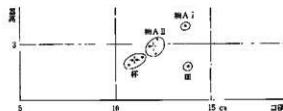
土師器杯AⅡ(247~250)は、口径11cm前後、器高2~2.5cmと小形化する。やや丸底の底部で、口縁部は外に開き外反する。口径13cm前後、平底で口縁部が直線的に外上方に開く杯は消滅する。内面ナデ調整のもの以外、刷毛目の残るもの(247)がある。碗AⅠ(251~253)は、やや丸底の底部で口縁部が外反し端部は丸く収める。底部外面はe手法である。他に口径が大きく、外上方に長く延びる口縁部を持つAⅠ(254)もある。皿(255)は丸底気味で、口縁部は外反し、端部はつまみ上げられる。平底で口縁部が短く外反する、平安時代前期の皿は消滅する。

黒色土器はA類で、碗AⅠ(259)・AⅡ(256~258)の他、大形の碗(260)もある。碗AⅠは外面ヘラケズリの後にヘラミガキを施し、碗AⅠ・AⅡ共に内面はヘラミガキのみである。260は内湾しながら立ち上がる口縁部で、端部を外側につまみ上げる。内面は黒色化のみと思われる。

#### SD1082出土土器 (第51図)

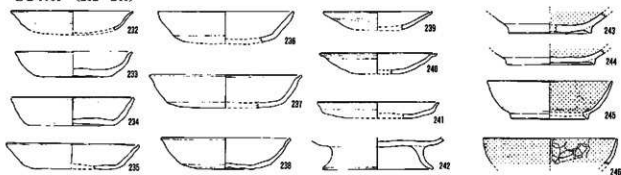
皿(261~263)は外反する口縁部で、端部はつまみ上げられる。碗AⅡ(264・265)は、丸底気味の底部に口縁部は外反しながら立ちあがる。

黒色土器杯A(266)の内面底部には、板状工具痕跡が残り、ヘラミガキは施されない。碗AⅡ(268)は口縁部が外反してつまみ上げられ、三角高台を持つ。

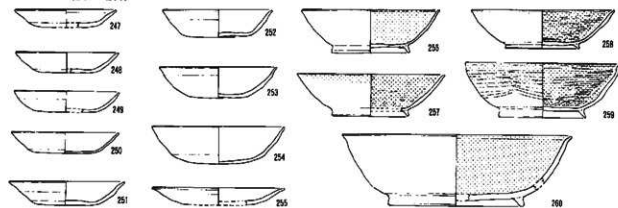


第17表 SK1077出土土器器法量分布

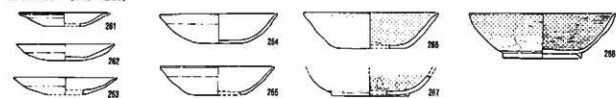
SD1081 (232~246)



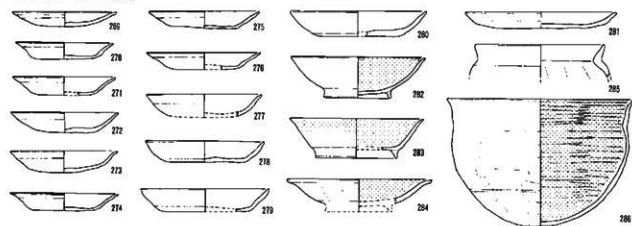
SK1077 (247~260)



SD1082 (261~268)



SK1017 (269~286)



SD1050 (287~291)



0 20 cm

第51図 遺物実測図(9) 平安時代中期

SK 1017出土土器 (第51図)

土師器には器壁が厚く、平底気味の杯AⅡ(278～280)・椀AⅡ(277)・皿AⅡ(281)など古い様相の器種が見られるが、中心は器壁が薄くやや丸底気味の杯である。土師器杯(270～276)は口径が11cm前後で、丸底気味の底部で口縁部は内湾しながら立ち上がり、端部は外側につまみ上げる。

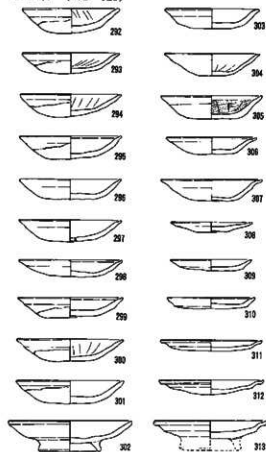
黒色土器は、丸底で内湾する口縁部のもの(282)、平底で直線的に外上方に開くもの(283)がある。283は内面黒色化のみで、暗文は施されない。鉢(286)は半球形の体部から立ち上がる長い口縁部で、端部は外側につまみ上げる。体部内面は板状工具によるヨコナアの後に、粗いヘラミガキを施す。壺(285)は内湾する口縁部を持ち、内面は黒色化のみである。

SD 1050出土土器 (第51図)

土師器椀AⅡ(287・288)・皿(289)、黒色土器椀(290)の他、灰釉陶器瓶の体部片(291)がある。

皿は底部から外反する口縁部で、端部は折り曲げられ、口径が10cm以下の小形のものである。

整地層 (292～325)

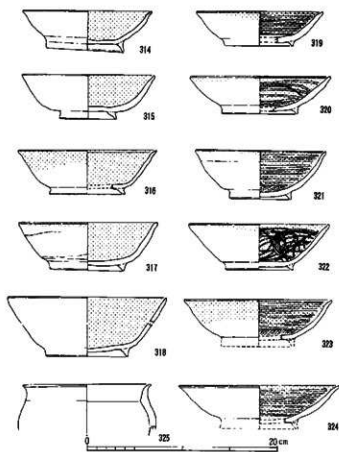


第51図 遺物実測図(10) 平安時代中期

整地層出土土器 (第52図)

土師器は、椀A・杯Aや皿の区別は困難となる。口径10～11cm、高さ2～2.5cmほどのものが中心である。口径や口縁部の形態は様々であるが、ここでは分類は行わない。口縁端部を外側につまみ上げるもの(306・307)は、椀AⅡを意識したものであろうか。器壁は厚いものが大半で、薄いものは少ない。高台の付く302もある。皿(311・312)は口縁部を外側におり曲げて端部をつまみ上げる、いわゆる京都系の「て」字口縁の皿である。口径はいずれも10.8cm、器高1.2cm・1.6cmと、平安京のⅢ新形式の皿Aの法量に近い。この皿に高台を付けた313もある。310は口縁部が短く外反し、同様な形態の皿にはロク口或形土師器皿(309)がある。

黒色土器は、椀AⅠ(318)・AⅡ(314～317・319～324)がある。AⅡのうち、314～317には内面のヘラミガキが施されていない。高台の径が小さく、黒色土器椀B類の形態を模倣したと思われる315もある。内面のヘラミガキは、幅や間隔が広くなり、粗雑化

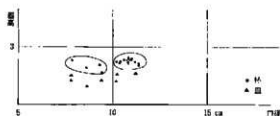


する。口縁部内面に沿って円弧を描くようにヘラミガキを施すもの(322)や、一筆書きのようなもの(321)もある。大半は器壁が厚く粗雑なものである。

### (7) 平安時代後期の遺物

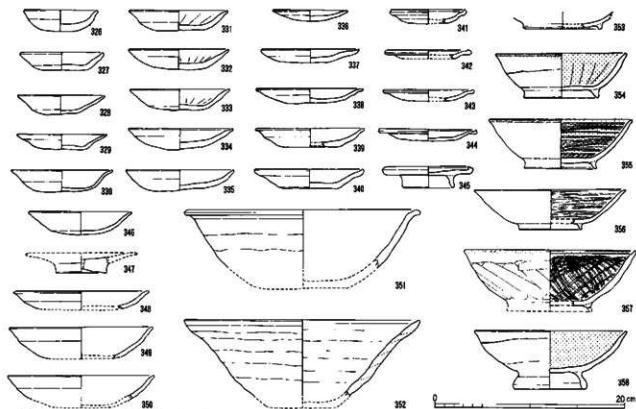
#### S K 1054出土土器 (第53図)

土器器は杯・皿が中心で、新たに杯Nが出現する。杯(326~335・339・340)は口径10~11cmが中心で、口径10cm以下のもの(326~329)もある。皿は「て」字口縁を持つもの(338・341~344)と横に開く口縁部を持つもの(336・337)があり、横に開くものは大小の種類がある。「て」字口縁を持つ皿は口径約8~10cmと大きさにばらつきがあり、小さなものは口縁端部のあまいものである。345は平な底部で口縁端部を



第18表 SK1054出土土器片量分布

#### S K 1054 (326~358)



第53図 遺物実測図(11) 平安時代後期

折り曲げる皿で、高台の付くものである。

杯N(348~350)は口径が大きく、口縁部に強いヨ

器種	器形	破片数	比率(%)
土器	杯・皿・鉢	709	91.8
	高杯・盤・鉢	34	4.4
	その他	29	3.8
計		772	100
黒色土器	杯・皿・鉢	198	19.5
	その他		
	小計	198	
須恵	杯・皿・鉢	3	11.1
	盤・鉢	7	25.9
	鉢・大形鉢	16	59.3
	その他	1	3.7
計		27	100
緑釉陶器	杯・皿・鉢	2	0.9
	その他	2	
灰釉陶器	杯・皿・鉢	3	0.3
	その他	3	
輸入陶器	杯・皿・鉢	3	0.3
	その他	3	
その他		1	0.1
計		1000	1000

第19表 SK1054出土破片土器計数表

コナデが見られる。器高に違いがあるが個体数が少ないため、器種の細分はここでは行わない。鉢(351・352)は、外面に粘土紐の痕跡が残る粗雑な作りである。他からの出土数は少ない。

ロクロ成形土師器杯(346)は、口縁端部が外反し、器壁は薄く、底部はヘラ切り調整である。ロクロ成形土師器の中には、347のように底部が円柱状になるものもある。

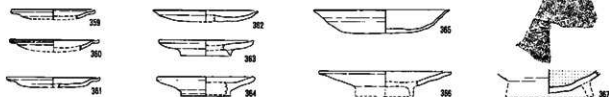
黒色土器は器壁が厚く、作りの悪いものが多く、外面に粘土紐の痕跡が残るものもある。内面にヘラミガキを施さないもの(354)や、口縁部内側に円弧を重ねさせてヘラミガキを施すもの(357)、高台の径が小さくて深い高台を持ち、内湾する口縁部で端部が外反するもの(358)がある。

瓦器鉢(353)は、1点出土しただけである。器壁は摩耗しているためにヘラミガキは不明である。

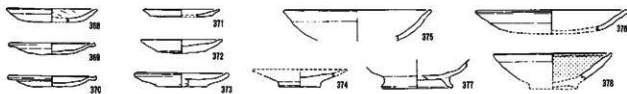
#### SK 1064出土土器 (第54図)

土師器皿(359~363)は、口縁部がつまみ上げられるもの(362)と、外反して端部を折り曲げる「て」字皿(359~361)がある。「て」字皿は口径が8.8~9.8cmと小形である。皿B(366)は大形で口縁部が横方向にヨコナデされる。杯N(365)は、やや丸底気味の底部で、口縁部は2回強くヨコナデする。

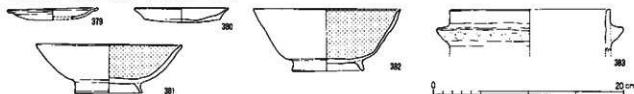
#### SK 1064 (359~367)



#### SD 1069 (368~378)



#### SK 1014 (379~382) SK 1013 (383)



第54図 遺物実測図(12)平安時代後期

ロクロ成形土師器皿(364)は、円柱状の高台を持つ。口縁部は内湾しながら横に閉き、端部は丸く収める。底部外面はヘラ切りかと思われる。

黒色土器碗(367)はA類で、高台の剝離した碗の底部である。内面はヘラで性格不明の線が刻まれる。

#### SD 1069出土土器 (第54図)

図示したものは、北側のD5-8調査区から出土したもので、整地層出土遺物より後出のものである。土師器皿は、内湾しながら延びる口縁部で端部は外側にナデられるもの(368)や口径9cm程の「て」字皿(369・370)がある。杯Nは器高の浅いもの(376)と深いもの(375)がある。

ロクロ成形土師器皿は口径約9~10cmと小形で、様々な形態がある。口縁部が短く外反するもの(371)、内湾しながら端部を丸く収めるもの(373)と端部が外側にナデられるもの(372)がある。底部はヘラ切りが明瞭に残るもの(372)、平底でロクロケズリかと思われるもの(371)、糸切痕の残る円柱状のもの(374)がある。

黒色土器碗(378)は小形のもので、内面は黒色化のみでヘラミガキは施していない。

#### SK 1014出土土器 (第54図)

土師器皿(379)は、口径の小さな「て」字皿である。ロクロ成形土師器皿(380)は、口縁部が短く外反し、



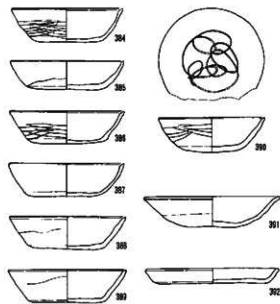
底部外面へラ切りである。

黒色土器はA類のみで、381は口縁端部がつまみ上げられ、内面は黒色化のみである。382は底部から屈曲して外上方に口縁部が延び、端部は外反して端部内面に沈線が1条巡る。内面のヘラミガキは不明である。

#### SK 1013出土土器 (第54図)

土師器鍋(383)は、円筒状の体部に鈎が張り付けられるものである。

#### SB 1070 (384~392)



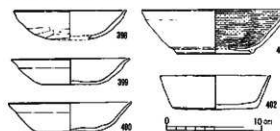
#### SB 1015 (393・394)



#### SB 1084 (395~397)



#### SB 1085 (398~402)



第55図 遺物実測図(13) 掘立柱建物出土遺物

## (8) 建物出土の土器

#### SB 1070出土土器 (第55図)

土師器碗A(384~390)は平底で、口縁部は外上方に延び、端部は内傾する面を持つ。e手法。384~389は同一柱形より出したもので、埋納された可能性も考えられる。384・386は口縁部外面に粗くヘラミガキが、390には底部内面に螺旋状暗文、口縁部外面に粗くヘラミガキを施す。これらは平安京のI期中の碗AⅡに類似<sup>3)</sup>、8世紀末から9世紀初頭と推定される。碗(391)はやや丸底気味の底部で、口縁部は外反するもので、あまり類例がない。皿AⅡ(392)は、口縁部が外上方に延びて端部は丸く収める。SD1010の51に近いものである。

#### SB 1015出土土器 (第55図)

土師器杯A(393)はやや平底の底部に外上方に延びる口縁部を持ち、端部は内傾する面を持つ。形態的には、SK1086等の平安時代前期前半のものに近い。碗A(394)の外面は口縁端部直下までヘラケズリを行い、外面にヘラミガキを施す。伊賀国府での出土は他になく、他からの搬入品の可能性が高く、平安京I期中頃の土器と類似する。

#### SB 1084出土土器 (第55図)

土師器杯(395)は平底で、口縁部は外上方に延び、端部は内傾する面を持つ。碗A(396)はやや丸底気味の底部で、口縁部は内湾し、端部はつまみ上げる。外面はe手法である。

須恵器杯蓋(397)は口縁端部を折り曲げ、外側に面を持つものである。

#### SB 1085出土土器 (第55図)

土師器碗A(398~400)は、口縁端部が外反するもので、398は底部外面にヘラケズリを行う。平安時代前期後半の碗に類似する。黒色土器碗AⅡ(401)は内湾する口縁部で、端部はつまみ上げる。黒色土器A類で、内面ヘラミガキが施される。

須恵器杯(402)は平底で、口縁部が直線的に延び、端部は丸く収める。底部外面に「國府」の墨書が薄く残る。

#### SB 1071出土土器 (第56図)

土師器杯(405)は、内湾しながら延びる口縁部で、端部は外反してつまみ上げられる。形態的には碗とす

るべきかも知れないが、碗・杯の蓋が無くなっていく時期のものである。406は外反しながら延びる口縁部で、端部は内側につまみ上げられる。整地層出土の杯と比較してより古い様相を残す。皿(403・404)は、口径8cmと小形である。碗B(407)は内湾する口縁部で、端部は外反する。

P 1074出土土器 (第56図)

土師器杯(408~410)は小形で、口径10cm前後、器高2.0cm前後である。408・409は、S K 1077の247と内面の調整、器形が類似する。

黒色土器碗(411・412)は、口径10cm、器高4cm前後の小形で、口縁部は内湾して端部はつまみ上げる。端部内面に沈線が1条巡り、内面にヘラミガキを施す。

この柱穴の上面を整地層が覆っていたため、これより古いものであるが、時期的にはそう隔たりはないと思われる。

P 1078出土土器 (第56図)

土師器碗Bが2個体あり、413は平底で口縁部が外反し丸く収められ、底部はヘラ切りと思われる。414は内湾しながら延びる口縁部で、端部は内傾する面を持ち、高台も内傾する面を持つ。

P 1026出土土器 (第56図)

土師器杯AⅡ(415)は器壁が薄く、口縁部は外反し、つまみ上げる。

黒色土器碗(416・417)は、内湾しながら外上方に延びる口縁部で、端部は外反する。417は口縁部外面上半と内面ヘラミガキ、416は内面板ナデのみである。内面は火を受けたため黒色化していない。寛(418)は外反する口縁部で、端部は丸く収める。体部下半には、葉が付着している。

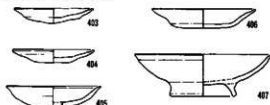
S B 1090出土土器 (第56図)

土師器には皿・杯・碗、ロクロ成形土師器皿・碗などの他、黒色土器B類碗の底部(431)がある。

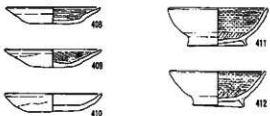
土師器皿(421~424)は10cm前後の小形で、高台の付くもの(425)や口径8cmのもの(420)もある。426・427は「て」字皿で、口径は9cmと9.6cmと小形で整地層出土のものより後出である。432・433は杯Nで、口縁部が外反して端部をつまみ上げる高台の付く大形の杯(436)もある。

ロクロ成形土師器は、皿(428・429)・碗(430)がある。皿は平底で口縁部が短く外反する。

S B 1071 (403~407)



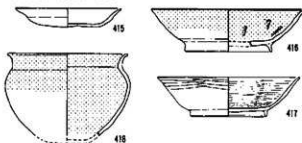
P 1074 (408~412)



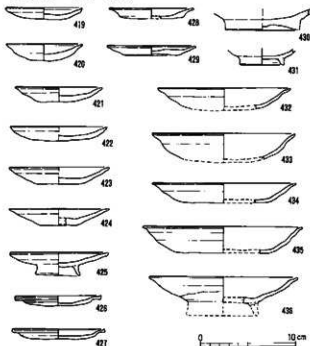
P 1078 (413・414)



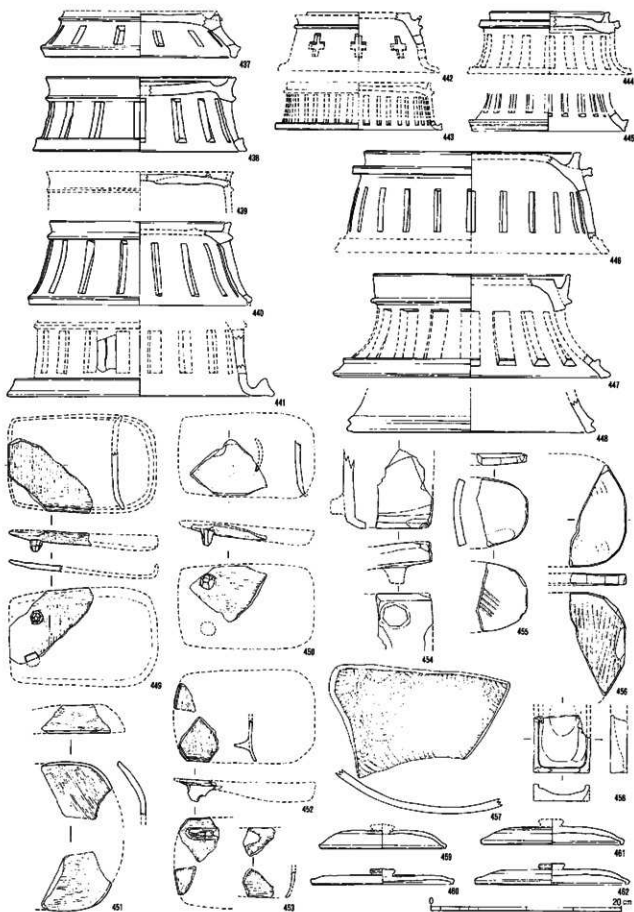
P 1026 (415~418)



S B 1090 (419~436)



第56図 遺物実測図(14) 掘立柱礎物出土遺物



第57図 遺物実測図(15) 種類

## (9) その他の遺物

**円面硯** 平成元年度から3年度まで円面硯の出土数は15個体で、このうち図示できたのは12個体である。岩坂地区から1個体(442)、前田地区から2個体(439)の他は、国町地区からである。前田地区のものはかなり摩滅しており、他からの混入品と思われる。

**硯部の形態**は、海と陸の境界が明確なもの(437・438・442・447)や丸くなるもの(446)、平坦な硯部に堤が巡ると推定されるもの(439・440)など様々である。脚の透かしの形態は、442の十字形を除き、判明するものは全て方形の透かしである。441は透かしと透かしの間をへらで削む破片が1片出土しているが、全体に刻まれているかは不明である。

出土状況は、447のように同一個体6片が約60mの範囲に、また440、441、446なども数十m離れた位置で同一個体片が出土するなど、廃棄あるいは整地に伴って広範囲に散乱した状況を示す。(第58図)

**風字硯** 灰釉陶器製と黒色土器製の2種類がある。灰釉陶器製品(454)は後端と左縁端をへらで成形し、底部には七角形に面取りした左脚の剝離痕が残る。

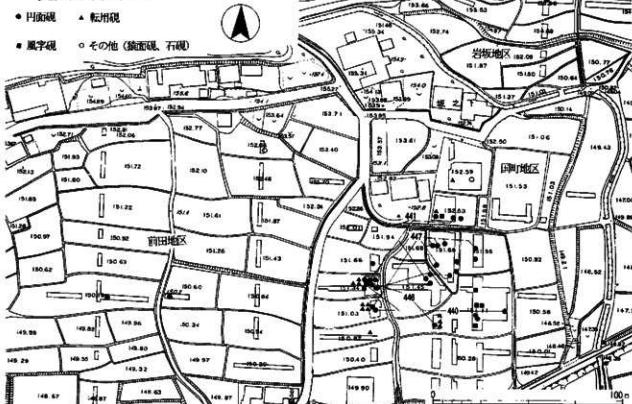
黒色土器製品は5点ある。450は円柱状の脚を持ち、内面には三日月状の堤かと思われる痕跡が一部残る。同様な形態の脚を持つものに449があり、内面縁に沈線が巡る。452・453は内面縁に沈線が巡る。452の右の脚は、板状の脚をへらで成形している。453は452と成形はよく似ているが、右脚の剝離痕と思われるものが残っているため、別個体とした。

**猿面硯** 前田地区(456)と国町地区(455)で各1点出土した。焼成前に面取りを行なっている。456の内面は使用のために摩滅しているのに対し、455の内面に使用痕は認められない。

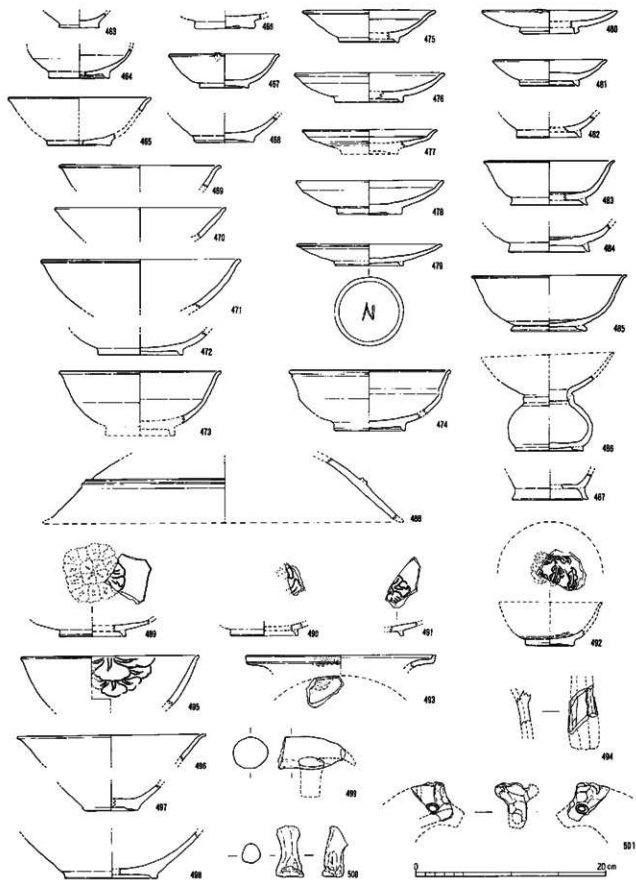
**転用硯** 457は須恵器製の体部片で、内面の一部が硯として使用したため摩滅する。面取りの痕跡は認められない。他に須恵器の杯蓋を利用したもの(459～462)が、10点近く判明している。西葛殿相当地域で多く見られ、中には内面に朱が残るもの(459)がある。いずれも内面が摩滅しているために転用硯と判明するもので、全てを抽出できている訳ではない。

**石硯** D3-6地区包含層から458の1点が出土した。前半部は欠損しているが、かなり使い込まれている。

石硯出土分布図



第58図 硯出土分布図(線で結ばれるものは同一個体)



第59図 遺物実測図(16) 緑釉陶器ほか

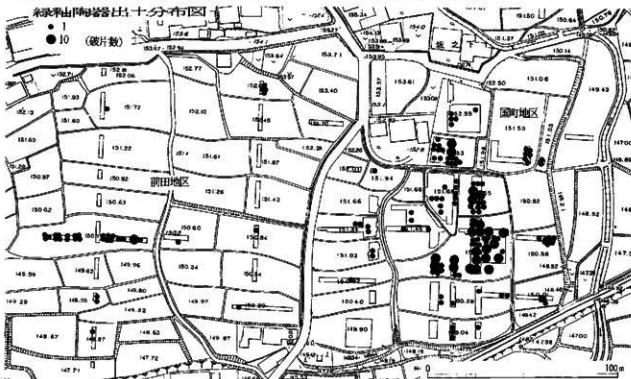
緑釉陶器 出土総点数は382片で、個体数としては309点である。岩坂地区から1点出土した他は、前田・国町地区からの出土である。

器種別、産地別の一覧は第20表の通りである。前田地区はE3-8調査区に集中し、産地別では近江産の比率が高い。国町地区では政庁城の北・東・南部に隣接する地域で多く出土した。

器種は、杯・皿類などの小形食器類が大半で、壺(486・487)などは少ない。特殊な器形には488・494がある。488は内面横方向にヘラミガキを施し、外面に凸帯が巡るもので蓋になると思われる。494は水注の取手である。取手は粘土紐を縦方向に3本張り合わせ、体部に張り付ける。体部外面、取手に黄色の厚い釉を施すもので、胎土等を見ても国産かどうか判断がつかない。

		地区	国町地区	前田地区			
碗	224	58.6					
皿	107	28.0					
蓋	2	0.5					
鉢	6	1.6					
壺	8	2.1					
不明	35	9.2					
計	382	100%					
			猿投	35	10.4	3	6.8
			京都	155	45.8	6	13.6
			美濃	33	9.8	3	6.8
			近江	103	30.5	31	70.5
			不明	12	3.5	1	2.3
			計	338	100%	44	100%

第20表 緑釉陶器器種別・産地別一覧表 (点数は破片数)



第60図 緑釉陶器出土分布図

陰刻花文陶器は5点あるが、図示できたものは4点(489~492)で、この他、前田地区から透かしのある蓋の小片が1点出土した。492は底部口クロケズリの京都産で、内面に草文が巡る。他は猿投産のものである。

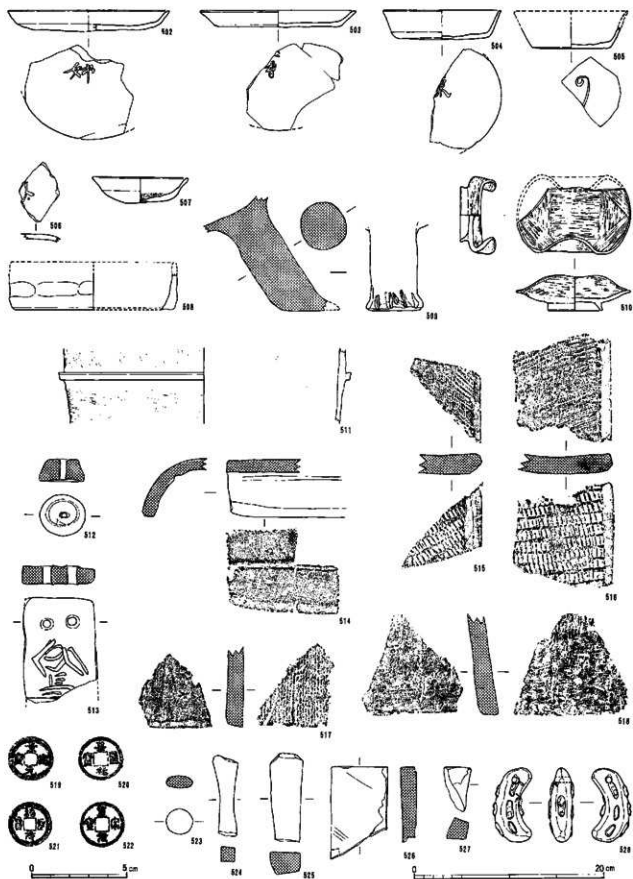
二彩陶器 国町地区のD5-8調査区から、蓋の口縁部の破片(493)が出土した。内面は釉薬が剝離しているが、外面には濃緑と淡緑の釉が残る。小片であるが、二彩陶器の可能性が高いものである。

灰釉陶器 陰刻花文の施される碗(495)は、文様から猿投窯黒笹90号窯期のものである。

青磁 496・497はD3-8調査区の包含層から出土した、同一個体の可能性の高いものである。498はS D1048から出土し、鎌倉時代のものと思われる。

土馬 499は褌馬の胴下半部と思われるもので、後脚を張り付けたと思われる窪みが2ヶ所残り、尾の下の胴部をへらで刺突している。500は臀部になると思われる。

陶馬 501は陶馬の頭部片と考えられる。顔は竹管によって左右の目を表現し、その上に突起をつくり耳を表現する。耳の先端や首筋には棒状のもので刺突している。内部は中空かと思われるが、小片のために全体像は不明である。



第61図 遺物実測図 (17) 黒書土器ほか (513・519~523は1:2)

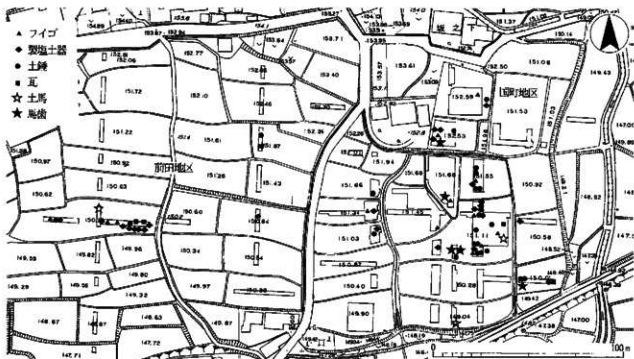
馬歯 馬歯の出土は、第21表のとおりである。1例以外は上顎白歯である。平安時代前期のS B 1090、S A 1040など、柱穴からの出土例も目立つ。追越地区のS B 20の柱穴内では、左上顎白歯と切歯(P L 26)がまとまって出土した。

墨書土器 国町地区の遺構出土のものには、S A 1052の土師器甕(503)や、9世紀後半のS K 1009の灰釉陶器皿(135)がある。503は底部外面に「□寺」、135は口縁部外面に二文字書かれているが、残りが悪い。「目目」か。包含層出土には、土師器皿(502)の底部外面の「鉢」がある。また、S B 1085出土402の底部の墨書は赤外線写真の結果、「岡野」あるいは「岡府」と判読でき(P L 27)、当遺跡が国庁と関係することを示す資料である。

前田地区出土には、須恵器杯底部外面に「泉」と

地区	遺構	出土位置	部 位
国町地区	SK1008	D3-8 Q16 SK1	左下臼歯1(定形)
*		D6-5 G16 包含層	左上臼歯1(細片)
*	SA1040	D6-3 S28 P1: 5	左上臼歯1(細片)
*		D6-9 P16 包含層	右上臼歯1
*		D6-9 P16 包含層	左上臼歯1
*	SB1020	D6-5 K8 1/4 3	右上臼歯1(細片)
追越地区	SD20	C2-4 S SK1	左上臼歯3・切歯4

第21表 馬歯出土地区一覧表



第22図 遺物分布図

書かれた504や、文字が記号か不明の505がある。

漆容器 漆の付着する土師器片が、国町地区から数点出土している。大半は小形供養具の破片と思われる、最も残りの良い杯(507)は、内面にヘラで漆をこねた痕跡(P L 26)が明確に残り、パレットとして使用したものである。平安時代前期。

製塩土器 国町地区から約20点、前田地区から約10点出土した。図示できるものは508のみである。志摩式の製塩土器で、平安時代前期のものである。

土符 土符は、15世紀から16世紀にかけて伊賀盆地北部で多く確認されている。513は国町地区D 5-9の包含層から出土したもので、幅3.8cm、長さ5.5cm、厚さ0.9cmで、上面に2ヶ所穴を穿つ。表面には墨書が施されているが、判読できない。裏面にはヘラにより花押と文字(馬)が書かれる。

円筒埴輪 511は土質のもので、背後の古墳群からの流れ込みの可能性が高い。

瓦 柘植川北部の調査で出土した瓦は、10片にも満たないものである。追越地区の平瓦2片(515・516)、国町地区の平瓦2片(517)、前田地区の丸瓦2片(514)、平瓦1片(518)などがあり、おそらく奈良時代に入るものであろう。建物を葺く量としては不足しており、建物が瓦葺きであることに対しては否定的である。



フィゴの羽口 国町地区から11片、前田地区から3片出土した。平安時代のSB1020、SK1012などから出土しているが、いずれも小片である。量的には少なく遺構としては確認できなかったが、周辺に鍛冶工房の存在を想定することができる。

土鐘 前田地区から4点、国町地区から19点出土した。遺構から出土するものが少なく、時期的な変遷は不明である。完形およびほぼ完形なものの長さとは、第22表のとおりである。

紡錘車 国町地区D3-6調査区の包含層から土製のもの(512)が、1点出土した。当地区の包含層出土の6世紀の遺物と同様の時期のものかと思われる。

その他 509は土師器製の脚で、先端をヘラで刻み獣脚として表現する。510はD5-5調査区の包含層から出土した黒色土器の耳皿である。内外面は丁寧にヘラミガキを施す。

#### 石製品

523は碁石状の形を呈するもので、材質は石英である。他に砥石(524~527)などもある。

528は追越地区のSD4から出土した子持勾玉である。側面と背面に3個、腹面に1個の勾玉を付ける。長さ7.9cm、幅2.7cm、厚さ2.2cmと比較的大形のものである。

#### 金属製品

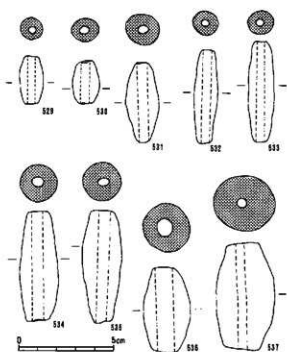
追越地区C11の包含層から貨幣4点(519~522)が出土した。初鋳年については観察表を参照されたい。

#### 木製品

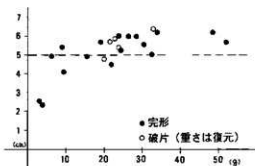
木製品は地下水位が高いため残りが良く、追越地区のSD4・8や前田地区の包含層から出土している。これ以外にも掘立柱建物の柱根が多く残っていたが、取り上げを行ったものは少ない。

SD4からは、上端に切り込みを入れた荷札木筒が約10点出土した。長さが約14cmの小形なもの(538~540)と16cmのもの(544・545)の2種類に分けられる。541・543は下を欠損し、542は上半分が削られているが、幅から見て小形の製品に入る。546・547は幅が広く、木筒になるかは不明である。これらのうち、538には「黒口丈」あるいは「黒口升」、539は「重丈口」と判読できる可能性がある。

SD8から出土した木製品には、550~558がある。550は桁材で、柱のほぞ穴と垂木を結ぶための穴が残



第63図 遺物実測図(18) 土鐘



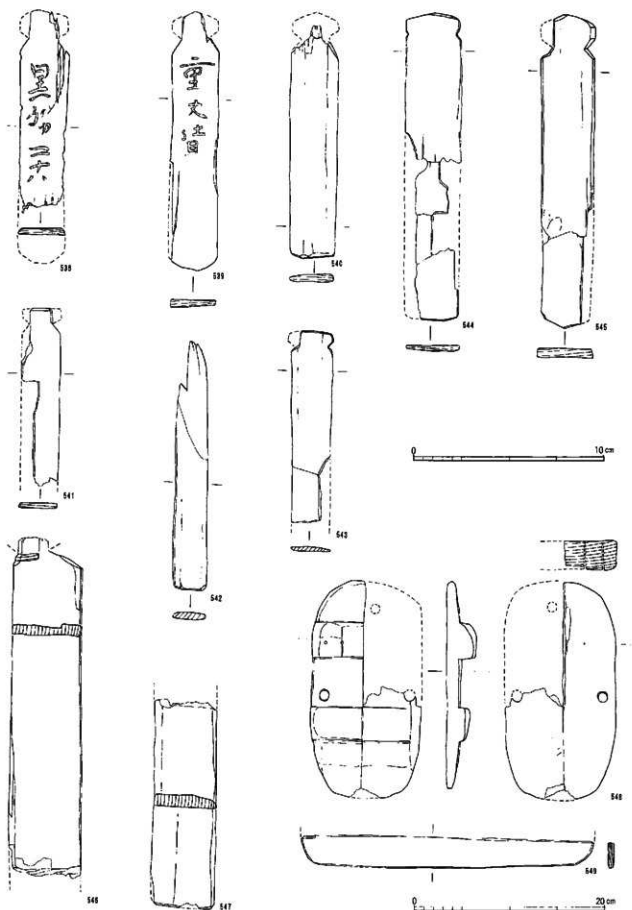
第22表 土鐘重量分布

る。柱間の寸法は、ほぞ穴から推定すると1.4mとなる。転用のため、厚さは薄くなっている。551~553は先端を尖らせて杭としたものだが、553にはほぞ穴が残る、建築部材の転用品である。555~557にもほぞ穴が残るため、柱材の転用かと思われる。558は、上面が平でなく凹凸が著しいため、臼ではなく衣笠状木製品としたものである。内側を二段にくり貫く。

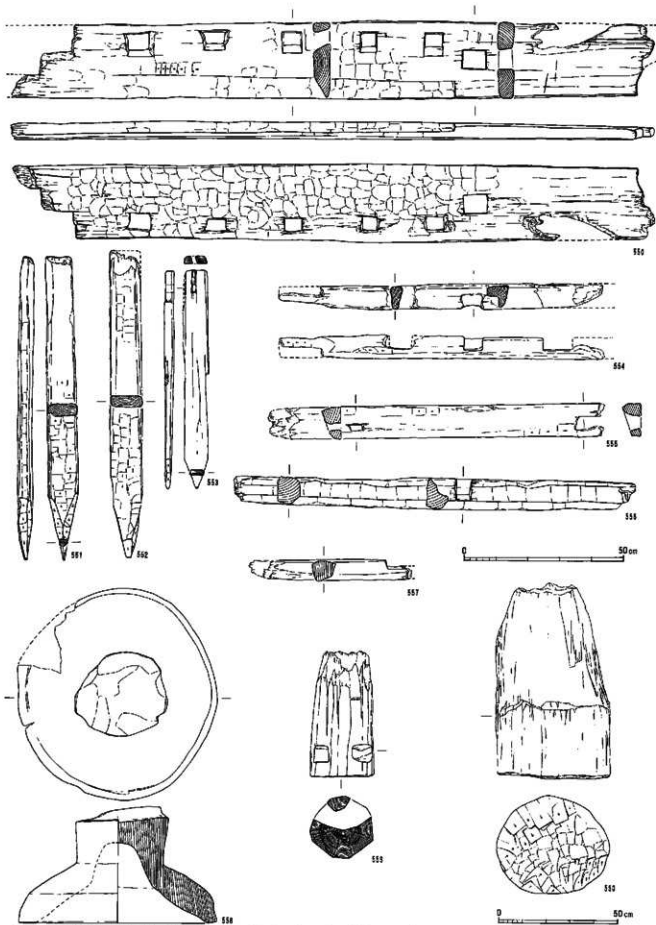
柱材には、下部に曳船用の穴が残るSB2015のもの(559)の他、560はSB1075の最も大きな柱材である。その他、13世紀の瓦葺と共に出土したものは、548の下駄と549の曲物の底板がある。下駄には、前歯の下に補強材を鉄釘で打ち込んだ痕跡が残る。

#### 註

1. 『戦国・鎌倉実物類考』 奈良国立文化財研究所 1978
2. 『平城宮城跡調査報告』 奈良国立文化財研究所 1978
3. 『平安京右京三條区』 京都府歴史文化財研究所調査報告第10巻、財団法人京都府歴史文化財研究所、1990



第64图 遺物実測图 (19) 木製品 (538~547は 1 : 2 548・549は 1 : 4)



第65図 遺物実測図(20) 木製品 (550~558は 1 : 12 559・560は 1 : 16)

No.	登録No.	部 種	用途	出土位置	法 量 (m)		調査技法の種類	粘土	硬 度	残存度	備 考		
					口径	壁厚							
1	105-02	縄文土器 鉢		CI-11 底倉庫	-	-	内外一ナダ。張り付け凸部			黒 (1~2mmの砂粒多く含む)	灰黄色	-	
2	104-04	* * *		SD8	CI-11-8 SD3	-	-			黒(3mmの砂粒含む)	灰褐色	-	
3	105-04	* * *		*	*	-	-	内外一具底倉庫。		黒 (1~4mmの砂粒多く含む)	黒褐色	-	
4	101-01	弥生土器 板付煎茶壺		SD13	CE-2-2 SD1	6.4	50	25.2	口縁部内外一横ナダ。底部外下平一胴部外一ヘラミオキ。口縁・胴外直前英文。	黒(3mm以下の砂粒含む)	灰白色	ほぼ完全	
5	101-02	弥生土器 壺		*	*	5.6		内外一横ナダ		黒 (1~2mmの砂粒含む)	にぶい褐色	30	
6	113-01	* 壺		BK-7 底倉庫	9.8	-	-	口縁部内外一横ナダ。口縁部外一胴部一横英文		*	灰白色	15	
7	113-02	* 壺		SD3	BK-7 C-7	-	-	外一破状文と刺突文交互に施す。		*	灰白色	-	
8	106-04	土師器 鉢		SH9	CI-14-1 SB-1B	11.9	5.4	口縁部内外一横ナダ。底部内外一ナダ。		黒 (1mm程度の砂粒少し含む)	黄褐色	25	
9	109-01	* 鉢		*	*	10.5	5.7	*		黒 (1mm程度の砂粒多く含む)	にぶい褐色	ほぼ完全	
10	109-02	* 壺		*	CI-14-2 SB-1B	14.4		口縁部内外一横ナダ。		黒 (1mm程度の砂粒多く含む)	にぶい褐色	30	
11	108-03	* 鉢		SD10K	DS-3 SB SD3	11.3		口縁部内外一横ナダ。底部内一横ナダ。外一ナダ		黒 (1~2mmの砂粒含む)	黄褐色	17	
12	108-01	* * *		*	*	9.8	5.3	口縁部内外一横ナダ。底部内外一ナダ。		*	黄褐色	13	
13	108-02	* 高杯		*	*	15.4		口縁部内外一横ナダ。底部内一ナダ。外一オサズ。		*	黄褐色	50	
14	109-07	煎茶壺 杯身		DS-3 SD1	R29 SD1	10.2	4.5	口縁部内外一ロクロナダ。底部外一ロクロナズリ。		*	暗灰色	75 底部	
15	108-05	土師器 壺		*	DS-3 SB SD3	8.4		口縁部内外一横ナダ。底部内一ナダ。外一縦方向のハケメの後、横方向のハケメ。		*	にぶい褐色	17	
16	108-04	* * *		*	*	9.2		*		*	にぶい褐色	26	
17	108-06	* * *		*	*	11.9		口縁部内外一横ナダ。底部内一横ナダ。外一縦方向のハケメ。		*	にぶい褐色	30	
18	102-03	* 鉢		SD8	CI-11-8 SD3	11.8	5.7	口縁部内外一横ナダ。底部内外一ナダ。		1mmの砂粒多く含む	明黄褐色	30	
19	106-01	* 高杯		*	*	-	-	杯底内外一ナダ。裏面内一ヘラケズリ。外一ナダ		黒 (1~2mmの砂粒含む)	褐色	-	
20	103-04	* 壺		*	*	14.7	-	口縁部内外一横ナダ。底部内外一ナダ。		*	黄褐色	口縁部 完全	
21	103-01	* * *		*	*	11.6	12.5	口縁部内外一横ナダ。底部内一横ナダ。外一縦ハケ (11本/2cm)。		*	黄褐色	口縁部 完全	裏面あり
22	102-02	* * *		*	*	12.1	14.0	口縁部内外一横ナダ。底部内一ナダ。外一縦ハケ (10から9本/2cm)。		*	灰白色	ほぼ完全	裏面あり
23	106-01	* * *		*	*	20.2	30.0	口縁部内外一横ナダ。底部内一横ナダ。外一縦ハケ (4本/1cm)の横ナダ。		*	にぶい黄褐色	ほぼ完全	
24	104-01	煎茶壺 杯身		*	*	12.3	4.3	口縁部内外一ロクロナダ。底部内一ロクロナダ。外一ロクロナズリ (R)。		*	灰白色	15	
25	102-01	* 杯身		*	*	10.2	5.1	口縁部内外一ロクロナダ。底部内一ロクロナダ。外一ロクロナズリ (R)。		*	灰白色	完全	底部内面ヘラ記号 (+)あり
26	103-01	* 杯身		*	*	11.8	4.6	口縁部内外一ロクロナダ。底部内一ロクロナダ。外一ロクロナズリ (R)。		*	灰白色	25	
27	104-03	* 高杯		*	*	8.3		裏面外一ロクロナダのあとキキメ。内一ロクロナダ。		*	灰白色	25	四方透かし
28	104-02	* 壺		*	*			底部内外一ロクロナダ。		*	灰白色	15	
29	104-05	* 器台		*	*	29.0	-	口縁部内外一ロクロナダ。外面に直状文 (単位12本)1条の下に凹線2本をくぐる。		*	青灰色	8	内面自然釉
30	107-01	* 壺		*	*	22.6	45.0	口縁部外面に直状文 (単位14本)1条。底部外一タキ後キキメ。内一タキ後ナダ。		*	青灰色	口40 体即	
31	111-03	てぐね土器		SD16	CE-3-3 SD2	7.2	3.3	内外一横ナダ。		*	にぶい黄褐色	30	
32	110-05	土師器 高杯		*	*	-	10.2	胴部内外一ロクロナダ。		*	黄褐色	20	透かしの痕跡残るが、極小。長さ不明。3方透かしか
33	110-02	煎茶壺 杯身		*	*	12.2	-	口縁部内外一ロクロナダ。		*	灰白色	15	
34	110-04	* 杯身		*	*	11.5	3.0	内外一ロクロナダ		*	灰白色	5	
35	110-01	* 煎茶壺		*	*	8.6	7.8	内外一ロクロナダ。底部外一ヘラケズリ。		*	灰白色	30	

第23表 遺物観察表 (1)

No.	登録No.	器 種	遺 蹟	出土位置	法 量 (cm)			測 量 技 法 の 特 徴	胎 土	焼 成 色 澤	残存度 (%)	備 考	
					口徑	底徑	器高						
36	115-02	須恵器 杯蓋	SB0702	B4-3 FYT2	13.0		3.0	口縁部内外-ロクロナデ。天井外-ロクロケズリ。内-ナデ。	良(1-2mmの砂粒含む)	灰	灰色	18	天井部外面自然輪かか
37	115-01	土師器 甕	*	*	26.6			口縁部内外-横ナデ。底部内外-ハケメ(5本/1cm)。	粗(3mmの砂粒含む)	黄	黄褐色	13	
38	114-01	*	*	*	15.2		14.9	口縁部内外-横ナデ。底部内-ハケメ、外-ハケメ(7本/1cm)の低下半ヘラケズリ。	良(1-2mmの砂粒含む)	*	灰白色	80	灰泥あり。底部中央上に1個凹輪のくる。
39	117-02	須恵器 杯蓋	SD0010	E-5-2 SD1	17.0		-	内外-ロクロナデ。	*	*	灰色	18	
40	117-03	土師器 甕	*	*	21.0		-	口縁部内外-横ナデ。底部外-ヘラケズリ。	*	*	褐色	5	口縁内面に放射状縮文1条
41	117-01	*	甕	*	14.4		16.2	口縁部内外-横ナデ。底部内-ハケメ(6本/1cm)、外-ハケメ(7本/1cm)の低下半ヘラケズリ。	良(1-2mmの砂粒多く含む)	*	褐色	35	外面塗付漆
42	267-04	土師器 杯	SK1002	D3-6 A4 FYT3	13.6		5.9	口縁部内外-横ナデ。底部内-横方向のハケメの痕ナデ。外-横方向のハケメの痕ナデ。	良(1-2mmの砂粒含む)	*	褐色	完形	
43	267-03	*	*	*	13.8		4.9	口縁部内外-横ナデ。底部-底部内-横方向のハケメの痕ナデ。	良(2mmの砂粒含む)	*	褐色	50	
44	267-02	*	甕	*	D3-6 A5 ナデアデ	12.6		口縁部内外-横ナデ。底部内-横方向のハケメ、外-縦方向のハケメ。	良(1-2mmの砂粒少し含む)	*	褐色	80	
45	267-01	*	*	*	22.0			口縁部内外-横ナデ。底部内-横方向のハケメ、外-縦方向のハケメの痕ナデ。	*	*	褐色	35	
46	114-02	須恵器 平蓋	包含帯	E-4-3	-		-	底部内外-ロクロナデ。底部外-ロクロケズリ。	*	*	灰白色	体部50	
47	116-01	土師器 甕	*	*	20.8		-	口縁部内外-横ナデ。底部内外-縦ハケ(6-7本/1cm)。	良(1-2mmの砂粒多く含む)	*	灰白色	18	
48	112-01	*	*	*	34-5	20.4	20.7	口縁部内外-横ナデ。底部内-ナデ。外-ハケメ(2本/2cm)。	*	*	黄褐色	口100 体20	
49	227-02	*	杯	SD1010	D3-8 P17 SD1	13.0	2.6	口縁部内外-横ナデ。底部内-ナデ。外-指サエ。	*	*	淡褐色	ほぼ完形	
50	227-03	*	*	*	13.6		3.0	*	やや粗(1-2mmの砂粒多く含む)	*	淡褐色	ほぼ完形	
51	15-01	*	甕	*	D3-8 L11 SD1	14.5	1.8	*	良(1-2mmの砂粒含む)	*	淡褐色	80	
52	24-10	*	*	*	15.8		2.1	*。底部内-横線状縮文1条。口縁部外-ヘラミガキ。	*	*	淡褐色	完形	
53	227-11	*	*	*	D3-8 P17 SD1	11.4		口縁部内外-横ナデ。底部外-ナデ。傘り付けナデの痕跡一部残る。	*	*	黄褐色	30	
54	227-11	須恵器 轆轤	*	P16	8.2		-	口縁部内外-ロクロナデ。	*	*	青灰色	26	
55	227-01	*	鉢	*	D3-8 P17 SD1	15.8	9.3	口縁部内外-ロクロナデ。底部内-ナデ。底部外-ロクロケズリの痕ヘラミガキ。	*	*	灰白色	40	外面のミガキ。残存部分では3面に分け、全体では外面のみ
56	36-01	*	甕	*	D3-8 L11 SD1	9.8	12.8	口縁部、底部内外面-ロクロナデ。底部内外-ナデ。	*	*	灰白色	ほぼ完形	胎土層による把手2ヶ
57	34-01	*	*	*	11.4	11.4	30.3	*。基部に注線1条	*	*	灰白色	完形	胎土層による把手2ヶ
58	40-07	土師器 甕	包含帯	D3-8 L11 短頸甕	35.3	13.0	8.6	口縁部内外-横ナデ。底部内-縦方向のヘラケズリの痕ヘラミガキ。底部内外-ナデ。	*	*	黄褐色	26	
59	229-01	*	杯	SK1011	D3-8 B16 SD1	13.3	2.9	口縁部内外-横ナデ。底部内-ナデ。外-指サエ。	*	*	褐色	60	
60	229-04	*	*	*	13.8		2.8	*	*	*	淡褐色	60	
61	229-08	*	*	*	12.8		2.9	*	*	*	褐色	70	
62	229-06	*	*	*	13.0		2.9	*	*	*	淡褐色	30	
63	229-02	*	甕	*	14.4		2.2	*	*	*	淡茶褐色	20	
64	229-09	*	杯	*	16.0		3.3	*	*	*	淡褐色	26	
65	229-07	*	甕	*	16.2		1.9	*	*	*	淡褐色	15	
66	228-09	*	*	*	16.8		1.8	*	*	*	褐色	70	
67	228-10	*	*	*	20.1		2.0	口縁部内外-横ナデ。底部内-ナデ。横線状縮文2条以上、外-ヘラケズリ。	*	*	褐色	30	
68	228-08	*	*	*	19.4		2.8	口縁部内外-横ナデ。底部内-ナデ。外-指サエ。	*	*	淡茶褐色	15	
69	229-03	*	轆	*	17.4	8.5	5.9	口縁部内外-横ナデ。底部内-ナデ。横線状縮文2条、外-ヘラケズリ。	*	*	淡褐色	20	張りつけ基台 口縁部内面の縮文不明
70	250-02	*	甕	*	14.4		-	口縁部内外-横ナデ。底部内外-ハケメ(7本/1cm)。	*	*	灰白色	10	

第24表 遺物観察表・柘植川北部(2)

No.	登録No.	器 種	通称	出土位置	法 量 (cm)			調 整 技 法 の 特 徴	胎 土	焼成 色 調	残存率 (%)	備 考	
					口径	底径	器高						
71	250-03	黒色土器 鉢	SK1011	128-8 SD1	—	—	底部内へヘラミダキ、外へヘラズリの後へラミダキ。	骨(骨粒はほとんど含まない)	良	灰白色	10	黒色土器A類	
72	229-06	模写器 皿	*	*	17.8	2.3	口縁部内外へラミダキ、底部内へラミダキ、外へラミダキの後ロクロナデ。	良(1-3mmの砂粒含む)	*	灰白色	15		
73	250-01	* 皿	*	*	—	11.0	—	底部内外へラミダキ、底部外へラミダキ。	*	黄灰色	体部破	黄土層による把手	
74	202-07	土師器 杯	SD1009	126-9 SD1	12.8	2.3	口縁部内外へラミダキ、底部外へラミダキ、骨部底に丸。	*	*	灰白色	16		
75	202-10	* 皿	*	*	12.8	—	口縁部内外へラミダキ、底部内へラミダキ、外へラミダキ。	*	*	にぶい黄褐色	13		
76	202-06	* 碗	* 002 SD1	16.5	—	—	口縁部内外へラミダキ、内面縦筋状地文、底部外へヘラズリ、脚張りつけナデの痕跡残る。	*	*	褐色	20		
77	202-09	* 杯	* 001 SD1	12.5	2.5	—	口縁部内外へラミダキ、底部内へラミダキ、外へヘラミダキの後ナデ。	*	*	浅黄褐色	13	ロクロ成形土師器	
78	202-03	模写器 杯	* 002 SD1	—	3.5	—	—	底部内外へラミダキ、張り付け高台。	*	*	灰色	25	
79	202-04	* 皿	*	*	15.4	—	—	口縁部内外へラミダキ。	*	*	黄褐色	13	
80	202-05	* 皿	*	*	27.5	—	*	*	*	灰色	8		
81	202-06	灰輪陶器 碗	*	*	16.7	—	—	口縁部内外へラミダキ、体部外下半へラミダキ。	*	*	灰色	13	内面に厚い輪
82	202-01	* 皿	* 001 SD1	—	—	—	—	口縁部内外へラミダキ。	*	*	灰色	—	口縁部内面へ自然輪
83	245-07	土師器 鉢	SK1006	126-5 JT SK1	13.0	2.4	口縁部内外へラミダキ、底部内へラミダキ、外へラミダキ。	*	*	灰白色	90		
84	245-05	* * *	*	*	13.2	2.5	*	*	*	灰白色	25		
85	245-02	* * *	*	*	12.4	2.5	*	*	*	にぶい黄褐色	30		
86	245-05	* * *	*	*	13.5	2.5	*	*	*	灰白色	90		
87	245-04	* * *	*	*	12.3	2.5	*	*	*	浅黄褐色	50		
88	247-02	* * *	*	*	13.0	2.8	*	*	*	浅黄褐色	50		
89	245-05	* * *	*	*	12.4	2.7	*	*	*	浅黄褐色	30		
90	245-08	* * *	*	*	14.4	2.8	*	*	*	灰白色	30		
91	245-02	* * *	*	*	14.4	3.0	*	*	*	灰白色	30		
92	245-01	* * *	*	*	15.0	3.0	*	*	*	にぶい褐色	30		
93	245-09	* 碗	*	*	16.0	—	—	口縁部内外へラミダキ、底部内へラミダキ。	*	*	にぶい黄褐色	30	高台有層
94	246-10	* * *	*	*	16.0	—	*	*	*	浅黄褐色	15	高台有層	
95	246-06	* 皿	*	*	13.3	1.8	—	口縁部内外へラミダキ、底部内へラミダキ、外へラミダキ。	*	*	浅黄褐色	75	
96	246-08	* * *	*	*	13.8	1.8	*	*	*	浅褐色	30		
97	246-07	* * *	*	*	18.3	1.7	*	*	*	浅黄褐色	30		
98	247-01	* 皿	*	*	30.6	—	—	口縁部内外へラミダキ、体部内へヘラミダキ、外へラミダキ。	*	*	浅黄褐色	25	
99	247-02	黒色土器 皿	*	*	16.6	6.1	2.8	口縁部内外へラミダキ、底部内へヘラミダキ、外へラミダキの後口縁部へラミダキ。	*	*	褐色	15	張りつけ高台 黒色土器A類
100	245-02	* 杯	*	*	17.4	4.6	—	口縁部内外へラミダキ、内へヘラミダキ、外へラミダキの後口縁部へラミダキ。	骨(骨粒はほとんど含まない)	灰白色	90	黒色土器A類	
101	245-01	灰輪陶器 皿	*	*	4.2	—	—	口縁部内外へラミダキ、体部外下半へラミダキ。	*	*	灰白色	90	口縁部内外へ自然輪
102	247-05	* 碗	*	*	13.4	7.2	4.1	口縁部内外へラミダキ、体部外下半へラミダキ。	*	*	灰白色	60	張りつけ高台、内面に厚い輪
103	256-07	土師器 杯	SK1008	120-8 Q16 SK4	12.8	2.8	—	口縁部内外へラミダキ、底部内へラミダキ、外へラミダキ。	良(1-3mmの砂粒含む)	浅黄褐色	25		
104	256-08	* * *	*	*	13.5	2.4	—	口縁部内外へラミダキ、底部内へラミダキ、外へラミダキ。	*	*	灰白色	25	
105	256-09	* 皿	*	*	14.0	1.8	*	*	*	浅黄褐色	17		

第25表 遺物観察表・柘植川北部(3)

No	電線No	器 種	通稱	出土位置	法 量 (cm)			調査技法の種類	胎 土	装 色 調	残存率 (%)	備 考	
					口縁	底径	器高						
106	256-10	土師器 甌	SK1006	D3-8 SK4	Q16	13.0	1.8	口縁部内外一貫ナダ。底部内ナダ、外一貫ナダ。(木目残る。)	良(1-2mmの砂粒含む)	良	褐色	17	
107	251-05	* 甌	SK1009	D3-8 SK2	Q16 下	11.0	2.9	口縁部内外一貫ナダ、外一貫ミダキ。底部内外一貫ナダ。	*	*	淡褐色	50	
108	228-07	* 杯	*	* Q16 SK2	13.2	2.3	口縁部内外一貫ナダ。底部内ナダ、外一貫ナダ。	*	*	淡褐色	30		
109	227-06	* * *	*	*	13.2	2.3	*	*	*	淡褐色	30		
110	227-05	* * *	*	*	13.2	2.8	*	*	*	淡褐色	30		
111	228-02	* * *	*	*	12.8	2.7	*	*	*	淡褐色	ほぼ定形		
112	228-04	* * *	*	*	11.8	2.7	*	*	*	淡褐色	70		
113	228-01	* * *	*	*	12.4	2.3	*	*	*	淡褐色	70		
114	228-05	* * *	*	*	12.8	2.0	*	*	*	淡褐色	70		
115	228-06	* * *	*	*	12.9	2.8	*	*	*	淡褐色	90		
116	228-03	* * *	*	*	14.2	2.9	*	*	*	淡褐色	50		
117	251-08	* * *	*	D3-8 SK2	Q17	12.2	2.3	*	*	*	灰白色	25	
118	251-08	* * *	*	* R16 SK2	14.3	2.4	*	*	*	淡黄褐色	20		
119	251-07	* 甌	*	* Q17 SK2	12.0	1.8	口縁部内外一貫ナダ。底部外面一貫切り。	*	*	灰白色	15	口縁部内外一貫ナダ。	
120	227-08	* 甌	*	* Q16 SK2	13.9	3.7	口縁部内外一貫ナダ。底部外面一貫切り。	*	*	淡茶褐色	75	口縁部内外一貫ナダ。	
121	251-03	* 甌	*	* Q16 SK2	13.8	1.4	口縁部内外一貫ナダ。底部内ナダ、外一貫ナダ。	*	*	淡褐色	25		
122	227-08	* * *	*	* Q16 SK2	14.4	2.1	*	*	*	淡褐色	ほぼ定形		
123	251-01	* * *	*	* Q17 SK2	15.0	1.8	*	*	*	淡黄褐色	50		
124	251-02	* * *	*	* R17 SK2	16.2	1.8	*	*	*	淡褐色	25		
125	251-04	* * *	*	* R16 SK2	20.8	11.8	2.7	* 底部内面に模造状縮文1条。	*	*	淡褐色	15	
126	251-10	* 甌	*	* Q17 SK2	13.2	-	口縁部内外一貫ナダ。底部上半一貫ナメ・下半一貫ナメ、内一貫ナメ。	*	*	灰白色	30		
127	256-06	須恵器 甌	*	* Q16 SK2	15.4	2.0	口縁部内外一貫ナダ。底部内外一貫ナダ。	*	*	灰白色	20		
128	227-04	* * *	*	* Q16 SK2	18.4	2.6	口縁部内外一貫ナダ。底部外一貫ナダ。	*	*	灰白色	25	底部外面に遺着があるが、判読不明。	
129	256-01	* 鉢	*	* Q17 SK2	30.6	-	口縁部内外一貫ナダ。	*	*	灰白色	5		
130	256-03	* 甌	*	* Q17 SK3	10.5	-	口縁部内外一貫ナダ。天舟部外一貫ナダ。	密	*	紫灰色	17		
131	256-04	* * *	*	* Q17 SK2	16.8	-	口縁部内外一貫ナダ。天舟部外一貫ナダ。	良(1mmの砂粒少し含む)	*	紫灰色	13	内面磨滅一転用部か	
132	256-05	* * *	*	* Q16 SK2	16.8	-	口縁部内外一貫ナダ。天舟部外一貫ナダ。	良(1-2mmの砂粒含む)	*	灰白色	17		
133	256-02	* 須恵器	*	* Q16 SK2	13.8	-	口縁部内外一貫ナダ。底部内外一貫ナダ。	*	*	紫灰色	13		
134	251-09	灰胎陶器 甌	*	* Q17 SK2	~	1.3	-	内内一貫ナダ。内面灰胎層が剥かる。底部外一貫ナダ。張り付け高台。	*	*	灰白色	30	
135	227-07	* 甌	*	*	15.4	7.4	3.0	内内一貫ナダ。内面灰胎層が剥かる。底部外一貫ナダ。張り付け高台。	*	*	淡灰色	80	口縁外面に遺着
136	253-01	土師器 杯	SD1029	D5-9 SD2	102	14.6	2.5	口縁部内外一貫ナダ。底部内ナダ、外一貫ナダ。	*	*	淡黄褐色	17	
137	253-02	須恵器 甌	*	* * *	15.8	-	口縁部内外一貫ナダ。天舟部外一貫ナダ。	*	*	灰白色	10		
138	253-07	土師器 甌	SD1032	D5-9 SD2	122	13.8	3.9	口縁部内外一貫ナダ。底部外一貫ナダ。	*	*	黄褐色	17	口縁部内外一貫ナダ。
139	253-05	* 甌	SK1020	D5-9 SK4	101	15.2	-	口縁部内外一貫ナダ。底部内ナダ。	*	*	褐色	13	
140	253-04	* 杯	*	*	15.8	3.9	口縁部内外一貫ナダ。底部内ナダ、外一貫ナダ。	*	*	淡黄褐色	50		

第26表 遺物観察表・榑川北部(4)

No	産地No	品 種	産地	出上位置	法 量 (m)		調査方法の特長	胎 土	焼成	色 質	残存率 (%)	備 考	
					口径	容積							
141	203-06	黒色土器 杯	SK1030	12-9 CE. SK1	15.9	4.1	口縁部内外一線ナシ。底部外一線ナシ。内ヘラミダギ。	黒(1~2mmの砂粒含む)	良	にぶい褐色	10	黒色土器A類。口縁部内面に硝文残る	
142	231-03	七輪器 杯	SK1030	12-9 J91 SK1	12.4	2.9	口縁部内外一線ナシ。底部内一線ナシ。外一線ナシ。	*	*	淡褐色	30		
143	203-05	* * *	* * *	* * *	12.8	2.8	*	*	*	淡黄褐色	30		
144	221-07	* * *	* * *	* * *	12.8	3.0	*	*	*	淡褐色	30		
145	231-04	* * *	* * *	* * *	12.8	2.8	*	*	*	褐色	60		
146	203-04	* * *	* * *	* * *	12.8	3.3	*	*	*	淡褐色	60		
147	221-05	* * *	* * *	* * *	12.5	2.8	*	*	*	褐色	定形		
148	203-08	* * *	* * *	* * *	12.2	2.8	*	*	*	淡黄褐色	40		
149	203-03	* * *	* * *	* * *	12.2	2.9	*	*	*	淡褐色	60		
150	203-07	* * *	* * *	* * *	12.9	2.7	*	*	*	にぶい褐色	50		
151	203-06	* * *	* * *	* * *	12.4	2.9	*	*	*	淡黄褐色	40		
152	203-08	* * *	* * *	* * *	12.4	2.9	*	*	*	灰白色	40		
153	203-02	* * *	* * *	* * *	12.1	2.1	*	*	*	黄褐色	30		
154	221-06	* * *	* * *	* * *	12.6	2.9	*	*	*	淡褐色	ほぼ定形		
155	203-02	* * *	* * *	* * *	12.1	3.3	*	*	*	淡褐色	80		
156	203-05	* * *	* * *	* * *	14.5	2.8	*	*	*	淡褐色	30		
157	203-01	* 瓶	* * *	* * *	16.2	7.2	5.4	口縁部内外一線ナシ。底部内下層一底部内一ハムの線ナシ。底部外下層一底部外一ナシ。	*	*	淡褐色	70	
158	203-01	* * *	* * *	* * *	16.2	7.4	5.0	内一線ナシ。口縁部一線ナシ。底部外一線ナシ。	*	*	淡黄褐色	40	
159	203-04	* 皿	* * *	* * *	14.6	2.0	2.0	口縁部内外一線ナシ。底部内一線ナシ。外一線ナシ。	*	*	淡褐色	90	
160	203-08	* * *	* * *	* * *	14.2	2.0	*	*	*	淡褐色	60		
161	203-10	* * *	* * *	* * *	12.4	1.7	*	*	*	褐色	30		
162	203-05	* * *	* * *	* * *	17.5	10.7	6.4	口縁部一線ナシ。口縁部外一線ナシ。口縁部外一線ナシ。口縁部外一線ナシ。口縁部外一線ナシ。	*	*	淡褐色	ほぼ定形	口縁部内面に硝文残る
163	203-07	* 壺	* * *	* * *	12.8	-	-	口縁部内外一線ナシ。底部外一線ナシ。内一線ナシ。	*	*	淡黄褐色	30	
164	248-01	* * *	* * *	* * *	12.2	-	-	口縁部内外一線ナシ。底部外一線ナシ。内一線ナシ(基本1cm)	*	*	淡黄褐色	15	
165	248-04	* * *	* * *	* * *	21.3	-	-	口縁部内外一線ナシ。底部外一線ナシ。内一線ナシ。	*	*	灰白色	15	
166	248-03	* * *	* * *	* * *	22.4	-	-	口縁部内外一線ナシ。底部外一線ナシ。	*	*	にぶい褐色	15	
167	200-08	黒色土器 杯	* * *	* * *	15.4	4.3	4.3	口縁部内外一線ナシ。内一線ナシ。内ヘラミダギ。底部外一線ナシ。底部外一線ナシ。	*	*	にぶい褐色	90	黒色土器A類。口縁部内面に硝文残る
168	200-05	* * *	* * *	* * *	15.8	4.2	*	*	*	にぶい褐色	10	黒色土器A類。口縁部内面に硝文残る	
169	200-05	* 罎	* * *	* * *	14.8	9.0	4.3	口縁部内外一線ナシ。底部内一線ナシ。内ヘラミダギ。底部外一線ナシ。	*	*	淡黄褐色	15	黒色土器A類
170	200-05	* * *	* * *	* * *	15.4	7.9	3.6	口縁部内外一線ナシ。底部外一線ナシ。内ヘラミダギ。底部外一線ナシ。	*	*	淡黄褐色	25	黒色土器A類
171	200-07	* * *	* * *	* * *	15.8	8.2	4.7	*	*	淡黄褐色	10	黒色土器A類	
172	221-01	* * *	* * *	* * *	-	9.7	-	口縁部内外一線ナシ。内一線ナシ。内ヘラミダギ。底部外一線ナシ。	*	*	淡黄褐色	25	黒色土器A類。口縁部内面に硝文残る
173	200-04	* 皿	* * *	* * *	14.0	6.6	2.8	口縁部内外一線ナシ。底部外一線ナシ。内ヘラミダギ。底部外一線ナシ。	*	*	淡黄褐色	定形	黒色土器A類。口縁部内面に硝文残る
174	200-05	* * *	* * *	* * *	14.6	7.4	2.7	*	*	淡黄褐色	50	黒色土器A類。口縁部内面に硝文残る	
175	200-02	* 罎	* * *	* * *	11.4	6.4	6.4	口縁部内外一線ナシ。底部外一線ナシ。内ヘラミダギ。底部外一線ナシ。	*	*	淡黄褐色	30	黒色土器A類

第27表 遺物観察表・栢植川北部(5)



No	登録No	種 類	通称	粘土位置	規 模 (m)			調査方法の装置	粘土	硬 度	色 調	残存度 (%)	備 考	
					口径	底径	器高							
176	230-04	黒色土器 鉢	SK1003	25-9 SK1	P01	12.2	7.1	1) 胴部内外一線ナダ。体部-底部外一ヘラケズリの後ヘラミダキ。内一ヘラミダキ。	長(1~2cm)の形(土倉)	長	灰茶褐色	20	黒色土器A類	
177	248-01	〃	〃	〃	〃	17.2	—	1) 胴部内外一線ナダ。体部外一ヘラケズリの後ヘラミダキ。内一ヘラミダキ。	〃	〃	にぶい褐色	5	黒色土器A類	
178	231-02	〃	〃	〃	〃	—	13.6	1) 体部外一ヘラケズリの後ヘラミダキ。内一ヘラミダキ。底部内一ヘラケズリ。外一ナダ。	〃	〃	灰茶褐色	20	黒色土器A類	
179	胴器 甕	〃	〃	〃	〃	—	—	1) 体部内外一ナダキ。穴部のナダキ一線編文。	〃	〃	灰色。	—	—	
180	248-02	灰陶器 甕	〃	〃	〃	—	—	1) 口縁部内外。ロクロナダ。底部内-ロクロナダ。外-ロクロケズリ。3反張り付。	〃	〃	灰色	15	3反張り。内面に黒い釉	
181	200-05	土器 杯	SK1015	25-9 SK1	K21	13.0	2.5	1) 口縁部内外一線ナダ。底部外一ナダ。	〃	〃	淡黄褐色	17	—	
182	200-04	〃	〃	〃	〃	13.6	2.8	〃	〃	〃	淡黄褐色	13	—	
183	200-03	〃	〃	〃	〃	15.0	—	〃	〃	〃	淡黄褐色	20	—	
184	205-01	〃	〃	〃	〃	17.8	1.8	1) 口縁部内外一線ナダ。底部内一ナダ。外一ヘラケズリ。	〃	〃	淡黄褐色	17	—	
185	200-02	〃	〃	〃	〃	17.2	—	1) 口縁部内外一線ナダ。体部一線ナダのハケミ。外一線ナダのハケミの後下ヘラケズリ。	〃	〃	褐色	13	—	
186	201-05	土器 杯	SK1008	25-9 SK1	K21	11.5	2.3	1) 口縁部内外一線ナダ。底部内外一ナダ。	〃	〃	黄褐色	13	—	
187	201-04	〃	〃	〃	〃	N21	12.8	3.5	1) 口縁部内外一線ナダ。底部内一ナダ。外一ヘラケズリ。	〃	〃	褐色	10	—
188	200-08	〃	〃	〃	〃	K21	12.8	2.3	1) 口縁部内外一線ナダ。底部外一ナダ。	〃	〃	淡黄褐色	13	—
189	200-10	〃	〃	〃	〃	L21	12.5	2.3	〃	〃	淡黄褐色	25	—	
190	200-07	〃	〃	〃	〃	K21	15.0	2.6	〃	〃	淡黄褐色	13	—	
191	200-11	〃	〃	〃	〃	—	—	1) 穴外一ナダ。	〃	〃	淡黄褐色	—	—	
192	200-09	〃	〃	〃	〃	L21	14.8	1.5	1) 口縁部内外一線ナダ。底部外一ナダ。	〃	〃	にぶい褐色	13	—
193	200-06	〃	〃	〃	〃	K21	17.8	1.8	1) 口縁部内外一線ナダ。底部内外一ナダ。	〃	〃	淡黄褐色	25	—
194	201-03	〃	〃	〃	〃	14.2	—	1) 口縁部内外一線ナダ。底部内一ナダ。	〃	〃	淡黄褐色	13	—	
195	201-05	黒色土器 鉢	〃	〃	〃	18.8	—	1) 口縁部内外一線ナダの後ヘラミダキ。外一ヘラケズリの後ヘラミダキ。	〃	〃	淡黄褐色	17	黒色土器A類	
196	201-02	灰陶器 甕	〃	〃	〃	—	6.4	1) 底部内面-ロクロナダ。外-ロクロケズリ。張り付け高台。	〃	〃	灰白色	60	灰陶-粘毛織り	
197	201-01	灰陶器 甕	〃	〃	〃	40.0	—	1) 胴部内外-ロクロナダ。底部外一ナダの後ロクロナダ。外一ナダの後カキ。	〃	〃	灰白色	17	—	
198	254-06	土器 杯	SK1002	25-9 P01	P02	12.1	2.3	1) 口縁部内外一線ナダ。底部内一ナダ。外一筋ナダ。	〃	〃	淡褐色	20	—	
199	254-05	〃	〃	〃	〃	13.8	2.1	〃	〃	〃	淡褐色	20	—	
200	254-02	〃	〃	〃	〃	13.2	3.5	1) 口縁部内外-ロクロナダ。底部内-ロクロナダ。外-ロクロケズリの後ナダ。	〃	〃	灰白色	70	ロクロ成形土器	
201	254-01	〃	〃	〃	〃	15.0	4.3	1) 口縁部内外-ロクロナダ。底部内-ロクロナダ。外一ヘラケズリの後ナダ。張り付け高台。	〃	〃	褐色	40	ロクロ成形土器	
202	254-03	土器 鉢	〃	〃	〃	22.4	—	1) 内外一線ナダ(ロクロナダ)。	〃	〃	褐色	20	ロクロ成形土器小	
203	254-04	黒色土器 鉢	〃	〃	〃	18.0	5.8	1) 口縁部内外一線ナダ。内一ヘラミダキ。底部-体部外一ナダ。	〃	〃	にぶい褐色	13	口縁部底部編文	
204	252-08	土器 杯	SK1012	D6-5 SK1	F21	11.0	2.1	1) 口縁部内外一線ナダ。底部外一ナダ。	〃	〃	にぶい褐色	13	—	
205	252-07	〃	〃	〃	〃	G21	11.7	—	〃	〃	淡黄褐色	20	—	
206	252-10	〃	〃	〃	〃	F21	11.9	3.0	〃	〃	淡黄褐色	13	—	
207	252-08	〃	〃	〃	〃	12.5	2.9	〃	〃	〃	にぶい黄褐色	10	—	
208	252-11	〃	〃	〃	〃	G21	12.0	3.4	〃	〃	淡黄褐色	17	—	
209	257-01	〃	〃	〃	〃	G21	12.4	3.0	〃	〃	淡黄褐色	80	—	
210	230-02	〃	〃	〃	〃	F01	12.8	2.5	〃	〃	淡黄褐色	30	—	

第28表 遺物観察表・柘植川北部(6)

No	番号	器 種	遺 跡	計 量 (cm)			発 掘 法 の 特 長	土 質	地 色	残 存 率 (%)	備 考			
				口径	口径	高さ								
211	229-03	土師器 杯	SK102	D5-S SK1	121	13.0	2.5	口縁部内外一線ナデ。底部内一ナデ。外一線ナデ。張り付け高台。	灰(1-2)の砂状含む	黄	浅黄褐色	40		
212	229-05	* * *	* * *	* * *	133		2.4	*	*	黄	褐色	80		
213	229-01	* * *	* * *	* * *	13.0		2.0	*	*	黄	浅黄褐色	80		
214	229-12	* 皿	* * *	* * *	SK1	13.2	1.5	*	*	黄	にぶい褐色	17		
215	229-08	* * *	* * *	* * *	G22	16.0	1.6	*	*	黄	浅黄褐色	25		
216	229-04	* * *	* * *	* * *	* * *	15.4	1.5	*	*	黄	浅黄褐色	50		
217	229-02	* * *	* * *	* * *	121	16.2	1.3	*	*	黄	褐色	25		
218	229-01	* 瓶	* * *	* * *	16.4	8.0	5.1	口縁部内外、底部内一線ナデ。底部外一ヘラケズリ。張り付け高台。	*	黄	褐色	30		
219	229-06	* 壺	* * *	* * *	G22 SK2	14.2	-	口縁部内外一線ナデ。底部内一ナデ。外一縦方向のハケム。	*	黄	にぶい褐色	3		
220	229-06	* 壺	* * *	* * *	SK1	22.9	-	口縁部内外一線ナデ。底部内一横方向のハケム。外一縦方向のハケム。	*	黄	浅黄褐色	10		
221	229-07	* 壺	* * *	* * *	P21	21.2	-	口縁部内一方向のハケム。外一線ナデ。方形造かし。柄に浅突眼。	*	黄	にぶい褐色	13	裏の跡か	
222	229-02	灰色土器 杯	* * *	* * *	12.6	-	1	口縁部内外一線ナデ。底部外一ヘラケズリ。内蓋ヘラミナキ。	*	黄	にぶい黄褐色	13	灰色土器A類	
223	229-27	* 皿	* * *	* * *	13.0	5.8	2.5	口縁部内外一線ナデ。底部一底部外一ナデ。内蓋ヘラミナキ。張り付け高台。	*	黄	灰白色	30	灰色土器A類	
224	229-08	* 瓶	* * *	* * *	13.8	5.4	3.8	*	*	黄	にぶい黄褐色	25	灰色土器A類	
225	229-08	* * *	* * *	* * *	P22	12.2	6.4	6.1	*	黄	にぶい黄褐色	10/30 15/50	灰色土器A類	
226	229-01	* * *	* * *	* * *	-	7.5	-	底部内一線ナデ。外一ナデ。張り付け高台。	*	黄	にぶい黄褐色	50/70	灰色土器A類 内蓋ミナキなし	
227	229-03	* * *	* * *	* * *	G21	6.4	-	*	*	黄	にぶい褐色	50/100	灰色土器A類。ミガキなし	
228	229-04	* 鉢	* * *	* * *	-	7.8	-	底部内 ナデの後ヘラミナキ。外一線ナデ。	*	黄	-	10	灰色土器B類	
229	229-04	灰輪陶器 皿	* * *	* * *	12.6	14.6	-	口縁部内外 ロクロナデ。底部外一ロクロナデ。灰輪ツケ削り。	*	黄	灰白色	30		
230	229-05	* * *	* * *	* * *	P21	15.6	7.8	2.6	口縁部内外 ロクロナデ。灰輪ハケ削り。張り付け高台。	*	黄	灰白色	20	
231	229-06	* 瓦皿	* * *	* * *	10.7	4.7	2.0	口縁部内外一ロクロナデ。底部外一削り。	*	黄	灰白色	50		
232	229-12	土師器 杯	SD100	S26 SD1	12.9	-	-	口縁部内外 線ナデ。底部内一ナデ。外一線ナデ。	*	黄	黄褐色	10		
233	229-05	* * *	* * *	* * *	12.3	2.7	*	*	*	黄	にぶい褐色	40		
234	229-01	* * *	* * *	* * *	7.8	3.0	*	*	*	黄	浅黄褐色	70		
235	229-04	* * *	* * *	* * *	13.8	2.7	*	*	*	黄	灰白色	13		
236	229-06	* * *	* * *	* * *	14.0	3.2	*	*	*	黄	にぶい黄褐色	8		
237	229-03	* * *	* * *	* * *	15.8	3.5	*	*	*	黄	浅黄褐色	10		
238	229-02	* * *	* * *	* * *	13.3	3.0	3.0	口縁部内外一ロクロナデ。底部外一ヘラ削り。	*	黄	浅黄褐色	60	ロクロ成形土器群	
239	229-11	* 皿	* * *	* * *	11.5	12	12	口縁部内外一線ナデ。底部内一ナデ。外一線ナデ。	*	黄	浅黄褐色	10		
240	229-08	* * *	* * *	* * *	12.2	2.3	*	*	*	黄	にぶい褐色	30		
241	229-09	* * *	* * *	* * *	12.8	1.7	*	*	*	黄	にぶい褐色	5		
242	229-10	* * *	* * *	* * *	-	1.5	-	底部内外一ナデ。張り付け高台。	*	黄	浅黄褐色	50/60		
243	229-13	灰色土器 鉢	* * *	* * *	8.5	-	-	底部内 線ナデ。外一ナデ。張り付け高台。	*	黄	にぶい褐色	50/25	灰色土器A類	
244	229-14	* * *	* * *	* * *	-	9.0	-	底部内一ナデ。張り付け高台。	*	黄	褐色	50/25	灰色土器A類	
245	229-07	* * *	* * *	* * *	13.0	8.0	4.0	口縁部内外一線ナデ。底部内一線ナデ。外一ヘラミナキ。	*	黄	浅黄褐色	15	灰色土器A類	

第29表 遺物観察表・柘植川北部 (7)

No.	登録No.	器種	濃縮	出し容量	流量 (ml)		測定方法の簡便	胎土	焼成	色調	残存率 (%)	備考
					口径	器高						
267	267-15	黒色土器 筒	SC10E	10-10 SD1	516	138	□縁部内外一線ナシ。底部外ヘラズリ、内ヘラミダキ、短又一部残る。	良(1-2mmの砂粒含む)	良	—	8	黒色土器B類。
267	267-15	土器器 杯	SK107	10-9 SK3	016	107	□縁部内外一線ナシ。底部内ヘラミ、外一線オサズ。	*	*	褐色	30	
268	267-07	* * *	* * *	* * *	108	22	□縁部内外一線ナシ。底部内ヘラ、外一線オサズ。	*	*	浅黄褐色	40	
269	268-09	* * *	* * *	* * *	111	22	*	*	*	浅黄褐色	25	
270	268-06	* * *	* * *	* * *	114	23	*	*	*	灰白色	30	
271	264-01	* 筒	* * *	* * *	121	25	*	*	*	に濃い褐色	60	
272	263-06	* * *	* * *	* * *	118	29	*	*	*	浅黄色	先形	
273	263-05	* * *	* * *	* * *	122	33	*	*	*	淡褐色	25	
274	263-17	* * *	* * *	* * *	138	4.0	*	*	*	に濃い褐色	20	
275	263-05	* 皿	* * *	* * *	138	1.9	*	*	*	灰白色	15	
276	211-08	黒色土器 筒	* * *	* * *	144	8.0	□縁部内外一線ナシ。底部外ヘラ、張り付け高台。内底のミダキ不現。	良(1-2mmの砂粒含む)	*	褐色	70	黒色土器A類
277	263-04	* * *	* * *	* * *	154	7.8	□縁部内外一線ナシ。底部外ヘラ、張り付け高台。内ヘラミダキ	良(1-2mmの砂粒含む)	*	に濃い黄褐色	20	*
278	262-02	* * *	* * *	* * *	148	7.6	4.1	*	*	に濃い黄褐色	40	*
279	263-03	* * *	* * *	* * *	161	9.0	5.8	□縁部内外一線ナシ。底部外ヘラズリの内ヘラミダキ。張り付け高台。内ヘラミダキ。	*	浅黄褐色	□10 底面	*
280	263-03	* * *	* * *	* * *	238	13.8	7.5	□縁部内外一線ナシ。底部外ヘラ、内ヘラナシ。張り付け高台。内底ヘラミダキなし。	*	灰白色	□10 底面	*
281	225-12	土器器 皿	SU10E	25-10 SD1	T16	97	1.5	□縁部内外一線ナシ。底部内ヘラ、外一線オサズ。	*	に濃い褐色	15	
282	225-10	* * *	* * *	* * *	102	1.8	*	*	*	淡褐色	15	
283	225-11	* * *	* * *	* * *	128	1.8	*	*	*	に濃い褐色	15	
284	225-18	* 筒	* * *	* * *	122	2.2	*	*	*	浅黄褐色	25	
285	225-08	* * *	* * *	* * *	118	2.0	*	*	*	に濃い褐色	25	
286	225-14	黒色土器 杯	* * *	* * *	140	0	2.9	□縁部内外一線ナシ。底部内ヘラ、外一線オサズ。内底のミダキ不現。	*	淡褐色	20	黒色土器A類
287	225-15	* 筒	* * *	* * *	—	6.0	—	底部内ヘラ、外一線オサズ。内ヘラミダキ。張り付け高台。	*	褐色	30	* 短又一部残る
288	225-13	* * *	* * *	* * *	153	8.0	4.8	□縁部内外一線ナシ。底部外ヘラズリ。底部内外ヘラ、内底ヘラミダキ。張り付け高台	*	に濃い黄褐色	20	*
289	223-03	土器器 皿	SK107	15-9 SK1	39	11.0	1.7	□縁部内外一線ナシ。底部内ヘラ、外一線オサズ。	*	褐色	ほぼ先形	
270	223-05	* 杯	* * *	* * *	103	1.8	*	*	*	褐色	50	
271	223-07	* * *	* * *	* * *	108	2.0	*	*	*	に濃い褐色	25	
272	223-04	* * *	* * *	* * *	112	2.2	*	*	*	に濃い褐色	75	
273	223-06	* * *	* * *	* * *	112	2.3	*	*	*	に濃い褐色	50	
274	223-02	* * *	* * *	* * *	115	1.9	*	*	*	褐色	ほぼ先形	
275	223-02	* * *	* * *	* * *	115	1.9	*	*	*	褐色	80	
276	223-1	* * *	* * *	* * *	119	1.8	*	*	*	褐色	20	
277	223-09	* 筒	* * *	* * *	120	2.3	*	*	*	に濃い褐色	15	
278	223-13	* 杯	* * *	* * *	124	2.3	*	*	*	淡褐色	25	
279	225-14	* * *	* * *	* * *	134	2.8	*	*	*	浅黄褐色	25	
280	223-12	* * *	* * *	* * *	142	2.8	*	*	*	浅黄褐色	30	

第30表 遺物観察表・柘植川北部(8)

No.	登録No.	種 類	遺構	出土位置	計 量 (cm)			属 意 注 意 の 特 徴	胎 土	焼 成 色 調	残存率 (%)	備 考	
					口徑	高さ	器高						
281	204-C2	土師器 皿	SK1007	D5-9 J2 SK1	15.6	1.8	1.1	口縁部内外一線ナダ。底部内一ナダ。外一線オサエ。	黄(1~2mmの砂粒含む)	黄	淡褐色	50	
282	253-17	黒色土器 鉢	*	*	14.0	7.0	4.3	口縁部内外一線ナダ。底部内一ナダ。外一線オサエ。内面のミガキ不明。張り付け高台。	*	*	にぶい褐色	25	黒色土器A類
283	253-19	*	*	*	14.0	8.4	4.2	口縁部内外一線ナダ。底部内一ナダ。外一線オサエ。内面のミガキなし。張り付け高台。	*	*	にぶい褐色	40	*
284	253-18	* 皿	*	*	15.2	-	-	口縁部内外一線ナダ。底部内一ナダ。外一線オサエ。	*	*	にぶい褐色	30	*
285	253-20	* 甕	*	*	13.4	-	-	口縁部内外一線ナダ。底部内一線ナダ。外一線オサエ。	*	*	にぶい褐色	30	*
286	254-01	* 鉢	*	*	19.4	13.6	1.0	口縁部内外一線ナダ。内一ヘウミガキ。底部外一ヘウミガキ。内一線ナダの後ヘウミガキ。	*	*	にぶい褐色	70	*
287	264-01	土師器 鉢	SD1000	D5-11 Y2 SD1	10.6	2.5	0.5	口縁部内外一線ナダ。底部外一線ナダ。	*	*	淡黄褐色	13	
288	264-02	*	*	*	10.8	-	-	*	*	*	黄褐色	11	
289	264-03	* 皿	*	*	8.6	-	-	口縁部内外一線ナダ。底部外一線オサエ。	*	*	褐色	13	
290	264-05	黒色土器 鉢	*	*	13.8	-	-	口縁部内外一線ナダ。底部外一線ナダ。内面ヘウミガキ。	*	*	褐色	13	黒色土器A類
291	264-04	灰釉陶器 瓶	*	*	-	11.6	-	底部内外一ロクロナダ。底部外一線張り。	*	*	青灰色	底B	
292	243-C2	土師器 杯	豊地土	D5-8 O1E SK1	10.0	2.6	0.5	口縁部内外一線ナダ。底部内一線ナダ。外一線オサエ。	*	*	にぶい褐色	変形	
293	243-C3	*	*	*	10.2	2.3	*	*	*	淡褐色	変形		
294	243-06	*	*	*	10.6	2.5	*	*	*	にぶい褐色	変形		
295	243-11	*	*	*	10.6	2.5	*	*	*	にぶい褐色	80		
296	243-13	*	*	*	10.6	2.1	*	*	*	にぶい褐色	60		
297	243-15	*	*	*	10.7	2.3	*	*	*	褐色	70		
298	243-16	*	*	*	10.8	1.8	*	*	*	淡褐色	変形		
299	244-02	*	*	*	13.8	2.1	0.5	口縁部内外一線ナダ。底部内一ナダ。外一線オサエ。	*	*	にぶい褐色	30	
300	243-04	*	*	*	11.2	2.4	0.5	口縁部内外一線ナダ。底部内一線ナダ。外一線オサエ。	*	*	淡褐色	変形	
301	243-12	*	*	*	11.2	2.5	*	*	*	黄(1~2mmの砂粒多く含む)	にぶい褐色	80	
302	244-02	*	*	*	12.8	6.0	3.3	口縁部内外一線ナダ。底部内一ナダ。外一線オサエ。張り付け高台。	黄(1~2mmの砂粒含む)	*	淡黄褐色	25	
303	243-14	*	*	*	9.7	2.1	0.5	口縁部内外一線ナダ。底部内一ナダ。外一線オサエ。	*	*	にぶい褐色	30	
304	243-09	*	*	*	9.8	2.4	0.5	口縁部内外一線ナダ。底部内一線ナダ。外一線オサエ。	*	*	灰白色	変形	
305	243-12	*	*	*	10.5	2.5	*	*	*	淡褐色	50		
306	243-07	*	*	*	9.3	1.9	*	*	*	にぶい黄褐色	変形		
307	243-06	*	*	*	10.4	2.3	*	*	*	にぶい褐色	変形		
308	244-06	* 皿	*	*	8.4	1.1	0.5	口縁部内外一線ナダ。底部内一ナダ。外一線オサエ。	*	*	淡黄褐色	30	
309	243-01	*	*	*	8.4	1.3	0.5	口縁部内外一ロクロナダ。底部内一ナダ。外一ロクロナダ。	*	*	にぶい褐色	変形	ロクロ成形土師器
310	244-07	*	*	*	9.0	1.2	0.5	口縁部内外一線ナダ。底部内一ナダ。外一線オサエ。	*	*	にぶい黄褐色	30	
311	244-04	*	*	*	10.5	1.2	*	*	*	にぶい黄褐色	25		
312	244-05	*	*	*	10.8	1.6	*	*	*	にぶい褐色	25		
313	244-08	*	*	*	11.6	-	-	口縁部内外一線ナダ。底部内一ナダ。外一線オサエ。張り付け高台。	*	*	褐色	40	
314	241-C1	黒色土器 鉢	*	*	13.4	8.0	4.2	口縁部内外一線ナダ。底部内一ナダ。張り付け高台。	*	*	淡黄褐色	60	黒色土器A類(ミガキなし)
315	241-02	*	*	*	13.8	5.8	4.7	*	*	にぶい黄褐色	20	*ミガキ不明	

第31表 遺物観察表・柘植川北部(9)

No.	登録No.	形 状	通 路	取土位置	注 量 (m)			調査注記の形数	取 土	成 色	調査	残存率 (%)	備 考
					口徑	底径	容積						
316	343-04	黑色土器 筒	埋戻し	D5.9 N.16 SK1	14.4	7.8	4.7	口縁部内外一様ナダ。底部内外一ナダ。張り付け高付。	良(1-2mmの粒状含む)	良	にぶい棕色	40	褐色土器A類 内面ヘラミダキ不明
317	343-01	* * *	* * *	* O16 SK1	14.4	7.8	3.1	*	*	*	淡褐色	60	* 内面ヘラミダキ不明
318	343-01	* * *	* * *	* *	16.1	6.6	6.3	*	*	*	灰白色	30	口縁10 瓦葺 内面ヘラミダキ不明
319	341-03	* * *	* * *	* *	13.2	7.0	3.8	*	*	*	にぶい黄色	30	* 内面ヘラミダキ
320	341-05	* * *	* * *	* *	14.7	7.8	4.0	*	*	*	にぶい黄褐色	30	* 内面粗いヘラミダキ
321	341-04	* * *	* * *	* *	13.6	6.3	5.1	*	*	*	にぶい黄色	30	* 内面粗いヘラミダキ
322	341-05	* * *	* * *	* *	14.6	7.0	4.9	*	*	*	にぶい黄褐色	60	* 口縁内面粗円状に見くミダキ
323	343-02	* * *	* * *	* *	15.3	-	-	口縁部内外一様ナダ。底部内外一ナダ。張り付け高付。	*	*	淡黄色	40	* 内面粗いヘラミダキ
324	341-07	* * *	* * *	* *	16.8	-	-	口縁部内外一様ナダ。底部内外一ナダ。張り付け高付。	*	*	淡黄色	30	* 内面粗いヘラミダキ
325	344-09	* 壺	* * *	* *	13.2	-	-	口縁部内外一様ナダ。底部内外一ナダ。	*	*	にぶい黄色	15	*
326	326-15	土器器 杯	SK1064	D5.4 P18 SK1	7.9	2.3	0.9	口縁部内外一様ナダ。底部内一ナダ。外一指オサエ。	*	*	灰白色	変形	
327	326-02	* * *	* * *	* * 337	8.6	1.9	0.7	*	*	*	にぶい黄褐色	40	
328	326-08	* * *	* * *	* * *	9.3	2.6	1.0	口縁部内外一様ナダ。底部内一指オサエ。	*	*	にぶい黄褐色	75	
329	326-01	* * *	* * *	* * 716	9.4	1.6	0.6	口縁部内外一様ナダ。底部内一ナダ。外一指オサエ。	*	*	にぶい黄色	40	
330	326-10	* * *	* * *	* * 717	10.6	2.3	0.9	口縁部内外一様ナダ。底部内一指オサエ。	*	*	黄色	変形	
331	326-13	* * *	* * *	* * 126	10.2	2.2	0.8	口縁部内外一様ナダ。底部内一指オサエ。	*	*	にぶい黄色	70	
332	326-11	* * *	* * *	* * 127	10.4	2.2	0.8	*	*	*	にぶい黄色	90	
333	326-12	* * *	* * *	* * 128	10.4	2.2	0.8	*	*	*	黄色	80	
334	325-07	* * *	* * *	* * *	10.8	2.2	0.8	口縁部内外一様ナダ。底部内一ナダ。外一指オサエ。	*	*	浅灰棕色	60	
335	325-05	* * *	* * *	* * 127	11.2	2.2	0.8	口縁部内外一様ナダ。底部内一指ナダ。外一指オサエ。	*	*	浅黄褐色	70	
336	326-09	* 壺	* * *	* * 716	7.8	1.2	0.4	口縁部内外一様ナダ。底部内一ナダ。外一指オサエ。	*	*	にぶい黄褐色	40	
337	326-03	* * *	* * *	* * 716	10.2	1.5	0.5	*	*	*	黄色	60	
338	326-06	* * *	* * *	* * 717	11.2	1.6	0.5	口縁部内外一様ナダ。底部内一指ナダ。外一指オサエ。	*	*	黄色	80	
339	326-05	* 杯	* * *	* * P16/P7	11.4	2.0	0.7	*	*	*	にぶい黄褐色	50	
340	326-08	* * *	* * *	* * 126	11.4	2.1	0.8	口縁部内外一様ナダ。底部内一ナダ。外一指オサエ。	*	*	黄色	40	
341	329-06	* 壺	* * *	* * 137	7.9	1.5	0.5	*	*	*	浅黄褐色	16	
342	329-07	* * *	* * *	* * 717	8.6	0.9	0.3	*	*	*	にぶい黄色	20	
343	329-09	* * *	* * *	* * 716	9.4	1.2	0.4	*	*	*	浅黄褐色	16	
344	329-06	* * *	* * *	* * *	10.2	1.2	0.4	*	*	*	にぶい黄色	13	
345	326-14	* * *	* * *	* * *	8.6	5.2	2.3	口縁部内外一様ナダ。底部内一ナダ。外一指オサエ。張り付け高付。	*	*	にぶい黄色	60	
346	326-04	* 杯	* * *	* * 127	10.8	2.4	1.0	口縁部内外一様ナダ。底部内一ナダ。外一指オサエ。	*	*	黄褐色	60	口縁部土層部 口縁部に浅線ミダキ
347	329-10	* 壺	* * *	* * 716	-	3.2	-	口縁部内外一様ナダ。底部内一ナダ。外一指オサエ。	*	*	淡黄色	底30	口縁部土層部
348	329-02	* 杯	* * *	* * *	14.0	-	-	口縁部内外一様ナダ。底部内一ナダ。外一指オサエ。	*	*	灰白色	25	
349	329-05	* * *	* * *	* * *	15.0	3.4	1.5	*	*	*	浅黄褐色	10	
350	329-04	* * *	* * *	* * *	15.2	-	-	*	*	*	浅黄褐色	10	

第32表 遺物観察表・布施川北部(10)

No.	番号No.	器 種	遺構	出土位置	法 量 (cm)		調査技法の特長	土 質	地 成	色 調	残存率 (%)	備 考	
					口徑	器高							
351	228-01	土師器 鉢	SK1084	T26-6 P16 SK1	24.2		口縁部内外一線ナデ。底部内一線ナデ。外一線ナデ。	黒(1)~2mmの砂粒含む	黄	浅黄褐色	13		
352	228-11	* * *	* * *	* P17	24.8	-	*	*	*	褐色	5		
353	228-3	土師器 鉢	* * *	* P18	-	7.5	底部~底部内一線ナデ。外一線ナデ。張り付け高台。	*	*	黄褐色	13	ミガネ不明	
354	228-06	黒色土師 陶	* * *	* B21	13.4	7.6	4.8	口縁部内外一線ナデ。底部~底部内一線ナデ。外一線ナデ。張り付け高台。内面ミガネなし。	*	*	に濃い褐色	40	黒色土師A類
355	228-01	* * *	* * *	* * *	14.8	7.3	5.2	口縁部内外一線ナデ。底部~底部内一線ナデ。張り付け高台。内一ヘラミガネ。	*	*	に濃い褐色	50	*
356	228-04	* * *	* * *	* * *	5.9	6.4	4.3	*	*	*	浅黄褐色	20	黒色土師A類か。内面の黒色化はなし。
357	228-02	* * *	* * *	* B16	17.8	-	-	口縁部内外一線ナデ。底部外一ヘラミガネ。底部外一線ナデ。張り付け高台。内一ヘラミガネ。	*	*	に濃い褐色	15	黒色土師A類 口縁内黒粒が凹みに産く
358	228-03	* * *	* * *	* * *	15.8	7.3	6.3	口縁部内外一線ナデ。底部~底部内一線ナデ。外一線ナデ。張り付け高台。内面ミガネなし。	*	*	灰白色	30	*
359	228-06	土師器 皿	SK1086	T26-8 J16 SK1	8.8		1.0	口縁部内外一線ナデ。底部内一線ナデ。外一線ナデ。	*	*	に濃い黄褐色	5	
360	228-08	* * *	* * *	* * *	9.5	-	-	*	*	浅黄褐色	10		
361	228-05	* * *	* * *	* * *	9.8		1.1	*	*	に濃い黄褐色	15		
362	228-04	* * *	* * *	* * *	10.9		1.2	*	*	灰白色	20		
363	228-02	* * *	* * *	* * *	9.8	3.0	1.7	口縁部内外一線ナデ。底部内一線ナデ。外一線ナデ。張り付け高台。	*	*	に濃い黄褐色	15	
364	228-03	* * *	* * *	* * *	9.8	3.2	2.1	口縁部内外一線ナデ。底部外一ヘラミガネ。	*	*	黄褐色	15	ロクロ成形土師器
365	228-01	* * 杯	* * *	* * *	13.2		2.6	口縁部内外一線ナデ。底部内一線ナデ。外一線ナデ。	*	*	浅黄褐色	60	
366	228-07	* * 皿	* * *	* * *	13.8	-	-	*	*	浅黄褐色	8		
367	228-04	黒色土師 陶	* * *	* * *	-	-	-	底部内一線ナデ。外一線ナデ。張り付け高台割縁。	*	*	灰青色	25	黒色土師A類。内面に割縁
368	228-03	土師器 皿	SK1085	T26-8 SD1 L17	9.4		1.2	口縁部内外一線ナデ。底部内一線ナデ。外一線ナデ。	*	*	に濃い黄褐色	13	
369	228-11	* * *	* * *	* K17	9.6		1.2	口縁部内外一線ナデ。底部内一線ナデ。外一線ナデ。	*	*	に濃い黄褐色	25	
370	228-07	* * *	* * *	* SD1	9.2		1.1	*	*	*	40		
371	228-12	* * *	* * *	* SD1	* * *	7.9	0.8	口縁部内外一線ナデ。底部外一ヘラミガネ。	*	*	浅黄褐色	13	ロクロ成形土師器
372	228-08	* * *	* * *	* K18	8.4		1.5	口縁部内外一線ナデ。底部外一ヘラミガネ。	*	*	黄褐色	70	ロクロ成形土師器
373	228-02	* * *	* * *	* L17	9.4		1.5	口縁部内外一線ナデ。底部外一ヘラミガネ。	*	*	灰白色	13	ロクロ成形土師器
374	228-10	* * *	* * *	* K17	-	4.3	-	口縁部内外一線ナデ。底部外一線ナデ。	*	*	褐色	産100	ロクロ成形土師器
375	228-04	* * 杯	* * *	* L17	15.2	-	-	口縁部内外一線ナデ。底部内一線ナデ。外一線ナデ。	*	*	に濃い褐色	10	
376	228-01	* * *	* * *	* SD1	* * *	5.6	-	*	*	浅黄褐色	17		
377	228-09	* * 鉢	* * *	* K17	-	7.2	-	内外一線ナデ。張り付け高台。	*	*	灰白色	30	
378	228-06	黒色土師 *	* * *	* L17	22.2	-	-	口縁部内外一線ナデ。底部内一線ナデ。外一線ナデ。	*	*	に濃い褐色	13	黒色土師A類 内面ミガネなし
379	228-09	土師器 瓦	SK1084	* G22 SK2	8.4		1.2	口縁部内外一線ナデ。底部外一線ナデ。外一線ナデ。	*	*	浅黄褐色	17	
380	228-09	* * *	* * *	* G22 SK2	9.8		1.5	口縁部内外一線ナデ。底部外一ヘラミガネ。	*	*	浅黄褐色	定形	ロクロ成形土師器
381	227-03	黒色土師 陶	* * *	* G22 SK2/V15	15.2	7.0	5.2	口縁部内外一線ナデ。底部内一線ナデ。外一線ナデ。	*	*	に濃い褐色	80	黒色土師A類 内面ミガネなし
382	227-02	* * *	* * *	* G22 SK3	15.4	7.2	6.8	*	*	浅黄褐色	60	黒色土師A類 内面ミガネ不明	
383	228-08	土師器 鉢	SK1083	* G21 SK3	16.6	-	-	内外一線ナデ。	*	*	浅黄褐色	13	
384	229-01	* * 陶	SK1070	T26-8 L17 J19	11.8		3.5	口縁部内外一線ナデ。外一ヘラミガネ。底部内一線ナデ。外一線ナデ。	*	*	浅褐色	定形	
385	229-03	* * *	* * *	* * *	11.9		3.1	口縁部内外一線ナデ。底部内一線ナデ。外一線ナデ。	*	*	浅黄褐色	定形	

第33表 遺物観察表・柘植川北部(11)

No	登録No	器 種	遺構	出土位置	計 量 (m)		調査技法の概要	粘土	焼成	色 調	残存率 (%)	備 考	
					口径	底径							
306	219-06	土師器 甗	SB4070	D8-8 P19	L17	12.0	3.4	口縁部内外一線ナデ、外ヘラミダキ。底部内ナデ、外一線ナデ。	*	灰褐色	完形		
307	219-06	* * *	*	*	12.2	3.5	口縁部内外一線ナデ。底部内ナデ、外一線ナデ。	*	*	淡褐色	完形		
308	219-06	* * *	*	*	12.2	3.5	*	*	*	灰黄褐色	片形		
309	219-02	* * *	*	*	12.4	3.5	*	*	*	淡褐色	片形		
310	220-01	* * *	*	D8-8 M17 P14	11.1	3.7	口縁部内外一線ナデ、外ヘラミダキ。底部内ナデ・底縁部外、外一線ナデ。	*	*	褐色	70		
311	220-02	* * *	*	*	14.0	3.2	口縁部内外一線ナデ。底部内ナデ、外一線ナデ。	*	*	淡黄褐色	完形		
312	220-02	* 皿 *	*	D8-8 M17 P15	13.6	1.5	*	*	*	淡褐色	30	底部内底縁部外縁部が、水が付着しているため不明	
313	223-01	* 杯	SB1015	D5-5 J21	14.0	2.7	*	*	*	淡黄褐色	50		
314	223-02	* 甗 *	*	D5-5 J21	16.4	-	口縁部内外一線ナデ、外ヘラミダキの後ヘラミダキ。	*	*	淡黄色	15		
315	223-06	* 杯	SB1004	D4-4 J18	12.8	2.2	口縁部内外一線ナデ。底部内ナデ、外一線ナデ。	*	*	褐色	10		
316	223-03	* 甗 *	*	D4-4 P18	12.4	3.1	*	*	*	淡褐色	25		
317	223-05	灰土器 杯	*	D4-4 J18 P12	12.0	-	口縁部内外一線ナデ。外ヘラミダキ。底縁部外一線ナデ。	*	*	褐色	15		
318	223-02	土師器 甗	SB1005	D4-4 P12	11.8	2.2	口縁部内外一線ナデ。底部外ヘラミダキ。	*	*	淡黄褐色	25		
319	223-08	* * *	*	D4-4 P18	12.4	2.8	口縁部内外一線ナデ。底部内ナデ、外一線ナデ。	*	*	にぶい褐色	40		
402	223-07	* * *	*	*	13.0	3.2	*	*	*	にぶい褐色	ほぼ完形		
403	223-09	黒色土器 甗	*	D4-4 P18 P11	15.2	8.0	4.8	口縁部内外一線ナデ。底部内ナデ、外ヘラミダキ。張り付け高台。	*	*	淡黄褐色	50	黒色土器入庫
404	223-01	灰土器 杯	*	D4-4 P18 P11	11.6	3.7	3.7	口縁部内外一線ナデ。底部内一線ナデ、外ヘラミダキ。	*	*	褐色	ほぼ完形	底部外底縁部を欠る
405	216-10	土師器 皿	SB4071	D4-4 P15	12.7	8.2	1.6	口縁部内外一線ナデ。底部内ナデ、外一線ナデ。	*	*	にぶい褐色	70	
404	219-09	* * *	*	*	8.4	1.4	*	*	*	にぶい褐色	30		
405	219-11	* 杯 *	*	D4-4 J17	10.7	2.1	2.1	口縁部内外一線ナデ。底部内一線ナデ、外一線ナデ。	*	*	にぶい黄褐色	完形	口縁部に注線1ヶ所付着
406	219-07	* * *	*	*	9.8	3.2	3.2	口縁部内外一線ナデ。底部内ナデ、外一線ナデ。	*	*	にぶい褐色	25	
407	219-06	* 甗 *	*	D4-8 L17 P16	14.2	6.4	4.4	口縁部内外一線ナデ。底部内ナデ、外一線ナデ。張り付け高台。	*	*	にぶい褐色	20	
408	221-04	* 杯	J1074	D6-9 P19	10.6	8.7	1.8	口縁部内外一線ナデ。底部内一線ナデ、外一線ナデ。	*	*	にぶい黄褐色	完形	
409	221-05	* * *	*	*	10.1	1.9	*	*	*	淡黄褐色	30		
410	221-03	* * *	*	*	10.6	2.0	2.0	口縁部内外一線ナデ。底部内ナデ、外一線ナデ。	*	*	にぶい黄褐色	完形	
411	221-01	黒色土器 甗	* * *	*	10.2	6.1	4.1	口縁部内外一線ナデ。底部内一線ナデ。張り付け高台。内ヘラミダキ。	*	*	褐色	完形	黒色土器入庫
412	221-02	* * *	*	*	10.0	5.2	3.7	*	*	にぶい黄褐色	40	*	
413	221-08	土師器 甗	P1078	D6-9 P19	10.6	6.6	3.7	口縁部内外一線ナデ。底部内ナデ、外ヘラミダキの地口ナデ。張り付け高台。	*	*	にぶい黄褐色	60	口コ成形土師器
414	221-07	* * *	*	*	14.7	6.9	4.7	口縁部内外一線ナデ。底部内ナデ、外一線ナデ。張り付け高台。	*	*	淡黄褐色	80	
415	224-01	* 杯	P1026	D6-9 P12	11.0	2.1	2.1	口縁部内外一線ナデ。底部内ナデ、外一線ナデ。	*	*	淡黄褐色	完形	
416	224-04	黒色土器 甗	* * *	*	10.0	8.8	4.6	口縁部内外一線ナデ。底部内一線ナデ、外一線ナデ。張り付け高台。内面ヘラミダキなし。	*	*	にぶい褐色	50	黒色土器入庫
417	224-05	* * *	*	*	14.7	7.8	4.2	口縁部内外一線ナデ。底部内一線ナデ。張り付け高台。内ヘラミダキ。	*	*	淡黄褐色	完形	黒色土器入庫
418	224-02	* 甗 *	*	*	12.4	-	口縁部内外一線ナデ。底部内一線ナデ、外一線ナデ。	*	*	褐色	30	黒色土器入庫	
419	223-03	土師器 皿	SB1006	D4-4 P14	14.8	7.9	1.5	口縁部内外一線ナデ。底部内ナデ、外一線ナデ。	*	*	にぶい褐色	50	
420	223-12	* * *	*	D4-6 P18	8.0	1.8	*	*	*	淡黄褐色	25		

第34表 遺物観察表・石橋川北部(12)

No.	図録No.	器 種	遺物	出土位置	尺 量 (cm)			調査技法の概要	胎 土	焼 成	色 調	残存率 (%)	備 考
					口徑	底径	器高						
421	221-12	土罐器 Ⅱ	SR100	D6-6 P13	1.8	9.0	1.6	口縁部内外一貫ナガ。底部内一ナガ、外一箇オサエ。	黒(1~2mmの砂粒含む)	黒	褐色	ほぼ完了	
422	221-11	* * *	* * *	D6-6 M8 P17	10.0		1.5	口縁部内外一貫ナガ。底部内一貫ナガ、外一箇オサエ。	*	*	淡黄褐色	70	
423	223-05	* * *	* * *	D6-6 P13	1.8	16.8	1.8	*	*	*	褐色	30	
424	223-04	* * *	* * *	D6-5 K8 P12	10.4		1.8	口縁部内外一貫ナガ。底部内一ナガ、外一箇オサエ。	*	*	淡褐色	25	
425	221-13	* * *	* * *	D6-6 N9 P11	10.2	4.4	2.5	口縁部内外一貫ナガ。底部内一ナガ、外一箇オサエ。張り付け高直。	*	*	にじい黄色	50	
426	221-10	* * *	* * *	D6-5 K8 P12	9.0		1.1	口縁部内外一貫ナガ。底部内一ナガ、外一箇オサエ。	*	*	にじい黄色	30	
427	223-07	* * *	* * *	D6-6 J8 H11	9.6		1.1	*	*	*	淡黄褐色	30	
428	223-14	* * *	* * *	D6-6 L8 P11	8.8		1.1	口縁部内外一貫内一クロコナガ。底部内一ヘタ弱ナ。	*	*	淡黄褐色	30	クロコ成形土器群
429	221-09	* * *	* * *	D6-5 K8 P10	9.1		1.0	*	*	*	淡黄褐色	30	*
430	223-08	* 陶 *	* * *	D6-6 M8 P11	9.1		2.6	底部内一クロコナガ、外一クロコナガ。	*	*	にじい黄色	底部50	*
431	223-11	黒色土器 陶	* * *	*	4.5		4.5	底部内一ナガ。張り付け高直。ミダキ不明。	*	*	黒色	底部50	黒色土器10類
432	223-12	土罐器 杯	* * *	D6-6 L8 P13	13.8		2.4	口縁部内外一貫ナガ。底部内一ナガ、外一箇オサエ。	*	*	にじい黄色	10	
433	223-03	* * *	* * *	D6-5 K8 P12	14.8		-	*	*	*	淡黄褐色	18	
434	223-06	* * *	* * *	D6-6 L8 P11	15.0		2.1	*	*	*	淡黄褐色	10	
438	221-08	* * *	* * *	D6-5 K8 P11	16.4		2.8	*	*	*	にじい黄色	25	
439	223-13	* * *	* * *	D6-6 N8 P11	15.4		-	口縁部内外一貫ナガ。底部内一ナガ、外一箇オサエ。張り付け高直。	*	*	褐色	18	
437	221-07	褐色部 門扉 礎	* * *	D6-6 礎土	-	28.8	-	内外一クロコナガ。東方形造かし13分所。透かし幅不明。	*	*	灰色	30	扉部。礎部欠
438	221-02	* * *	SR1206	D6-9 N21 SK3	18.8	21.0	7.9	内外一クロコナガ。底部内一自然融け付。東方形造かし14分所。	*	*	灰色	30	
				同一器体				D6-9 N21 (扉部) 包含層					
439	222-03	* * *	* * *	D6-8 J-2 包含層	-	-	-	内外一クロコナガ。透かしは不明。	*	*	灰色		扉部欠。使用痕残る
440	222-01	* * *	* * *	D6-9 J-4 包含層	2.8	(23)	(9)	内外一クロコナガ。底部外に自然融け付。東方形造かし19分所。	*	*	明黄褐色		扉部。D6-5 J-8と層合
				同一器体				D6-5 J-8 (扉部) 包含層	D6-6 N-8 (扉部) 包含層	D6-6 (扉部) 跡土			
441	221-03	* * *	* * *	D6-8 J16 SK3	-	27.6	-	内外一クロコナガ。透かし幅不明。	黒(1~2mmの砂粒含む)	黒	黄灰色		扉部
				同一器体				D6-8 N: (扉部) 包含層	D6-6 J-15 (扉部) 包含層	D6-5 J-7 (扉部) SK1 (SR1006)			
442	221-06	* * *	* * *	D6-7 包含層	-	-	-	内外一クロコナガ。内面一自然融け付。十字形透かし8分所。	黒(1~2mmの砂粒含む)	黒	明黄褐色		
443	221-05	* * *	* * *	D6-4 G8 包含層	-	17.4	-	内外一クロコナガ。内面一自然融け付。東方形造かし39分所。	*	*	明黄褐色		使用痕残る
444	221-04	* * *	* * *	D6-8 J16 包含層	14.2	-	-	内外一クロコナガ。内面 自然融け付。透かしは不明。	*	*	明黄褐色		使用痕残る
445	223-05	* * *	* * *	D6-8 J16 包含層	-	15.7	-	内外一クロコナガ。東方形造かし20分所。	*	*	明黄褐色	5	
				同一器体				D6-8 J18 (扉部) 包含層	D6-5 K-9 (扉部) P11				
446	222-02	* * *	* * *	D6-9 P16 包含層	21.9	-	-	内外一クロコナガ。方角透かし22分所。	*	*	黄灰色		
				同一器体				D6-5 J7 (扉部) SK1 (SR1006)					
447	221-01	* * *	* * *	D6-6 M8 P17	20.3	27.2	(10)	内外一クロコナガ。東方形造かし20分所。	*	*	淡黄褐色		使用痕残る
				同一器体				D6-9 S21 (扉部) SK1 (SR1012)	D6-8S-17 (扉部) SK3 (SR1084)	D6-9 G16 (扉部) 包含層	D6-6 S15 (扉部) 包含層	D6-6 S15 (扉部) P12	
448	223-03	* * *	* * *	D6-5 J8 包含層	-	24.0	-	内外一クロコナガ。透かし不明。	黒(1~2mmの砂粒含む)	黒	明黄褐色	5	扉部
-	-	* * *	* * *	D6-5 G21 包含層	-	-	-		*	*			扉部小片

第35表 遺物観察表・柘植川北部 (13)



No	登録No	器 種	遺構	出土位置	法 量 (m)		調査技術の特色	出土	焼成	色 調	残存率 (%)	備 考
					口徑	高さ						
-	-	磁器器 片断		D6-6 M8 P12	-	-						黒土器小片
-	-	* *	SI0203	D8-2 I SD:	-	-						*
49	302-2	茶色土器 菓子鉢	SK1038	D9-9 I91 SK1			内側ヘラミダギ。内口縁の脚を張り付け、内面側に比喩1条。	*	*			茶色土器3脚
50	304-01	* *		D9-9 M11 包含層			内ヘラミダギ。内ヘラミダギの縁ヘラミダギ。内面に「日月状の連続残線。弓状の脚を張り付け。	*	*			茶色土器3脚
45	345-04	* *	SK1086	D6-5 J7 SK1			内ヘラミダギ。底部外ヘラミダギの縁ヘラミダギ。	*	*			茶色土器3脚
45	353-01	* *	SK1033	D8-9 M21 SK1			外ヘラミダギ。腹縁の取戻りした脚を張り付け。内面に「花綱1条。	*	*			茶色土器3脚。右脚部
453	303-04	* *	*	*			内側ヘラミダギ。内面に比喩1条。腹部の脚縁した痕跡が残る。	*	*			茶色土器3脚。右脚部小
434	200-26	灰釉陶器 風浮袋	SK1009	D3-8 SK2 H17			外ナナ。縁外ヘラミダギ。7角形の脚の附属した痕跡が残る。	*	*	黄灰色		
460	262-01	磁器器 磁器碗	SK1012	D8-5 S28 SK1			内ナナ。外ナナの縁ナナ。底縁面取りを行う。	*	*	灰色	40	
456	202-04	* *		D2-5 包含層			*	*	*	黄褐色	20	使用済残る
457	204-02	* 雙	SK1011	D3-8 S16 S11			内ナナナ。底縁。使用のための磨滅。外ナナの底ナナ。	*	*	淡灰色		利用済 使用済残る
456	205-28	石製		D8-6 包含層	失	高さ 3.8		*	*			使用済残る
459	203-25	磁器器 杯皿		D6-6 J8 包含層	13.0		内側ヘラミダギ。天井部外ヘラミダギ。	*	*	灰色	15	利用済。内面に朱の残線。使用のための磨滅
460	203-21	* *		D6-6 M8 包含層	14.7	1.7	内側ヘラミダギ。	*	*	淡灰色	25	利用済。内面使用のための磨滅
461	206-03	* *		*	14.6		内側ヘラミダギ。天井部外ヘラミダギ。	*	*	淡灰色	50	利用済。内面使用のための磨滅
462	205-02	* *		*	15.8	2.2	*	*	*	淡灰色	50	利用済。内面使用のための磨滅
463	027-35	緑釉陶器 瓶		D3-8 M1 包含層	4.0		底部外ヘラミダギ。底縁内ヘラミダギ。	*	*	緑灰色(黄褐色)	50	立派な
464	218-51	* *		* Q15 包含層	-	6.2	底部外ヘラミダギ(輪高台)。	*	*	灰色(オリーブ灰色)	30	立派な。底部外面に釉に掛かる
465	217-03	* *	SK1038	D8-9 P21 SK1	15.0	6.4	底部外ヘラミダギ(輪高台)。内ヘラミダギ外ヘラミダギ。内面に「一定方向のヘラミダギ。	*	*	黄褐色(淡黄色)	100 50	立派な 輪高台
465	017-02	* *		D3-8 H1: 包含層	-	6.0	底部外ヘラミダギ(輪高台)。内ヘラミダギ外ヘラミダギ。	*	*	黄褐色		立派な 輪高台。
467	215-04	* *	SK1012	D5-5 S21 SK1	11.4	5.0	底部外ヘラミダギ(輪高台)。内ヘラミダギ外ヘラミダギ。二脚部外ヘラミダギ。二脚部内ヘラミダギ。二脚部内ヘラミダギ。二脚部内ヘラミダギ。二脚部内ヘラミダギ。	*	*	灰白色(淡黄色)	100 100	立派な。底部外面にナナイケル。輪高台
468	218-03	* *		D9-9 D1 包含層	-	6.0	底部外ヘラミダギ。内側外ヘラミダギ。二脚部内ヘラミダギ。二脚部内ヘラミダギ。二脚部内ヘラミダギ。	*	*	黄褐色	高30	立派な 輪高台
469	217-05	* *	SK1006	D3-8 Q16 SK2	16.6	-	内側ヘラミダギ。内側外ヘラミダギ。	*	*	灰白色(淡黄色)	25	立派な
470	217-07	* *	SK1038	D9-9 I91 SK1	17.8	-	*	*	*	黄褐色(淡黄色)	10	立派な
471	216-03	* *		D8-5 D22 包含層	36.6	-		*	*	黄褐色(オリーブ灰色)	15	立派な
472	217-04	* *	SK1012	D8-5 G21 SK1	8.8	-	底部外ヘラミダギ(輪高台)。内側外ヘラミダギ。二脚部内ヘラミダギ。二脚部内ヘラミダギ。二脚部内ヘラミダギ。	*	*	灰白色(淡黄色)	35	立派な 輪高台
473	214-04	* *		D5-9 P21 包含層	16.5	-	内側ヘラミダギ。	*	*	灰白色(淡黄色)	25	立派な
474	214-05	* *	SK1032	D5-9 M21 SK1	16.5	7.1	底部外ヘラミダギ(輪高台)。内側外ヘラミダギ。二脚部内ヘラミダギ。二脚部内ヘラミダギ。二脚部内ヘラミダギ。	*	*	淡黄色(オリーブ灰色)	100 100	立派な 底部外面に釉に掛かる
475	217-05	* *		D5-9 H2 包含層	13.6	6.2	底部外ヘラミダギ(輪高台)。内ヘラミダギ外ヘラミダギ。	*	*	灰白色(淡黄色)	105 50	立派な 輪高台
476	216-01	* III	SK1038	D5-9 P21 包含層	16.5	7.9	底部外ヘラミダギ(輪高台)。内ヘラミダギ外ヘラミダギ。二脚部内ヘラミダギ。二脚部内ヘラミダギ。二脚部内ヘラミダギ。	*	*	淡黄色(淡黄色)	25	立派な 輪高台に掛かる
477	216-02	* *	*	*	13.9	-	口縁部内側ヘラミダギ。口縁部外側ヘラミダギ。	*	*	黄褐色(オリーブ灰色)	18	立派な 淡黄色の濃い輪高台に掛かる
478	214-05	* *		D5-9 H1C1 包含層	15.3	6.4	底部外ヘラミダギ(輪高台)。内ヘラミダギ外ヘラミダギ。二脚部内ヘラミダギ。二脚部内ヘラミダギ。二脚部内ヘラミダギ。	*	*	黄褐色(オリーブ灰色)	50	立派な 内面に朱の残線。輪高台に掛かる

第36表 遺物観察表・柘植川北部(14)

No.	登録No.	目録	遺構	出土位置	数量 (個)		調査注記の概要	土質	構成	色調	残存率 (%)	備考	
					口径	底径							
479	214-02	練瓦軸部 III	SK1023	D3-9 M31 SK1	14.8	7.0	2.5	底部外→コナクズリ。口縁部内外→コナクズリ。平床コナクズリのみとコナクズリ。口縁部内外→一方方向のヘラミダキ。底部外→一定厚みのヘラミダキ。張り付け高台。	灰(1-2mmの砂粒含む)	硬質	灰白色(淡黄色)	75% 底100	練瓦軸部 底部外面N字形のヘラミダキ
480	904-02	* * *		D3-9 M11 瓦合層	13.8	5.4	2.3	内外→コナクズリ。張り付け高台。	*	硬質	青灰色(緑褐色)	25	底面露出部一部残る
481	215-03	* * *		D3-9 東部土	11.6	6.0	2.8	内・口縁部内外→コナクズリ。底部外→未詳。張り付け高台。	*	軟質	灰白色(緑色)	25	近江瓦 底部外面以外に軸
482	217-08	* 陶	SK1027	D3-9 F15 SK1	-	6.4	-	底部外→内張り。内・口縁部内外→コナクズリ。張り付け高台。底部内面に比喩1条。	*	軟質	灰白色(緑色)	25	近江瓦 底部外面以外に軸
483	216-06	* * *	SD1028	D3-3 L31 瓦合層	13.4	7.0	4.7	*	*	硬質	灰白色(緑褐色)	30	底面露出。内面にトナシ残れる 底部外面以外に軸
484	218-04	* * *		D3-9 O16 瓦合層	-	8.4	-	*	*	軟質	灰白色(緑色)	50	近江瓦。内面にトナシ残れる 全面に軸
485	215-02	* * *		D3-9 西部土	16.0	7.4	5.9	*	*	軟質	淡黄褐色(オリーブ灰)	17 底30	近江瓦。底部内面・背面面にトナシ残れる。底部外面以外に軸
486	214-01	* 陶管	SK1026	D3-8 B22 SK1	-	6.8	-	底部外→コナクズリ。張り付け高台。底部内→コナクズリの後部コナクズリ。内→コナクズリ。底部外・口縁部内外→一方方向のヘラミダキ。	*		灰白色(淡黄色)	100 外完全	練瓦軸部。軸全面
487	218-32	* 陶		D3-8 F17 瓦合層	-	7.8	-	内・底部外→コナクズリ。底部外→コナクズリ。張り付け高台。	*	軟質	灰白色(緑褐色)	25	軸内面に磨かる
488	215-05	* 瓦	SK1017	D3-9 I32 SK1	[37]	-	-	内外→コナクズリ。内→一方方向のヘラミダキ。外面に凸部1条	*		灰白色(オリーブ黄褐色)	小片	軸内面に磨かる
489	216-16	* 陶		D3-9 K25 瓦合層	-	6.3	-	内外→コナクズリ。張り付け高台。	*		灰白色(オリーブ黄褐色)	-	底部露出。底部内面に軸
490	216-01	* * *		D3-9 J22 瓦合層	-	6.7	-	*	*		灰白色(淡黄色)	-	底部露出。底部内面に軸
491	217-02	* * *		D3-9 J20 瓦合層	-	6.8	-	*	*		灰白色(オリーブ灰)	-	底部露出。底部内面に軸
492	214-06	* * *		D3-9 H1 瓦合層	-	4.8	-	外→コナクズリ(絶の目)。内→コナクズリの後部コナクズリ。外→コナクズリ。	*	軟質	灰白色(灰オリーブ灰)	-	底部露出。底部内面に軸
493	216-04	* 陶		D3-9 K16 瓦合層	13.8	-	-	口縁部内外→コナクズリ。	*	軟質	淡黄色	小片	一面(緑色と黄褐色)の両面に磨かる
494	216-07	* *		D3-9 K32 瓦合層	-	-	-	内→コナクズリ。3本の筋とを張り合わせた凸部とすずり。	*	軟質	黄褐色(黄褐色)	-	木目の凸部 表面に磨かる
495	211-08	灰物陶器 陶		D3-9 G14 瓦合層	18.6	-	-	内・口縁部内外→コナクズリ。口縁部外下→コナクズリ。	*	良	灰白色	15	底部露出。D3-5 F29 F1cより同一層
496	213-01	甕 陶		D3-8 Q17 瓦合層	13.8	-	-	内外→コナクズリ。	*	*	灰オリーブ	5	
497	213-02	* * *		D3-8 R17 瓦合層	-	5.4	-	外→コナクズリ。内→コナクズリ。	*	*	灰オリーブ	40	底部外以外に軸
498	213-04	* * *	SD1024	D3-10 I6 SD1	-	9.6	-	底部外→コナクズリ。	*	*	灰白色(オリーブ灰)	40	底部外面以外に軸
499	206-11	土師器 土瓦		D3-9 C5 瓦合層	-	-	-	全面ナゲ。部の表面残れる。	*	*	褐色	-	断面
500	206-01	* * *		D3-11 X18 瓦合層	-	-	-	ナゲ。	*	*	褐色	-	右断面
501	205-09	灰物陶器 陶瓦		D3-2 北	-	-	-	全面ナゲ。口は竹管による釈突で表現。自然焼跡残る。	*	*	灰白色	-	
502	207-01	土師器 瓦		D3-8 G18 瓦合層	16.8	2.1	2.1	口縁部内外→横ナゲ。底部内→ナゲ。外→面オキエ。	*	*	にぶい褐色	30	底部外面(口端)の磨き
503	207-02	* * *		D3-8 G18 F14 瓦合層	5.2	1.8	1.8	*	*	褐色	25	底部外面(口端)の磨き	
504	210-01	灰物陶器 灰		D3-4 押土	2.2	2.1	2.1	口縁部内外→コナクズリ。底部内→ナゲ。外→コナクズリの後ナゲ。	*	*	灰白色	30	底部内面に磨き
505	210-02	* * *		*	-	-	-	*	*	灰白色	25	底部外面(口端)の磨き	
506	212-03	* 軒瓦		D3-6 H8 瓦合層	-	-	-	内外→コナクズリ。	*	*	灰白色	小片	底部内面に磨き
507	208-32	土師器 灰		D3-9 K34 瓦合層	9.8	2.9	2.9	口縁部内外→横ナゲ。底部外→ナゲ。外→面オキエ。	*	*	黄褐色	完全	底部内面に磨き
508	-45	灰物土器		D3-5 J21 F11	11.0	-	-	内外→面オキエ。	*	*	褐色	15	
509	212-04	灰物土器 灰		D3-5 I18 S19	-	-	-	内→ハケム(6本/4cm)。観察は全面ナゲ。顕微鏡に5本筋みいれ役を表現。	*	*	灰白色	-	
510	204-07	黄色土器 灰瓦		D3-5 Q22 瓦合層	11.4	2.1	2.1	口縁部内外→底部内外→ヘラミダキ。張り付け高台。	*	*	にぶい黄褐色	60	黒色土器と同様
511	206-01	内面焼物		D3-6 B4 瓦合層	28.6	-	-	外上→一層方向のハケム。下→一層方向のハケム。内→一層方向のハケムの後ナゲ。	*	*	淡黄褐色	17	

第37表 遺物観察表・柘植川北部 (15)

No.	登録No.	器 種	産地	出土位置	法 量 (cm)		測量技法の特徴	胎 土	焼成 色 澤	残存率 (%)	備 考		
					口徑	底径							
517	211-04	土製品 磁器類		D3-6 D3 磁器類		2.4	上径3.5cm, 下径4.7cm。全周ナデ		灰(1~2mmの砂粒含む)	黒	1) 灰白色	完形	
518	209-01	* 土器		D6-9 D3 磁器類	5.5	3.9	全周ナデ, 上部に2穴穿つ。		2~3mmの砂少し含む。	黒	* 灰白色		表一かすかに磨痕残る 裏一へうによる乱折と文字
519	207-02	瓦葺		D2-8 1-3 磁器類			内面、右日直。外一隅口のナデナ。内面縁部へウケズリ。			黒	* 灰白色		
515	208-02	平瓦		D3-11 磁器類			内面、右日直。外一隅口のナデナ。内面縁部へウケズリ。			黒	* 灰白色		
516	208-01	*		D3-4 磁器類			*			黒	* 灰白色		
517	206-02	*		D3-9 104			内面一全日直。外一隅日直のナデナ。内面縁部へウケズリ。			黒	* 灰白色		
518	206-03	*		D3-6 磁器類			内面一全日直のナデナ。外一隅日直のナデナ。内面縁部へウケズリ。			黒	* 灰白色		
519	207-04	金属製品 鏡		D3-11 磁器類	2.3								磨痕残る(100%)
520	207-03	* *		*	2.3								磨痕残る(100%)
521	207-05	* *		*	2.3								磨痕残る(100%)
522	207-06	* *		*	2.3								磨痕残る(100%)
523	211-05	石製品 磨石		D3-9 102 P40	1.3	0.7							
524	213-03	* 磨石		D3-A 磁器類									両面に使用痕跡残る
525	004-04	* *		D3-A 111 磁器類									内面使用痕跡残る
526	004-05	* *		D3-A 111 磁器類									二面使用痕跡残る
527	004-06	* *		D3-A 111 磁器類									二面使用痕跡残る
528	111-01	* 子爵 ち勾玉	SD4	C3-4 SD1	7.9	2.7	2.2	右側・磨石					
529	225-02	土製品 土織	SK1005	D3-9 101 SK1	2.5	1.2	3.3		直径(1~2mmの砂粒含む)	黒	灰白色	完形	
530	225-13	* *		D3-3 101 PS	2.2	1.3	3.6		*	黒	1) 灰白色	完形	
531	225-01	* *	SK1003	D3-9 101 PS	4.5	1.7	9.3		*	黒	1) 灰白色	完形	
532	226-06	* *	SK	D3-6 101 SK1	4.9	1.3	6.6		*	黒	1) 灰白色	完形	
533	225-07	* *		D3-9 101 SK1	5.4	1.3	8.7		*	黒	1) 灰白色	完形	
534	226-01	* *	SK1046	D3-3 101 SK1	5.7	2.0	21.1		*	黒	1) 灰白色	ほぼ完形	
535	225-12	* *	SD1041	D3-3 101 SK1	5.9	2.0	21.1		*	黒	1) 灰白色	ほぼ完形	
536	226-02	* *		D3-6 101 SK1	4.5	2.4	22.1		*	黒	1) 灰白色	完形	
537	225-05	* *		D3-9 101 SK1	5.6	3.1	31.4		*	黒	1) 灰白色	完形	

第38表 遺物観察表・柘植川北部(16)

No.	登録No.	名称	産種	出土位置	法 量 (cm)			木 取 り	樹 種	特 徴	備 考
					長さ	径	厚さ				
538	122-01	木製品 水筒	SD4	C1-4 SD1	(16.0)	2.4	0.4	縦目			腐蝕
539	122-02	* * *			13.6	2.4	0.4	縦目			腐蝕
540	120-02	* * *			(12.0)	2.5	0.4	縦目			
541	121-01	* * *			(9.0)	2.1	0.3	縦目			
542	120-03	* * *			(13.0)	1.7	0.4	縦目			
543	120-01	* * *			(20.0)	2.1	0.3	縦目			
544	118-02	* * *			15.2	3.0	0.3	縦目			
545	118-03	* * *			16.6	2.8	0.5	縦目			
546	119-01	* * *			(18.0)	2.8	0.5	縦目			
547	119-02	* * *			(11.0)	3.3	0.6	縦目			
548	134-02	* 下駄		15-1 包含層	22.8	11.7	1.5- 3.1	縦目			
549	134-01	* 曲物		*	21.9		0.7	縦目			
550	130-01	* 建築部材	SD8	C1-11-8 SD3	(20.0)	24.0	5.2	縦目			手斧による削り。
551	129-01	木製品 部材	*	*	90.4	9.2	4.0	縦目			手斧による削り。端を手斧により削り、尖らす。
552	132-01	* * *	*	*	98.0	10.3	3.6	縦目			縦目を軸に転用
553	130-02	* * *	*	*	69.4	7.6	1.4	縦目			手斧による削り。端を手斧により削り、尖らす。断面にほぞ穴残る。
554	128-01	* * *	*	*	(10)	8.0	6.4	辺材			角材。狭りを入いっせいに突っ込む。
555	122-02	* * *	*	*	(10)	10.3	3.0- 4.8	辺材			手斧による削り。ほぞ穴両端に残る。
556	131-03	* * *	*	*	(12)	8.6	7.2	辺材			角材。手斧による削り。狭り中央に残る。
557	128-02	* * *	*	*				辺材			555と同じものか
558	133-01	衣笠状木製品	*	*	径60- 67	高さ 37.8		芯材			狭り厚く、両端不明。くびれ部径約6cm。上径29.6cm
559		木製品 棒状	SB075	25-4 3-2 PS	(53)	26.5		腐蝕			10角形に近く面取る。手斧による削り。ほぞ穴残る。
560		* * *	SB075	126-5 118 PE	(82)	41.8- 47.2		腐蝕			外側、裏面。手斧による削り。

第39表 遺物観察表・柘植川北部(17) 木製品

## Ⅳ. 結 語

昭和63年度から平成3年度までの4次の調査で、伊賀国府の位置及び政庁について推定することが可能となった。国府が柘植川北部の国町地区を中心とする地域であることは、調査結果から間違いないところである。伊賀国は国の等級では下国で、全国の下国の中で、発掘調査において初めて国庁の位置および政庁部が判明した。

### 政庁域

政庁域では幾度もわたる掘立柱建物の重複が見られ、初現の時期である8世紀後半から終末期の11世紀前半まで、おおまかな変遷を追うことが可能となった。政庁域の範囲は、初現の時期が推定できるだけだが、その範囲は南北約44m、東西41mと非常に狭いものである。後に屏や廊殿が南に拡張されているが、最大範囲は約50m四方程度に復原されるに過ぎない。これまで範囲が確認された国府が大因・上国などの例のみであることを考えると、国の等級により規模が異なるという1例である。

### 国庁範囲

北側は、丘陵が迫るという地形的な制約を受ける。岩坂地区は、検出した掘立柱建物や硯などから国庁の範囲に入る可能性は残る。

東側の追越地区では、奈良・平安時代以前の建物は確認されているものの、平安時代の国庁の範囲に

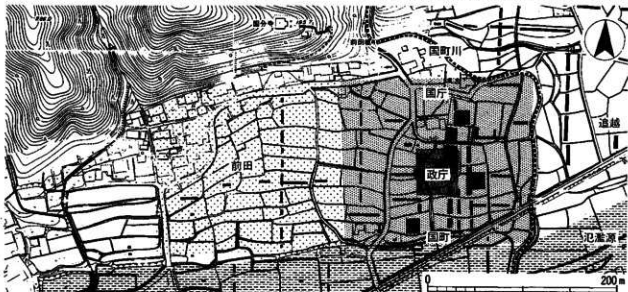
入る可能性は薄い。

西側の前田地区では、奈良・平安時代の明確な遺構は確認されないが、中央部付近に緑釉陶器の出土が集中していることなど国庁の範囲についての確定を困難にしている。

段丘下の南の水田部分ではトレンチ調査の結果で遺構は確認されず、水田の耕作土・床土直下は砂礫層であったために柘植川の氾濫原であったと思われる。遺構が削平されている可能性があるものの、柘植川がこれまで幾度となく氾濫を繰り返していることを考えると、不安定な立地に国庁に係る施設を建造した可能性は低いものと思われる。

国庁域は、東限を人工的な付け替えを呈する国町川と見ることができ、西限は調査で断定できなかったが、政庁を左右対象として捉えるならば、政庁の中心軸から東限までの距離を折り返した南北約180m、東西約200mの範囲を国庁域と推定することができる。また、調査結果や地形からみると、国町・前田地区の平坦部の南北約180m、東西約400mを最大の国庁域と考えることもでき、国町地区の北部と西の岩坂・追越地区を含む範囲も立地する位置から、奈良・平安時代の遺構が少ないものの、範囲に含まれる可能性も残している。

この範囲内に全ての施設が存在したかどうかは確



第66図 国庁域範囲概念図 (1:4,000)

定できないが、国府域を他に求めようとするれば、地形の制約を受け、国町・前田地区のさらに西の東条・西条地区、または道越地区のさらに東の織之森・大坪地区に分散せざるを得ない。このことは方八町といわれるような国府のプランを否定するもので、隣接する地域の内容は不明だが、栢植川北部を通過したと推定される海道に沿って東西に広がる平坦な段

丘上の地形を利用し、諸施設を配置した国府像が浮かび上がる。

また、出土した遺物は多量で、これまで空白であった伊賀地域の平安時代の土器の変遷に付いても大まかに追うことが可能となった。以下、政庁の変遷と平安時代の土器について記述する。

## 1. 平安時代の土師器について

出土した遺物のうち、他地域でおおむね年代のおさえられる須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器等の出土は1割にも満たない量である。転用視として使用された須恵器杯蓋の中には奈良時代後半まで遡るものもあるが遺構に伴う須恵器は少ない。また、円面碗など奈良時代前半まで遡るものが見られるが、当該期の遺構は確認されていない。遺物の中で最も量的に多い土師器は平安時代を中心とした資料であり、伊賀地域ではほとんど出土例が少ないため、この時期の良好な資料と言える。ここでは灰釉陶器、緑釉陶器などの資料を参考とし、9～11世紀前半の当遺跡の土師器、黒色土器の流れを見ることとする。

土器の器種構成としては、本文遺物の遺構別の器種構成表のように土師器が8割近くを占め、黒色土器が喫食するようになること、土師器と黒色土器で9割近くを占めるようになる。これらはいずれも供膳具である杯・皿が中心で、煮沸具である甕などの比率は極めて低い。県内では他地域の一般集落と比較する資料がないが、明和町にある斎宮跡の9世紀後半のS K 2650の資料がこの割合に近い。国の出先機関であった斎宮跡と同様、この傾向が伊賀国府の特色といえる。

### 1) 土師器について

#### 奈良時代後半～平安時代初期

◎出現期である奈良時代後半から平安時代初期の資料は良好なものが少なく、S D 1010・S K 1011の出土例のみで、时期的にも新しい様相が多い。掘立柱建物出土の遺物には8世紀末～9世紀初頭に位置付けられる平安京I期中段階に類似するものがあり、初現の年代の一端を示している。

杯は底部e手法で、ヘラミガキを施すものはない。

量量から口径14.6cm・器高2.9cmのA I、口径13.0・器高2.8cmのA IIに分れる。皿はS K 1011のものに底部外面ヘラケズリで内面には暗文を施すものが見られ、量量から口径20.1cm・器高2.0cmのA I、口径16.5cm・器高1.8cmのA IIに分れる。A IIの中でも口径14.4cmの小形のものがある。

同時期の建物S B 1070から出土したものに碗Aが見られる。碗Aは、口径12.0cm・器高3.5cmほどの小形で、外面にヘラミガキや、内面に暗文の残るものもある。底部e手法で、口縁部が直線的に外上方に近づき、端部内面に面を持つものである。中期以降に見られる、内湾しながら外上方に延びる口縁部で、端部が外反する碗Aとは形相が異なる。

碗Bは口径16.5cm、器高5.5cmで、口縁部下半ヘラケズリを施すものである。

#### 平安時代前期

◎9世紀前半の猿投窯黒住14号窯期に相当するものには、S K 1086の資料がある。黒色土器杯を見るとS K 1011とほぼ同様なものが出土しており、时期的にそう隔たりはない。

杯は底部e手法で、ヘラミガキを施すものはない。量量から口径14.6cm・器高2.9cmのA I、口径13.0・器高2.8cmのA IIに分れる。

皿はA IIのみがある。内面の暗文・外面のヘラミガキは施されない。

碗Bは、口径16.0cm・器高は高台が彫離しているが推定すると5.0～5.5cm程になると思われる。

◎9世紀後半の猿投窯黒住90窯期に相当するものに、S K 1035の資料がある。

杯はA I・A IIがあるが、大半はA IIである。口径13.0cm・器高2.9cmで、前期前半のものと同量的にあまり差はない。

皿は口径14.4cm・器高2.0cmのAⅡがある。AⅡのなかでも口径13.4cm・器高1.7cmの小形のものが、皿は相対的に口径が小さくなる傾向である。口径が20cm以上あるAⅠはなく、後半には消滅すると思われる。

椀Bは、口径16.2cm・器高5.0cmと5.4cmの2個体が出土しており、前期前半のものと余り変化はないが、器高が減少する傾向と思われる。

また、ロクロ成形土師器もこの時期から見られ、S K 1009・1033・1035などから出土しているが量的には少ない。

#### 平安時代中期

◎9世紀末から10世紀初頭に位置付けられる資料には、S K 1012のものがあ

り。杯はAⅡが中心で、法的にはS K 1035の杯とあまり差はない。

皿は前期同様口径15～16cm・器高1.2～1.8cmのAⅡと、口径13.2cmの小形のものがあ

る。椀Bもこの時期まで残るようである。新しい椀相として、口縁部の外反する椀Aや杯でも小形のものが出現する。前期から続く土師器杯・皿・椀は減少し、消滅する傾向であるといえる。

◎10世紀前半の資料には、S K 1077・S D 1081・1082のものがあ

る。S D 1082の杯は口径10cmと小形化するもので新しい要素が多い。

器種としては杯Aと椀A・皿Aがある。

杯Aは器壁が薄く、口径11cm前後・器高2cmと小形化し、大形のものはな

い。椀Aは口径12cm前後・器高2cm前後で、S D 1081・1082に類例が見られる。他に口径の大きなものがあるが、個体数が少ないため分類はしていない。大形というものの口径は14cm以下で、いわゆる小形食器といえるものである。

皿Aは口径が14cm程度で底部は丸みを持ち、前期から続く皿は消滅する。この皿としたものは、10世紀後半に相当する平城京左京六条三坊十三坪跡のS K 21の杯に形態的に類似するが、ここでは皿とした。形態的に皿と杯との区別が無くなっていく時期であろう。

◎10世紀後半の資料には、整地層・S K 1017などがあ

る。土師器は椀・杯の区別がほとんど無くなり、ここでは杯と称した。皿は京都系の「て」字皿が出現し、口縁部が短く外反する小形の皿が出現する。この皿の形態は、ロクロで成形するものに多く見られる。

S K 1017の杯は、口径11.2cm・器高1.8cmと森器遺跡S Z 301のものに類似し、10世紀後半でも古い時期に位置付けられる。整地層出土の杯は口径10.4cm・器高2.3cmと小形化する。口縁部の形態が様々で、細分が可能なものかも知れない。森器遺跡S Z 303、奈良の薬師寺西僧坊のものに類似し、「て」字皿から平安京のⅢ期中段階で、10世紀後半でも新しい時期に比定される。

#### 平安時代後期

◎11世紀の資料には、S K 1054・1064のものがあ

る。土師器は杯・皿が中心で、新たに杯Nが出現する。杯Nは数が少なく、その系譜は平安京Ⅲ期新段階に出現するいわゆる2段ナデ口縁をもつ杯N・皿Nに求められるかもしれない。

皿には「て」字皿や端部を折り曲げる皿がある。前者の中に口径9cm前後と平安京Ⅲ期新段階より新しい要素が見られ、後者は三反田遺跡S K 1のように瓦器に伴う遺構から出土しており、S K 1054から瓦器が1点出土していることを考えると、平安京Ⅲ期新～Ⅳ期古段階の概ね11世紀前半から中葉とするのが妥当である。

浮田遺跡の報告文中に11世紀から15世紀までの土師器の変遷に付いてに記述されているが、今回杯Nとしたものは大形土師皿B系に、杯としたものは同小形土師皿B系、皿Aとしたものは小形土師器皿A系に各々つながっていくものである。

## 2) 黒色土器について

黒色土器の出現は平安時代前期前半で、以後瓦器の出現する11世紀中頃まで、内面黒色化のA類が中心に存在する。

平安時代前期前半の器種には、杯・皿・風字硯がある。杯は器壁のやや厚いもので、外面ヘラケズリの後、口縁部のみヘラミガキを施すものである。皿も器壁の厚いもので、これらの出土点数はわずかで、すべて搬入品と思われる。

前期後半になると、杯・椀A・皿・鉢A・鉢B・

風字硯等と器種が最も豊富となる。杯・鉢Aともに器壁が薄く、丁寧な作りのものである。碗Aは口径15.3cm、器高4.3cm、底径約8cmほどのAⅡと、口縁部を欠するが底径10cmの深碗タイプのAⅠがある。皿は口径14.3cm、器高2.7cmで内面に暗文が施される。

中期は碗Aが中心で、皿は少なくなる。碗は口径により、AⅠ・AⅡ・AⅢに分類される。一部黒色土器B類が出土するが、点数はわずかで搬入品の可能性が高い。S K1012出土の227は器形的に土師器碗Bの脚になるもので、類例がなく土師器製作集団が作ったものと考えられ、黒色土器A類の在地生産が開始されている可能性が高い。

中期後半では碗のみとなる。作りが悪いものが多くなり、ヘラミガキも複雑化し、施されないものも増え、規格性の失われていく時期である。ヘラミガ

キの施されないものは器壁が厚く、作りが悪く在地で生産されたかと考えて間違いない。S P1076から出土した黒色土器は森脇遺跡S D303<sup>1)</sup>と法量的にも同じものである。

最終末である11世紀前半では黒色土器は減少し、消滅する。

位置的に大和に接するため、黒色土器A類→同B類・瓦器の変遷が伊賀でもたどれると考えられていた。しかし、伊賀地域での黒色土器の分布はA類が中心で、搬入品として9世紀前半に出現し、在地で生産の開始は不明であるが11世紀前半までその生産は続く。伊賀国府出土の黒色土器の中心はA類で、B類は数点しかなく、B類の在地で生産に関しては疑問視される。

## 2. 政庁域の変遷について

伊賀国府の初現については、重複が著しいためにその時期を確定することは出来なかったが、北を区画する東西溝S D1010が平安時代初期に埋没していること、出土した遺物の中には奈良時代まで遡るものがあることなどを考えると奈良時代の範疇に成立したことは確実である。しかし、奈良時代前半に比定される門面硯なども出土しているが、その出土量は多くなく、遺構も未確認であるために、奈良時代でも後半代と考えられる。

重複しているために未確認の可能性が残るものの、当地域での初現を奈良時代前半まで遡らせる可能性は低いが、前田地区の飛鳥時代の遺構、東に位置する外山大坪遺跡の飛鳥時代から奈良時代までの遺構など、奈良時代前半以前の国府については他地域に存在する可能性は残っている。

廃絶期は、遺構から出土する瓦器が微量であることから、伊賀地域で瓦器が出現するまでの11世紀前半である。以下、奈良時代後半から平安時代後期までの政庁域の変遷について見ることにする。

### ○奈良時代後半から平安時代前期前半

伊賀国府の成立期である。建物の存続時期としてはS B1070出土の遺物に8世紀末から9世紀初頃のもの含まれ、その年代の一端を示しているが、存続時期は断定できない。その廃絶時期は平安時代前

期前半まで遡る可能性も若干残っている。正殿S B1056は5間×3間、前殿S B1065は3間×2間の東西棟で、西脇殿は北に2間×2間のS B1084とその南に4間×2間のS B1085、東脇殿も同様に北にS B1070、その南にS B1075が位置する。これらを取り囲む塀S A1052・1091とその更に北には東西溝S D1010が存在する。建物の方向は真北北東に1°傾斜のものである。なお、東脇殿については、正殿、前殿の建物中軸線から折り返した位置で想定したもので、本文中で触れたように未検出の柱穴など問題が残るものである。

東側の南北方向の掘立柱塀は平成元年度の調査で確認したものが可能性が高く、この位置と西の掘立柱塀S A1091との距離は41.4mであり、これは140尺に相当する。

西側南北塀S A1091の外側には南北溝S D1087があり、西の雨落ち溝の可能性もあるが、東では確認していない。北は東西溝S A1052の北には溝はなく、南に位置するS D1053が内側の排水溝に当たる可能性が強い。

南では、西脇殿S B1085の南4.4mにある東西溝S D1098が、方向・時期を同じくする。東脇殿前面のD5-9中央トレンチのS K1076としたものはS D1098の延長上にあるもので、一連の溝の可能性が高



い。正殿の北側柱から掘立柱礎 S A 1052 までの距離は約 4.4 m で、西臨殿 S B 1075 の南柱穴から東西溝 S D 1098 の北層までの距離とほぼ等しく、南を両する東西溝の可能性が高いものである。

北の溝は内側に入り南も内側とすると南北の溝は 20 間以上 (44.4 m) となり、D 5 - 9 中央トレンチの S D 1069 や S K 1077 の底にある若干のくぼみが掘立柱礎の痕跡にあたる可能性も考えられる。このように考えることが可能なら掘立柱礎に囲まれた南北 20 間 (1 間 = 7.5 尺 : 150 尺)、東西 18 間 (1 間 = 7.75 尺 : 140 尺) の政庁域を復原することができる。

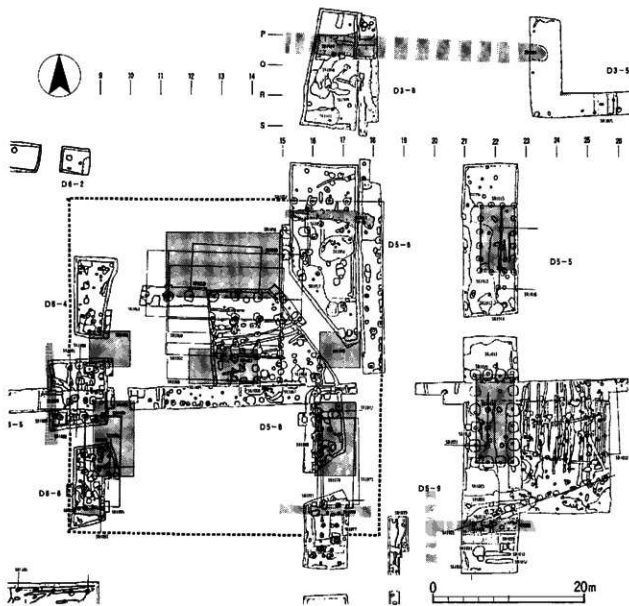
東の南北溝は確認していないが、後述する平安時代前期の東西溝 S D 1029 は当該期にも存在した可能

性は十分に考えられ、東の官衙群とを両する南北溝の存在する可能性は高い。

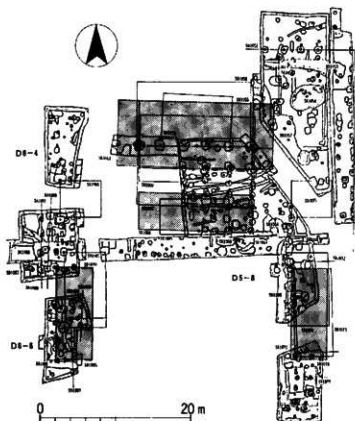
#### ○平安時代前期

正殿 S B 1055 は 7 間 × 3 間の三面覆付建物、前殿 S B 1066 は 5 間 × 2 間と各々規模を大きくして、ほぼ同じ位置で建て替えられる。また、西臨殿 S B 1095、東臨殿 S B 1073 の両臨殿は位置を南にずらして 5 間 × 2 間の規模で建て替えられる。建物の方向は前代と同じく、北で 0 ~ 1° 東に振れるものである。

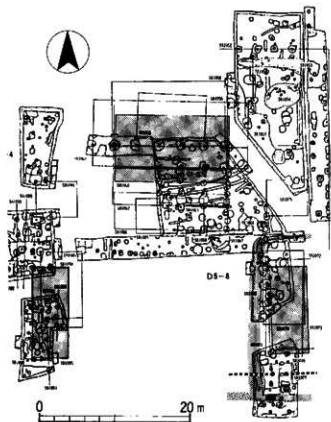
・ 期的には黒笹 14 号窯期から黒笹 90 号窯期までの約 100 年間と想定され、建物の耐用年数から建て替えが考えられるが、現状で確認していないために時期の細分はしていない。建物にはならない柱穴が幾つ



第67図 政庁建物配置図 奈良時代後半～平安時代前期前半



第68図 政庁建物配置図 平安時代前期 (1:500)



第69図 政庁建物配置図 平安時代中期 (1:500)

か確認されていること、遺構検出が非常に困難なため見落としの柱穴があることが予想され、今後の問題点のひとつとしておく。

堀、溝など周辺を区画する施設は確認していない。平安時代中期に想定される堀の下限が10世紀前半代であることから、存続時期を当該期までさかのぼらせる可能性も考えられる。また、東のD5-9東調査区南側で平安時代前期前半の東西溝S D1028、前期後半の東西溝S D1029があり、さらに西に延びるものであるが政庁城の東南部では確認していない。このため政庁城東南部とこの間の未調査区で政庁城の東を囲する南北溝に取り付くものと考えられる。

#### ○平安時代中期

正殿S B1060は5間×3間、脇殿は西脇殿S R1090、東脇殿S B1071ともに5間×2間の礎石建物となり、ほぼ同じ位置で建て替えられる。礎石の抜き取り痕跡から出土する遺物は10世紀末から11世紀に入るものが出土しているが、D5-9中央トレンチ南側の整地上層に見られるように10世紀後半代に大規模な整地が想定され、礎石建物の礎石ははこのときに抜かれたものと思われる。このため、出土する遺物から、これらの建物は10世紀代以前としか判断が出来ない。建物の方向は北で東に1°振れる。10世紀後半代の整地は、その出土した遺物から薬師寺西僧坊のものに近く、10世紀の第4四半期の年代が与えられ、この整地に伴う建物については確定できない。可能性としては平安時代後期としたものが一部入るかも知れない。

周辺を区画する施設は確認していないが、D5-9中央トレンチのP1074は10世紀前半代に下限がおさえられるもので、東にも同規模の柱穴が存在することから、南を向する掘立柱堀の柱穴になる可能性もある。南の調査区では遺構密度が薄いことを考えると南限をこの付近とすることが出来る。

○平安時代後期  
平安時代中期まで正殿の位置をほぼ同じ位置で構築していたが、正殿の位置、建物の配置が崩れていく最終期の時期である。

正殿SB1062は5間×2間の東西棟で、政庁城のほぼ中央に位置する。方位は東で南に2°振れる。東脇殿SB1072は建物位置を踏襲するもので、方位は北で西に振れ正殿とは逆のものである。西脇殿は不明であるが、規模、時期不明であるSB1096など、その可能性の高いものはある。

SB1062より新しいものには、3間×2間と推定される正殿SB1059がある。また、建物に附属する施設として、その南約30尺の位置に東西溝SD1063がある。この溝底には無数の小穴が見られ、杭などを打ち込んだ簡単な日隠し棚的な施設であったと思われる。建物、東西溝の方位は東で南に3°振れる。柱穴及び溝から出土した遺物の中に、瓦器の碎片がある。混入した可能性が残るものの、遺構の周辺では瓦器の出土が少ないことから、その廃絶の時期を伊賀で瓦器が出現する前後の11世紀中頃に置くことが出来る。

周辺を区画する施設としては、前代同様にD5-9中央トレンチ南端で、解になるとと思われる柱列が2条ほど想定できる。平安時代中期のSP1074よりさらに南の位置で、東西に1間分で2列分想定する

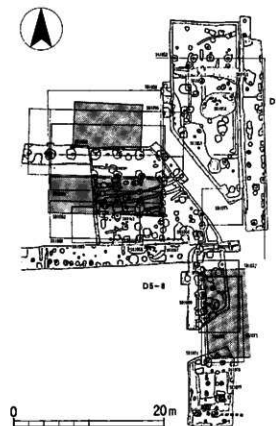
ことが可能である。このうち、北側のものは重複しており、南面を両する塼として3回の建て替えが行われていたことが窺える。すべてが平安時代後期に存在していたかは問題であるが、1間分ということもあり周辺の調査状況の進展を待つということで、ここでは南面を両する塼が数回にわたり建て替えられて存在していた可能性があるという指摘のみにとどめておく。

このような変遷を辿るものと考えられるが、一部が解明できただけで、多くの課題が残っている。政庁城では問題の残る西脇殿・塼、未検出であった南門の確認や官衙城・国府城の確認など検討すべきことは多い。また、最終木の正殿としたものは政庁の正殿としては規模的に小さく、他の施設の可能性も残っている。国分寺の真温期とはほぼ同時期であり、勢力基盤の変化が建物配置に表れているのかも知れない。

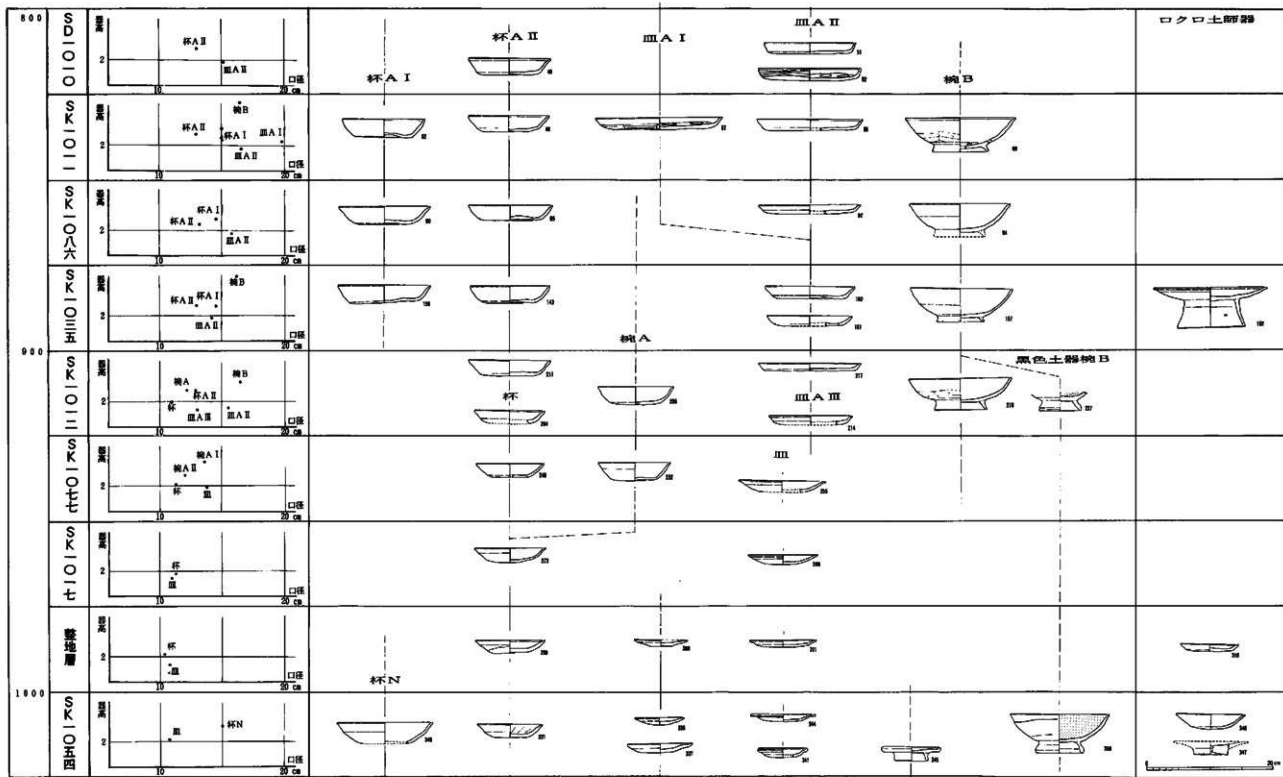
伊賀国府については、4次に渡る範囲確認調査で所在地をほぼ確定できる成果を得たが、なお多くの課題が山積しており、今後の調査により全体像が早急に解明されることを期待したい。

#### 註

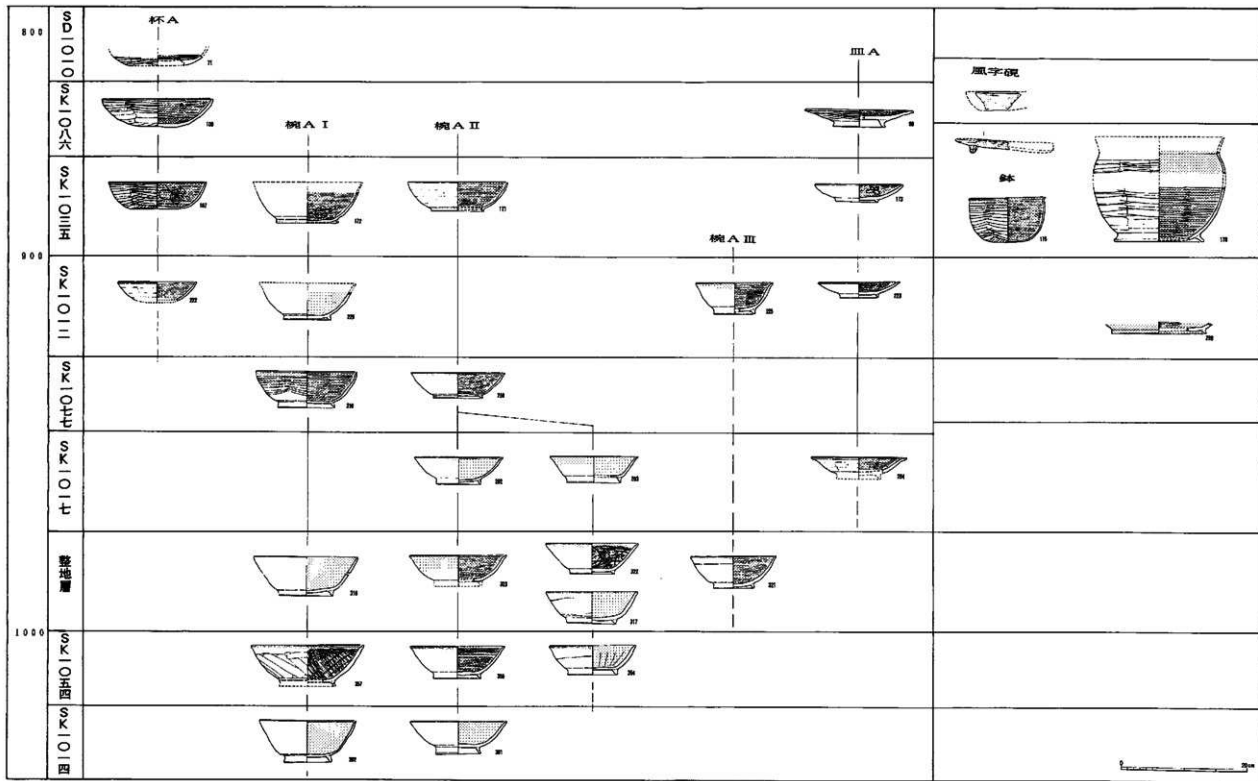
1. 平安時代の土器群の年代については「平安京右京三条三坊」『京都市歴史文化財研究所調査報告第16報』財団法人京都市歴史文化財研究所、1990を参考とした。
2. 『第44次調査』『史跡奈良公園発掘調査報告』三重県歴史文化財センター、1983.
3. 『下城京左京六条三坊十三坪』『奈良市歴史文化財調査報告書』昭和56年度奈良県教育委員会、1984
4. 森川常厚『奈良遺跡(第三次)発掘調査報告』三重県歴史文化財センター、1991.3
5. 4と同じ
6. 『第50次発掘調査報告書』奈良国立文化財研究所、1987
7. 1と同じ
8. 奥1: 別冊『三反田遺跡発掘調査報告書』上野市教育委員会、1992
9. 倉田 英純『浮田遺跡』『平成元年年度奈良県発掘調査事業地域歴史文化財発掘調査報告書第一巻(分冊)』三重県歴史文化財センター、1990.3
10. 森 謙『西日本の黒色土器年表(上)(中)(下)』『考古学研究』37: 2~4号』考古学研究会1990・1991
11. 4と同じ
12. 川野 道徳『外山大坪遺跡』『平成3年度奈良県発掘調査事業地域歴史文化財発掘調査報告書第一巻(分冊)』三重県歴史文化財センター、1992.3



第70図 政庁建物配置図 平安時代後期 (1:500)



第71图 土器演变图



第72圖 黑色土器安遺圖



柘植川南部 航空写真 (南から)



SB3 (東から)



SB5 (北から)

P L 2 柘植川南部



SD 2 (東から)



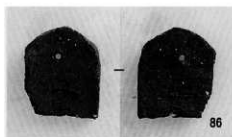
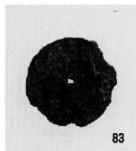
SB 1 (西から)



SX 7 (西から)



SB 9 (北から)



(83、85、86、87は 1 : 2)



PL 4 柘植川北部・国町地区



柘植川北部 航空写真(西から)



国町地区 航空写真(北から)



正殿 S B 1055 (東から)



正殿 S B 1055・1056・前殿 S B 1065・1066 (東から)

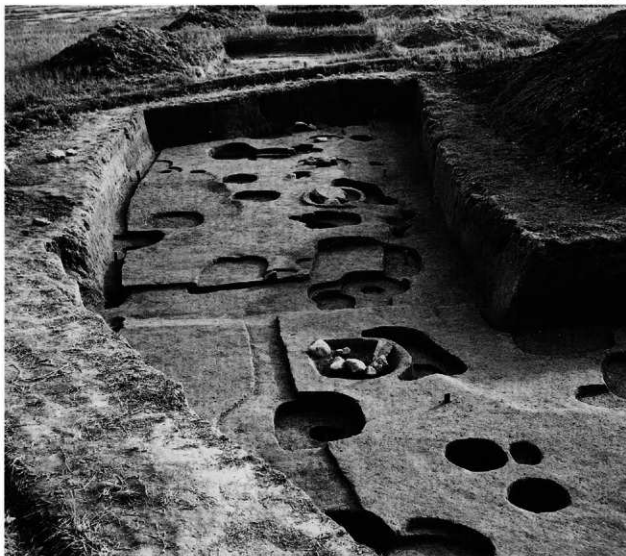
PL 6 柘植川北部・国町地区



西脇殿 S B 1084・1085・S A 1091 (北から)



西脇殿 S B 1085・1090 (北から)



D 5-6 調査区東南部 (東脇殿)



東脇殿 S B 1071 礎石据付痕 (北から)



同左柱穴断割 (東から : 中に見える柱は S B 1073)

PL 8 柘植川北部・国町地区



SA1052 (東北から)



SD1010 (北から)



SA1052 (南から)

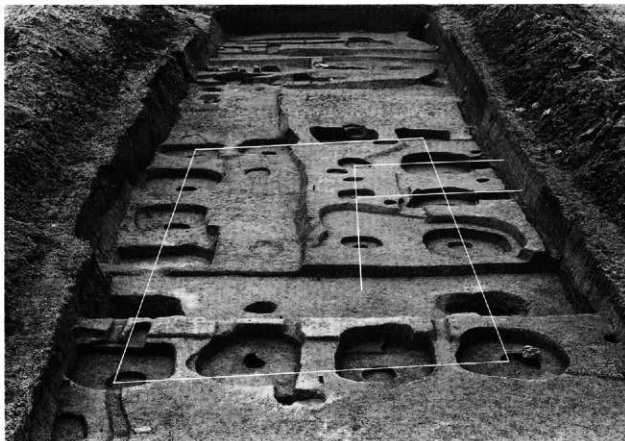


S B1105 (東から)

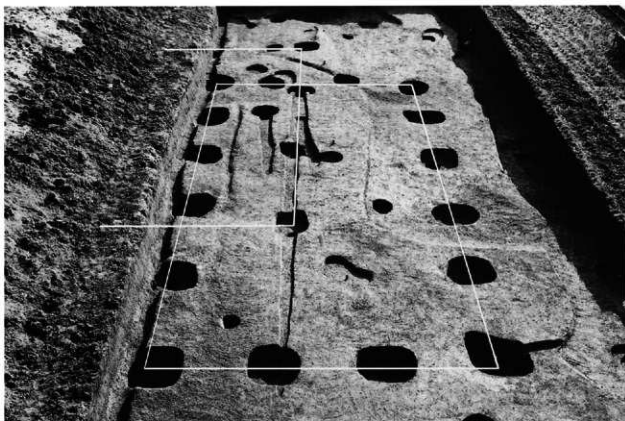


S B1020・1022 (東北から：航空写真)

P L 10 柘植川北部・国町地区



S B 1020・1021 (北から)



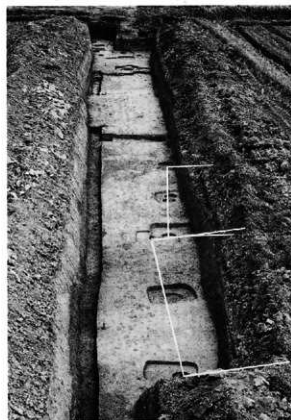
S B 1015・1016 (北から)



S B 1001 (北から)



S B 1100 (東から)



S B 1093・1094 (西から)



S B 1047 (北から)



PL 12 柘植川北部・国町地区



D 5-9 西調査区 (北から)



S D 1079 (北から)



D 5-3 調査区 (西から)



S D 1080 (南から)



S K 1030 (西から)



S B 1084 柱穴断割 (西から)



追越地区 航空写真（北から）

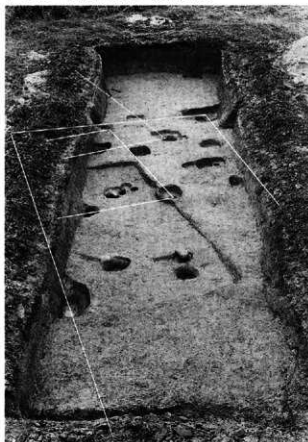


岩坂地区SB1（西から）



追越地区SD4（北から）

P L 14 柘植川北部・追越地区



SH 9・SB 10~12 (北から)



SB 6 (北から)



SD 8 (南から)



SD 8 木製遺物出土状況 (北から)



SD 8 矢板出土状況 (北から)



SD13 (北から)



SD16 (南から)



SB18 (南東から)



SA27 (北から)



SB20 (南から)

P L 16 柘植川北部・前田地区



S B 2001 (東から)



S B 2004 (北から)



S B 2015 (東から)



S B 2022 (東から)





S D 1010



S K 1011



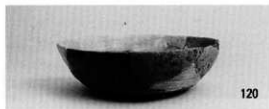


P L 20 柘植川北部・遺物

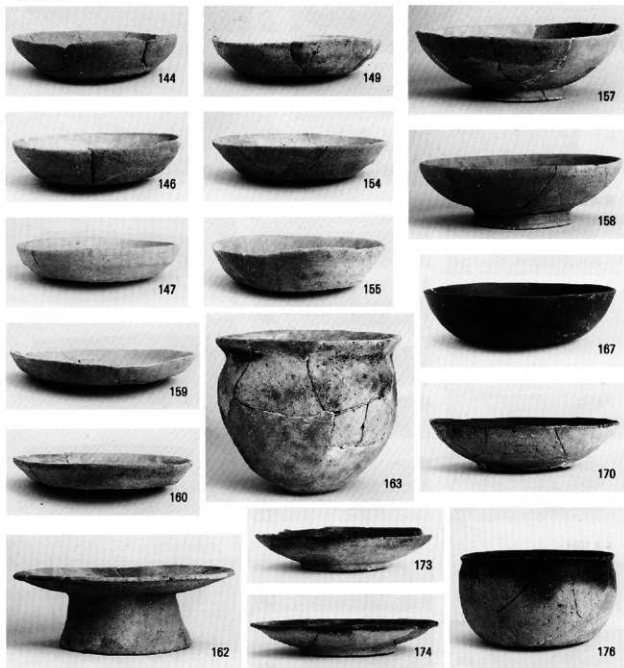
S K 1086



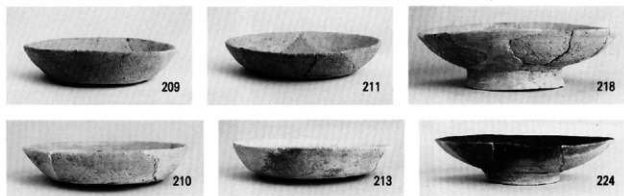
S K 1009



S K 1035

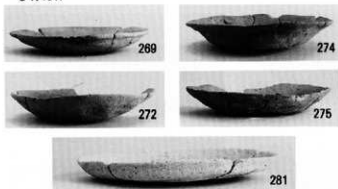


S K 1012

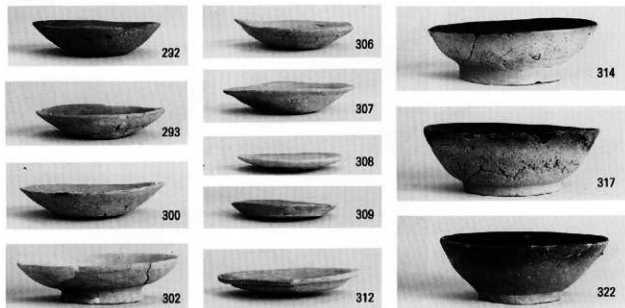


PL 22 柘植川北部・遺物

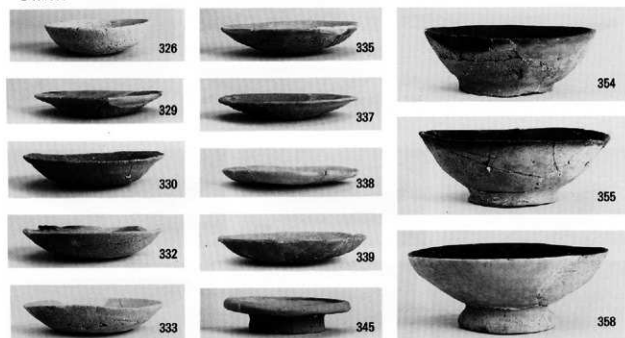
S K 1017



整地層



S K 1054



S D 1069



371



372

S K 1014



380



381



382

S B 1070



384



387



390



385



388



391



386



389

S B 1085



400

S B 1071



403

P 1078



413



402



406



414

P 1074



408

P 1026



410



415



411



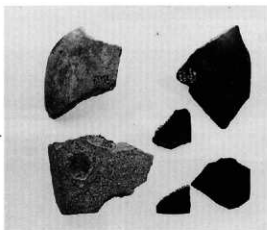
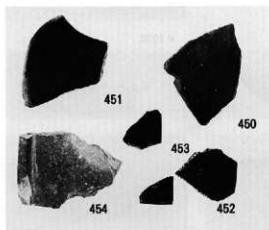
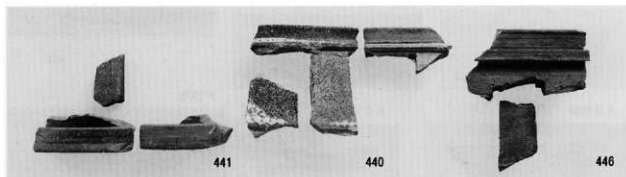
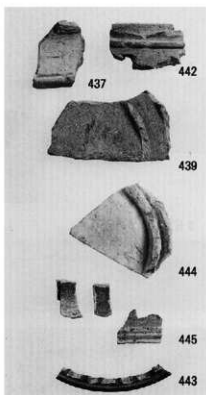
412

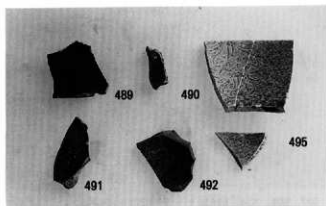
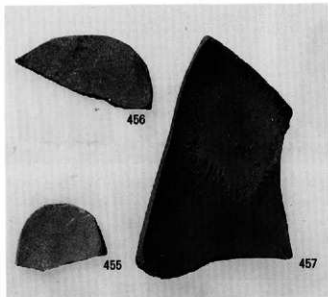


416

P L 24 柘植川北部・遺物

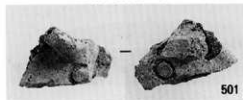
円面硯、風字硯





P L 26 柘植川北部・遺物

土馬、馬歯、土製品、石製品など



501



D 5-9包



S B 20



499



500



D 5-9包



S K 1008



512



513



507

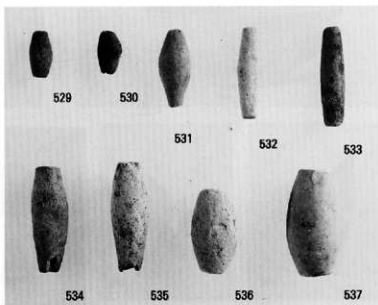


509



526

524



529

530

531

532

533

534

535

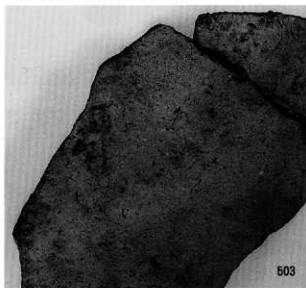
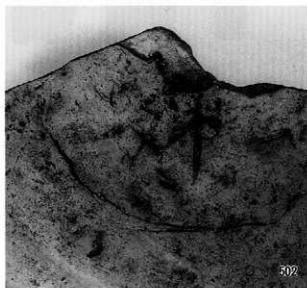
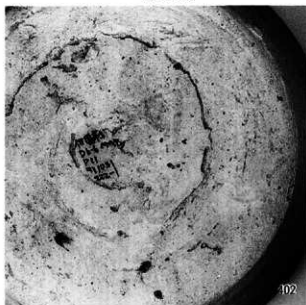
536

537



528

507、509、524、526は1:3他は1:2

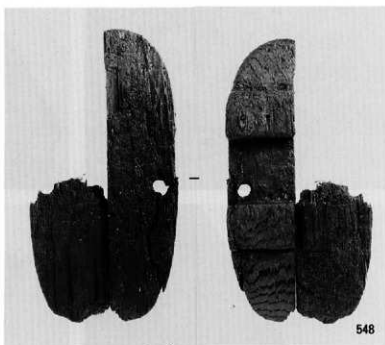
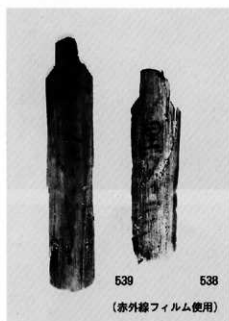
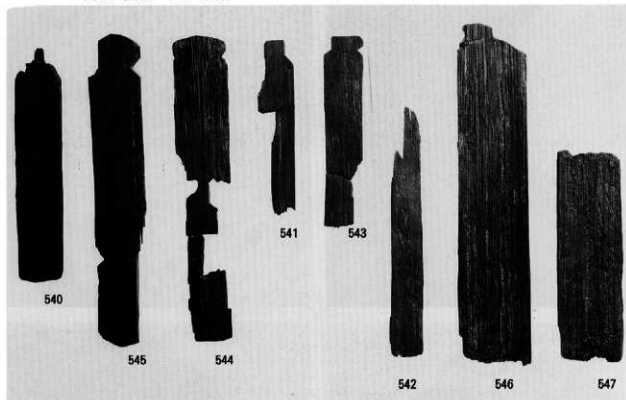


(縮尺はほぼ原寸、赤外線フィルム使用)



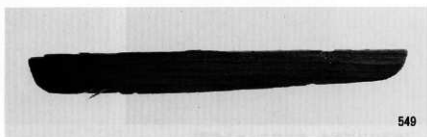
P L 28 柘植川北部・遺物

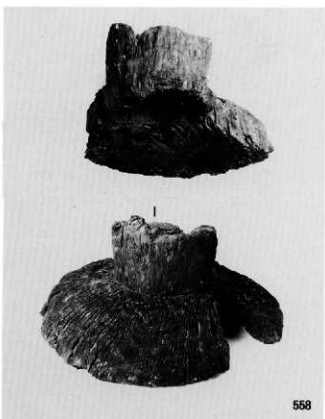
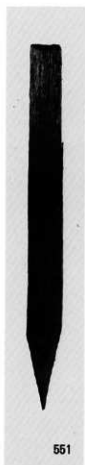
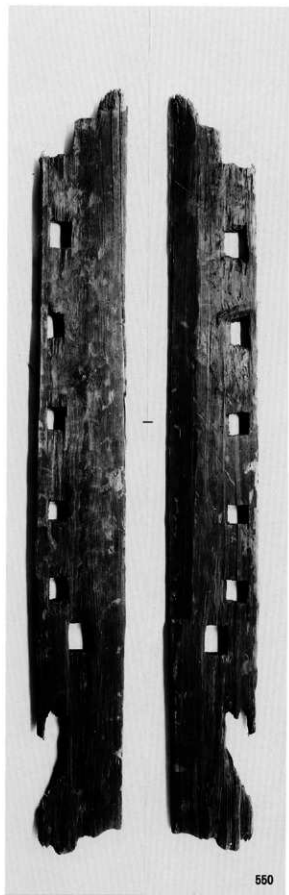
木製品 (木簡・下駄・曲物)



縮尺：上・中左は 1 : 2

下・中右は 1 : 3





(縮尺は 1 : 10)

# 報告書抄録

ふりがな		いがこくふあと						
書名		伊賀国府跡						
副書名								
巻次								
シリーズ名		三重県埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号		99-4						
編著者名		服部久士・泉雄二						
編集機関		三重県埋蔵文化財センター						
所在地		〒515-03 三重県多気郡明和町竹川503						
発行年月日		西暦 1992年3月31日						
ふりがな 収録遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
印代東方遺跡地	三重県上野市東条ほか	24206	0950	34度 47分 00秒	136度 09分 10秒	19881001～ 19890113 19891002～ 19891222	5,000  2,030	県営ほ場整備事業に伴う発掘調査
伊賀国府跡	三重県上野市坂之下字国町・前田・追越・岩坂	24206	0938	34度 48分 00秒	136度 09分 30秒	19891002～ 19891222 19900905～ 19910208 19911014～ 19920226	570  3,000  3,000	県営ほ場整備事業に伴う発掘調査
収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
印代東方遺跡地	集落	弥生時代後期～古墳時代中世	竪穴住居、土抗、溝、ピット	弥生土器、須恵器、土師器、木製品		伊賀国府が置かれていたという説が有力であったが、弥生・古墳時代に中世の遺構が中心であることが判明。		
伊賀国府跡	集落	弥生時代	溝(1)	弥生土器		弥生時代と古墳時代の遺構は主に東の追越地区で検出。		
		古墳時代から飛鳥時代	竪穴住居(1)、溝(4)、掘立柱建物(9)	須恵器、土師器、木製品、石製品				
	官衙	奈良時代後半～平安時代初	掘立柱建物(10)・塚(2) 溝(4)、土抗(2)	須恵器、土師器、黒色土器、瓦器、瓦、円面硯、風字硯(黒色土器・灰釉陶器) 須面硯、転用硯、緑釉陶器、二彩陶器、灰釉陶器、土馬、墨書土器、土鏃、製埴土器、木製品		伊賀国府の政庁を国町地区で確認。在続時期は奈良時代後半から平安時代後期。		
		平安時代前期	掘立柱建物(9)・塚(2) 溝(7)、土抗(11)					
		平安時代中期	掘立柱建物(6) 溝(8)、土抗(12)					
平安時代後期	掘立柱建物(3) 溝(8)、土抗(7)							

---

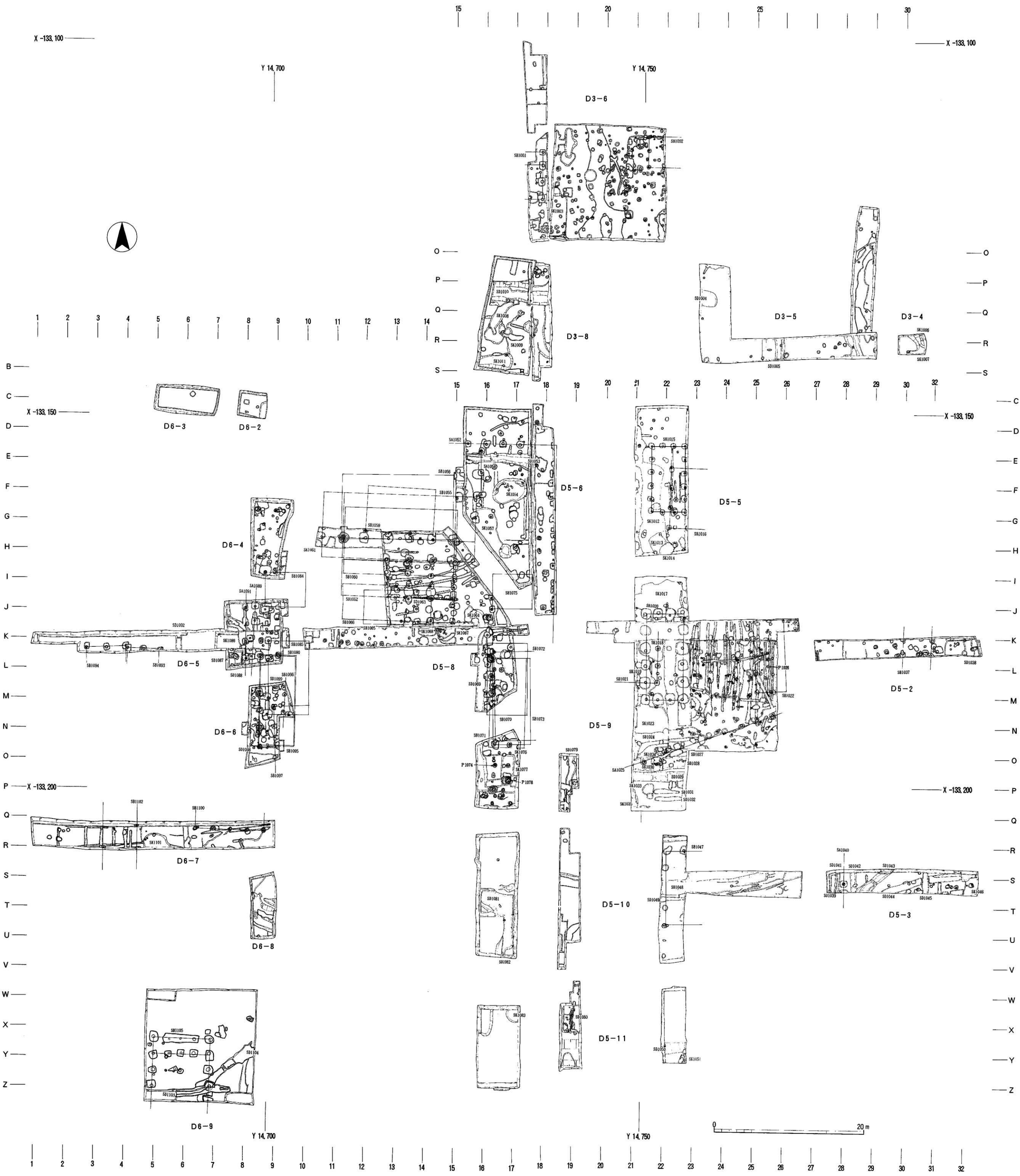
三重県埋蔵文化財調査報告 99-4

伊賀国府跡（第4次）発掘調査報告

1992年3月

編集 三重県埋蔵文化財センター  
発行  
印刷 光出版印刷株式会社

---



国町地区遺構平面図 (1:200)